366.6
Su814r

0037948000

0037948-000

366. 6－Su814r

労働運動二十年

鈴木文治・著

一元社

1931

AGF

ㅗ95-55

鈴木文治著

勞働運動二十年

一元社版

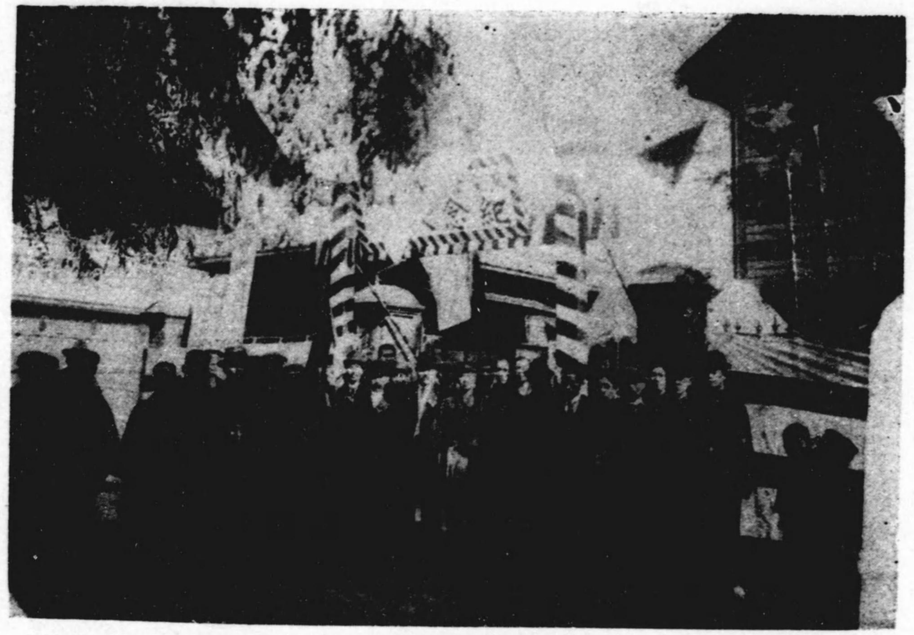
著　者

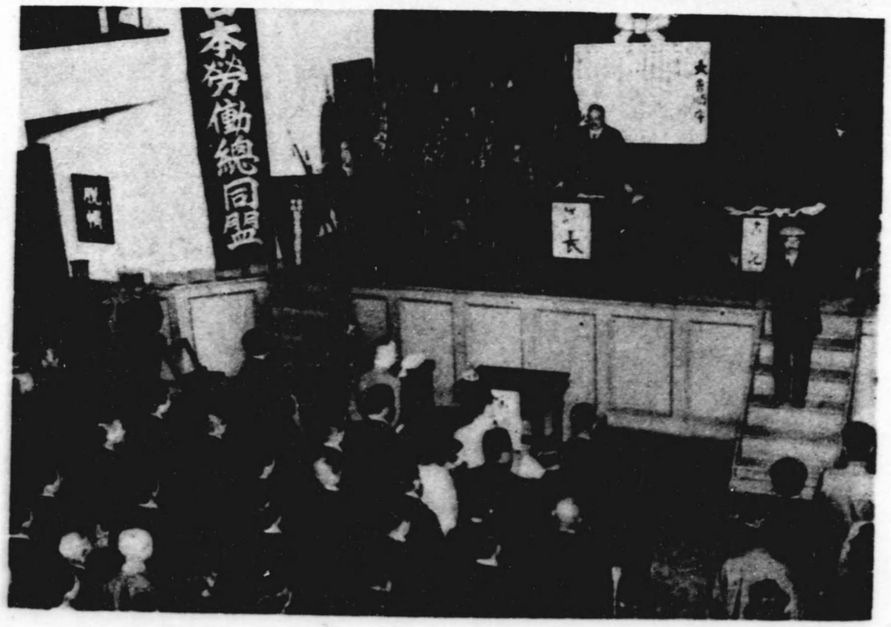
366.6
Su814r

國會圖書館
40.2.11
官藏圖書

贈寄
浅沼亨子殿

662149





（上）友愛會二週年大會
（下）總同盟第十八回大會

鈴木文治君の素描

——序文に代へて舊稿を錄す——

吉野作造

鈴木文治君は今度（昭和五年十一月）の大阪の大會で突如總同盟會長の辭退、兼ねてまた全然總同盟幹部の地位からの引退を聲明した。滿場は泣いて留任をせまり斷乎として承認を肯ぜぬ。寢耳に水の聲明なので新聞なども鈴木君の眞意を忖度し兼ねてゐるやうである。かく仲間では惜み世間では訝かつてゐる間において、獨り親友の一人として私は同君のこの行動を贊し、その聲明の妨げられずに實現せんことを祈つてゐる。無論それには相當の理由がないでない。

◇

鈴木君を私が始めて識つたのは日清戰爭後間もないころのことである。同君は私の郷里から六七里隔たつた隣郡の一小邑の作り酒屋の息子だ。私の郷里に新設された中學校に入り私の友達の小學校教師に預けられたので知り合ひになつた。そのころ私は高等學校の生徒で夏冬の休み以外には滅多に歸らない。從つて鈴木君とさうたび〳〵遇つたわけでもなし、かつ年も可なり違ふので話をし合ふことは殆どなかつた。多分鈴木君は私が友達の小學校教師と語り合ふのを傍から驚歎の情をもつて謹聽したに止まるであらう。だから本來なら鈴木君と私との間には先輩後輩の淡い關係はあつても、同年輩の者同士に見るやうな濃厚な友情は起らないはずである。それが實際はさうでなく、そのころから既に兄弟のやうな親しみを有つに至つたのは――鈴木君の方にはどういふ理由があるか知らぬが――私の方からいへば鈴木君が餘りにも可愛らしい坊ちやんで、且つ利巧で純眞で程のいゝおしやべりであつたからである。

今は體重三十貫あるといふ。尤も體重の三十貫は昨今に始まつたのではない、二十年來のことだらう。誰か今日この大男が中學一年の時は机の上からやつと首の出る程な、色白の丸ぽちやの人形の樣な美少年であつたことを想像し得よう。尤も鈴木君は中學に入るに年齡が足りないので――あの頃はこんなことも出來たのだが――戸籍をごま化して何ヶ月か多くなつてゐると聞いてゐる。しかしそのためばかりではない、一體に粒の小さい柄であつた。實はこの點は私も同樣で、今は五尺四五寸あるが二十歲位までではどうしても五尺に達しないので大に悲觀したものだつた。その私が彼れを恐ろしく小さい坊ちやんだと思つたのだから、以て如何に當年の鈴木君が可憐な少年であつたかを推測し得よう。

◇

鈴木君の實家は後になつて考へて見ると、そのころから段々不如意になつてゐたらしい。併し相當の豪家であつただけまだ遣繰りはついてゐたのであつたらう。從

つて同君は中學卒業のころまでは家運の傾けるを知らずに過ごしたやうだ。年老つた祖母があつた。兩親も無論彼れを掌中の珠と可愛がつたが、祖母さんはさう何時までも孫の顔を見ずにはをれない。毎週土曜の晝過には實家から立派な迎への人力車が來るといふ始末だ。これは一例に過ぎぬが、詰り兩親は金に飽かして彼れを育てたのである。これを以て觀ても、彼れの少年時代は何一つ不自由のない甘やかされた生活で一貫したことが分るだらう。これが鈴木君のために幸であつたか否かは容易に斷ぜられない。彼れの缺點として擧げられるものの中には、右の事情を顧慮することによつて諒とせらるべきもの少からざるを見ると共に、彼れが何處となしに伸ンびりしてをり、逆境に處して悠々焦らず、常に樂天的に構へて平氣に難關に打突かつて行く所なども、修養の結果といふよりはむしろ少年時代の環境の賜ではないかと思ふ。

中學初年生の此の可愛い坊ちやんは容貌から性質から誠に明るい氣分に充ち〳〵てゐた。金持の坊ちやんに有勝の罪のないナンセンスを連發しては人を笑はしてゐた。そして學校の成績は甚だいゝ。それで彼れは皆に可愛がられた。中學の上級生になつたころは身體も大きくなり同級生の牛耳を取つてストライキなどをやつたこともあるが、持つて生れた明るい氣分がついて廻り、陰險とか惡辣とかいふ樣な傾向は微塵もなかつたので、絶えず教師や先輩からは親愛されてゐた。かうした態度は勞働運動に足を入れてからの彼の行動にも一貫した特色となつてゐると思ふ。

◇

中學卒業の前後であつたと記憶する、傾き掛けてゐた彼れの實家の運勢は最後のどん詰りに陷つた。一家離散、鈴木君は高等學校へは這入つたが學資は一文もなく出來れば兩親弟妹等の面倒までを見ねばならぬ窮狀に陷つた。これより彼れの艱難時代が始まる。高等學校から大學を卒業するまでの前後七年、その間自分の學資を作るばかりでない、時には幾分兩親の家政までを助けねばならなかつたのだから、

その辛勞の一ト通りでなかつたことはいふまでもない。けれども私が友人として彼れの當時の窮狀を回想するに、彼れが貧乏に叩き叩かれたといふを世の常の意義に解するのは正しくないと考へる。かういつては鈴木君に叱られるかも知れぬが、同君はあれほどの貧境に落ちて、しかも遂に本當の貧乏の經驗をする機會を捕み損なつたのではなかつたかと思ふのである。

その故はかうだ。彼れが異常の窮境に陷つたと聞くや、友人の誰彼は直に彼れを救ふべく起つた。不自由させなかつたといふのではないが、同じ樣な境遇の他の多くの例に比較すれば、彼れは此點で實は頗る幸運であつた。畢竟彼れの生來の愛矯が自ら求めずして多くの同情者を奮起せしめたのである。彼れは本來頗る天眞爛漫であることは先きにも述べた。そのために彼れは自分の窮狀を必要あれば隱す所なく誰の前にでも打明ける。痩我慢の一刻も張り切れる男でない。是また彼れの一德で、ために所在に同情者を作つたものらしい。虛飾といふことを知らないから、世話になつた人には平氣で頭を下げる。人前を憚りて爲すべきを爲さなかつたといふ樣なことは、彼れとの長い交際において未だ嘗て見たことはない。從つてまたさうした關係の人から賴まれれば如何なる事でも勞を厭はない。大學の學生時代、大掃除といふとよく私の家へ來て緣の下の塵埃さらひや便所の掃除までやつて呉れた。これを傍から見たら鈴木君のために一掬の涙なきを得ずなどといへぬこともないが賴む方は固り賴まれる方も一向平氣、終日私の陋宅の客となり、大騷ぎにはしやいで喜んで歸つて行く。洵に氣の置けぬ好人物で、本人も決してこれを以て貧故の苦勞とは思はぬのである。尤も鈴木君には一種の創作的天分がある。時に自分の經歷を回想し、これを一個の立志傳に作り上げて自己陶醉に耽ることもあるらしい。早いころ私も一度これを彼れの講演に聽いたことがある。涙なしに聞かれるものではなかつた。しかしかうした窮乏は彼れの魂をどれだけ苦しめたか。世間並にいへば大に苦しんだはずだ。私からいはせれば、客觀的には彼れの愛すべき性格が過分に

同情者を集めて不十分ながらも苦惱の原因が和げられてをり、主觀的にいへば彼れの樂天的素質は貧に苦しめられて人を怨まずまた疑はず、毀譽褒貶に超越して與へられたる境遇を樂んで行く。私から觀れば今日の鈴木君は依然として三十年前の文ちやんに外ならない。

◇

鈴木君は能く變な金を持つて來ると難ずる人がある。來るものは拒まずとは學生時代からの性格だから、或は少し位の疎忽はあらうかと考へる。併し彼れには惡意を以て不正の金を貪り、平然として節を賣るやうなことは斷じてないと信ずる。金錢の受授については今日の地位に在つてはモ少し愼重であつていゝと思ふが、金によつて彼れの良心を左右し得べしと考ふる人があらばそは大變な誤算であらう。

鈴木君に相當の財產が出來たといふ噂があるとやら。勞働運動の大將で金の出來るはずのないことはいふまでもない。勞働運動を餌にして金を作るの辣腕を鈴木君に認めんとするは餘りに殘酷だ。疾風の眞只中に立ち英氣颯爽として三軍を叱咤する彼れの雄姿に接するとき、彼には何事もなし得ぬことは無いだらうなどといふ人もあるそうだが、他の一面において彼れは洵に單純で裏も表もないたゞ見たまゝの男なのである。金など作れる柄ではない。それに彼れは金の持てぬ男である。一圓もうければ二圓使ひたがる男である。昔あれだけ貧乏したのだから、もう少し儉約してもよかりさう、何とか節約して少しは貯を作つてもよからうと私共は思ふが、金があると何か他愛もないものを買つて喜んでゐる。さうでもないと後輩を澤山集めて彼れ相應の大盤振舞ひをやる。好意を寄せる部下から金持と見られ、素質を知らぬ他人から贅澤と疑はれるゆゑんである。私はこゝに彼れの不謹愼は認める。けれども結局において、これは矢張り彼れの一美點をなすものであるまいかと考へて居る。

右の如き性質は勞働運動の尖端に立つ闘士として——殊に今日の場合——殘念な

がら重大なる缺點と觀ねばならぬことは勿論だ。今日までの彼れはかういふ缺點を有つてゐたからこそ、毀譽褒貶を尻目にかけて傍目も觸らず多難な勞働運動を指導して來たのだといへる。しかし時勢の進みは早い。今後も依然として從來の運動を繼續するには、彼れに新たな修養が要る。其修練に身心を投ずるにはもう時機は遲過ぎた。年と共に聰明を開いた彼れが、こゝに自らを反省して轉身の決心を定めたのは頗る時の宜しきを得たものと私は思ふ。

◇

總同盟の會長として一方からは隨分ひどい非難を受けた。併しその非難たるや、總同盟の會長といふ地位を顧慮して非難さるべき性質のもので、彼れは一個の市民として決して普通人以上の許すべからざる缺點を多く有するものではない。普通人として許せるからとて總同盟の會長たるを妨げぬといふ理窟はないが、過を見てその人を察するといふ筆鋒からいへば、あの呑氣な不謹愼がまた永く彼れを會長の位置から放し得なかつたのでもあるだらう。現に今度の勇退聲明に際しても、代議員諸君は容易に後繼會長に任じ得る者を見出し難しとて、彼れの引退の希望を容れなかつたといふではないか。とにかく彼れには一種の德がある、人をひき附ける魅力がある。之が彼れのいはゆる缺點として數へらるるものと相表裏するものあるかに私には考へられてならない。

この多難の秋、總同盟を去るのは怪しからぬといふ人もある。しかし三錢切手一枚で濟む所へ二枚貼る必要はない。總同盟は鈴木君を不要とはせぬだらうが、彼れの多年の鞠養によつて今は立派に一本立ちが出來る。むしろ濟々たる多士、何れを頭目にいたゞくかの選擇に迷ふ位だが、鈴木君が居れば却つていつまでもこの點がきまらない。鈴木君は會長としての使命を終つたとは考へてゐぬらしいが、後進に途を讓つて自分は側面から勞働運動を援ける、之が合理的であり能率的であり且又勞働運動の本筋でもあると、近年つくづく考へ込んだ樣である。私はこれは鈴木君

のためにも總同盟のためにも結構なことだと、相談を受ける度ごとに賛成した。これらの點をモ少し詳しく述べて見たいが、時がないから他日のことにゆづる。

◇

私は嘗て鈴木君を必ずしも實際運動の適任者でないといつたことがある。これは同君の殘した業績からいふのではない。子供の時からの親友として彼れの素質を知り切つてゐる私は、寧ろ他の方面により高き彼れの能力を認めて居るからである。彼れには多少學究の資質がある、文筆においては早くからその方面に活躍させたら稀に見る雄才となつてゐたらう。その方は芽を吹き掛けてやめたから、私の豫想の當るかどうかは分らない。業績の點から觀て實際運動必ずしも不適任ではない樣だが、今度彼れが轉身して何の方面に活躍の新舞臺を開くかを考ふるとき、兎に角彼れはこの實際運動から離れても、決して新しい境地の開拓に苦しまぬだらうことを想像し得ぬでない。その點友人としては十分安心してをられる。

自序

十年一昔といへば、大正元年以來早やもう二昔になる。年少志を勞働運動に立て奉仕茲に二十年、今や內外の事一通りを終へて、一歩退却せんとするに臨み、既往の半生を顧みれば、感慨正に無量なるものがある。私は此機會に於て聊か往事を回想して一片の記錄を殘すことも亦無意義ではあるまいと信じ、敢て執筆を試みた。

◇

いざ筆を執つて見ると、既に記憶の薄れたものもあり、史實に遠いものもあり、人事に關するものは、現存の人物にして濫りに品隲を許し難きものもあり、甲に繁にして乙に簡なるものも出來、實に容易の業にあらざることを知つた。併し自分としては半ば自傳であり、半ば備忘錄であるといふ積りで記述した。日本勞働運動正史の記述に至りては、他に自から其人ありと信ずる。たゞ野田爭議並に團體協約等

について記述出來なかつたのは遺憾であるが、これも別に夫れ〴〵當事者の著書があるから、それを以て補ふことにし度い。

◇

總同盟會長辭任の事情に至つては、當時既に聲明書中に於ても述べた通りで、果實成熟して木より落つるが如く、創立者としての私が創業時代を終つたと信じて、其地位を去つたまでで、何等、他奇もなく又他意もないのである。且つ時代其者が友愛會を創立した時とは非常に相違してゐる。其器にあらずして長く其地位に留まる結果、若し過まつて勞働運動の進展を沮み、潑溂たる進取の精神を鈍らすやうなことがあつてはならないのである。況んや日本のやうなテムポの早い國では、事ろ社會運動の先達の如き、時々目先を變へて新鮮の氣分を喚び起すことも一方法であらうと考へる。夫れにしては二十年はちと長きに失した觀がある。

◇

今後の私の仕事に就ては寧ろあり餘る程である。勞働問題の調査研究、出版、勞働者教育事業の如き、即ちこれで、いづれも私には荷が勝ち過ぎて居る。私の兼ねての理想の一つは、日本にもデーリー・ヘラルドが一つ欲しいといふことである。そして所謂ブルジョア新聞に對抗して、無產階級新聞でも立派にやつて行けるものだといふことを立證したいと希つて居る。今一つは勞働大學を完成して、無產階級の子弟でも、頭のいゝ者は、基礎教育が不規則でも、見事に大學教育に堪えるものであり、國家棟梁の材たり得るものなることを示したいのである。更にも一つの念願は、無產戰線のための參謀本部——調査所を完成して、他日——何年後か何十年後か知らないが——無產黨が天下を取つた時、從來の既成政黨のやうに、先づ「調査會」「審議會」を設くることをせず、平素の研究調査によつて、直ちに立案し、即日よりでも政策の實行に取りかゝり得るやうにし度いことである。そして先づ差當りての念願は、もう少し時間の餘裕を作つて書齋の人となり、長年實際運動のため

に疎放になつて居る頭の整理をしたいといふことである。多少頭の整理が出來たなら、重ねて所懷を一管の筆に托して、何事か世に問ひたいと考へて居る。

◇

本書の說述に當つては、專ら自分の記憶に賴つた。從つて客觀的事實に就て多少の相違があるかも知れぬ。併し出來る丈け事實の精確を期するために、友愛會時代よりの總同盟の機關紙、「友愛新報」「勞働及產業」「勞働」等を參照するは勿論、協調會發行の「最近の社會運動」、大原社會問題研究所發行の「勞働年鑑」、總同盟發行の「大正十四年度勞働年鑑」、藤田浪人氏編輯の「社會問題大觀」、並に赤松克麿氏著「日本勞働運動發達史」等を參考し、部分的にはこれ等の諸書より數節を援用したところもある。茲に謹んで以上の編著者に謝意を表する。

昭和六年初夏鎌倉の書屋にて

鈴木文治

勞働運動二十年

目次

一　生ひ立の記……三
一　搖籃時代……三
二　中學時代……七
三　高等學校時代……一三
四　大學時代……二〇
五　活社會の門出……二八
六　實行運動の準備……三八

七　勞働運動創立の動機……四六

二　創業時代……五二

一　友愛會の創立……五二
二　顧問、評議員の人々……六四
三　友愛新報の發行……七六
四　最初の勞働爭議……八八
五　排日問題と友愛會……一〇九
六　當時の勞働事情……一二六
七　友愛會の生長發達……一四七
八　米騒動……一六三

三　飛躍時代（大正八年――大正十三年）……一七〇

一　一般狀勢……一七〇
二　協調會の設立……一八六
三　第一回國際勞働代表問題……一九八
四　普選運動……二一四
五　最初のメーデー……二二六
六　神戸大勞働爭議……二四〇
七　工場委員會……二六三
八　サンヂカリズム……二七八
九　農民運動……二九一
一〇　勞働者教育運動……三〇五

四　整理時代……三一九
一　方向轉換……三一九
二　大震災……三三一
三　第一次分裂……三四五
四　無產政黨運動……三五八
五　勞働運動の現勢……三七三
六　將來の展望……三九〇

勞働運動二十年

鈴木文治

一生ひ立の記

一　揺籃時代

自傳を叙ぶることは自分の柄ではない。柄でないことを知りつゝ、尙敢て敢てこれを物する所以は、自分は人から屢々「君は如何なる動機で勞働運動を起したのか」と問はれる、此問に對して答へたいためである。此問に對して答へる丈けなら、何も格別長々と自傳なんかを叙べる必要がないではないかといふことになる。併し自分の場合は、特にこれ〳〵のことに感激して、勞働運動を起すに至つたといふ特殊の事情があるのではない。後から考へて見れば、あれだこれだと思はるゝ節もある。それが自分の生立、生活環境、體驗の中に織り込まれて居る。否むしろこれ等の中から止むに止まれず、押し出されて來たといつてよい。必ずしも自分に限らず、自分と同じやうな境遇

の下にあつたなら、自分と同じやうな性格の持主なら、恐らくは誰れでも、勞働運動を起して居たであらう。自分は要するに同じやうなことを仕出來すべき、何百人か何千人かの一人なのだ。特製の人間ではなくて出來合なのだ、此出來合の人間——然も特殊の訓練と技能とを兼ね備へたる出來合の人間——は今日ザラにあるやうになつた。これ自分が勞働運動廿年奉仕の今日に於て、所謂指導者の立場を去つてワキ師の役に廻らうと決心するに至つた根本的理由である。私は此機會に於て少しく自分の過去を顧み、可なり波瀾のあつた半生の經歷を物語るも穴勝ち無用であるまいと思ひ立つた。それには矢張自分の生ひ立ちについて語らねばならぬ。

* * * * * *

宮城縣栗原郡金成村——古く舊記を按ずれば、その昔源義經が兄頼朝の笞を逃れて、北の國へと落ち延びた時、その東道の主人を勤めしと傳へられる金賀吉次の出生地——これが私の生聲を揚げた土地なのである。西に高見山といふ小高い丘陵を控へ、東に金成廣土といふ縹茫たる平野を控へて居る、迫川は遠く栗駒岳に源を發し、右廣土の据を縫うて帶の如く流れて居る。春の花を愛づべき名所とてはないが、夏の青田の上を吹き來る涼風、秋の稻の黄金の波の眺めなど、流石に忘じ難き思ひ出の種ではある。殊に隣村澤邊は螢の名所であつて、生地金成は鈴蟲の名所である、思出は秋に於て深きものがある。私は此村の酒造家の悴として生れた。

家は舊家だといふ、舊家といつても特に誇るべき由緒があるのではない。何でも先祖は關西邊の武士で、浪人をして北國に流れ行く道すがら、何かの緣で金成村に足を註め、そのまゝ寺子屋の師匠として一生を終つたとのこと。何代目かの後裔が私の曾祖父で安治といつた、この人は相當の器量人で、且つ文に書に巧みであり、殊に俳句の趣味あり、當時俳友を全國に持つて居たやうである勿論舊藩の時代のことゝて、村の泉屋といふが大庄屋で、附近五十何ケ村(小部落の)かの束をして居り、祖父はその番頭とか手代とかいふ名儀であつたさうなが、實權を握つて居つたらしい。その頃の大庄屋といふのは、今でいふ行政司法の兩權を握つて居つたらしく、稅も取立てれば罪人も審くといふ有樣であつたとのことだ、然るに曾祖父安治は天性慈心の深い人のやうで、稅を取立てるにも、罪を審くにも、可なり情けを以て臨んで居た。從つて輿望自づから集まり、人大に德として居たやうである。今は跡方もなくなつたが、自分の生れた家といふのは百年とかの古い家で、太い

梁や柱が使つてあつた、これ等の諸材や人夫や手間は殆んど悉く當時安治を德とする人々の寄附で出來たのだと、祖母が語り聞かしたのを覺えて居る。殊に臺所は特別に大きくて、土足でも踏み込んで焚火に當れるやうにしてあつたが、その臺所には珍らしい木の八枚の板戸があつた、これはタガヤサンの戸だから大切になさいと母からよくカラ布巾で拭かされたものであつた。

祖父泰治の時代になつて、農の側に麹屋を業とした、自家用料酒が廢さるゝに至り、父の代になつて、酒造業を始めた、而して此酒造業こそ、一家の運命を浚落に導く魔の商賣であつたのである。

始めの間は相當榮えた、家も或る程度まで富も增した、併し父は所謂舊家の一人子育で商賣の經驗とて乏しいのであつた。かくて私の十七八歲の頃——自分の中學四五年の頃——に至つて、連年不良酒の醸出に損亡を重ね、加ふるに惡杜氏の手で良酒は盜み出され、酒造稅の賦課は重く、重代の家運は益々傾き、自分の中學卒業の頃は最早二進も三進も行かないまでに加速度を以て浚落して行つたのである。

私の小學兒童の頃、郡に栗原會といふ團體があつた——今でも存在するが——それには多く鄉關を出でゝ中等以上の學校に就學してゐる學生が會員となつてゐた。それ等の學生は夏の休みになると、隊を作つて各村を演說をして廻つたものである。一と夏、私の村にもこれ等の人々が演說に來た、村の學校の講堂で、今行政裁判所評定官の遠藤源六博士が、大學生の制帽をかぶつてやつて來た、私は子供心にその演說に聞き惚れた、そして大學生といふものは、えらい者だと思ひ込んだ私は何でも大學を卒業して立身出世をしなければと心に誓つた。併し此夙昔青雲の志も、家運の沒落に際會しては、手も足も出ない、正に幻滅の悲哀を味はねばならなかつた。「かくて十八歲にして中學の門を出でた頃には、私は隣村の小學校へ代用教員として、月給十圓で雇はれて行く話さへ纏まつたのである。」

二　中學時代

「思へば私の中學時代は、一代の花であつた。家は必ずしも富めりといふことは出來ぬまでも、格別不自由といふことを感じなかつた。中學のあつた町は私の生地より八里離れた古川町——吉野作造博士の出生地、私はこゝで十三歲中學一年の時、二十歲仙臺一中卒業の吉野氏と會つた。爾年交

遊三十五年、兄弟に等しい友誼を續けてゐる――に行つて居たが、毎週土曜日の午後は人力車を仕立てゝ必ず家に歸つた。そしてその車夫を一泊させて更に月曜の朝までに學校へ通つて行つたものである。夏休みになると、家の作男が馬を曳いて迎えに來た。私は此馬に乘つて國道八里を歸省したものである。

春、夏、冬、學期毎の休みといふ休みには、探勝旅行に出かけるか、溫泉行かをしないことはないといつてもよかつた。私は多數の弟妹のあつた長男に生れたが、一家にありては前途に多大の望をかけられた寵兒であつた。父は私のために費用のかゝるのを厭はなかつた。それは可なり身代が傾いた後までもさうであつた。後に之を知つて勿體ないと思ふやうなこともあつた。

私は多情多感の少年であつた。よく感激しては泣いたものである。故に子供の折は『泣蟲』と言はれた。さういつた故か私は多少文學の素質を惠まれて、小學校より高等學校を卒へるまで、作文の點數は常に滿點に近い成績を收めた。俳句の眞似もやり、和歌の眞似もやつた――いづれも眞似丈けで終つて仕まつたが――高等學校時代には校歌の懸賞募集に當選したり、その頃流行つて居た萬朝報の懸賞短篇小說に應募したりなぞもした。そして中學の頃は作文など屢々先生から模範として張出されたことがあつた。そこで舊い友人などで、いよ〳〵勞働運動に入るまでは、私を文學士と思つて居る者も少からぬ有樣である。然るに高等學校を終へて大學に入り、法律や政治を學ぶに至つて、私に惠まれて居た多少の文學的賦能は、若き芽生えにして死滅して仕まつた。

私は又一面に於て、理窟つぽい少年であつた。よく理窟を並べては先生を手こずらしたものだ。中學三年の時であつた。丁度仙臺二高在學中の吉野氏が休みで歸省の際、相談をして――といふよりむしろ勸められて――興風會といふものを發起した。ところがそれが校長の忌諱に觸れたものゝ如く、何回も校長室に呼び出されては、解散するやうにとの說諭を受けた。校長としては、學校の生徒として、一個の團體を組織させておけば、やがてストライキの原因にでもなると考へたらしい我々としては大に一致團結して校風を興し、元氣を振作するといふに、さういふ誤解に出發して、遂には未成年者にして結社を組織し加入することは法の禁ずるところだとまで言つて脅された。私は自分の下宿して居る家の隣家に、町の區裁判所の檢事を訪問して、日本の法律にさういふことがありませうか質ねたのである。檢事は笑つて、「それは政治結社のことでせう。學生が修養や研究や親睦のために團結をしたとて日本のどの法律も禁じては居ませんよ。」といふことを聞いて天にも昇

る心地し、早速學校に取つて返して、校長室に談じ込み、逆捻ちを喰はしてやつたことがある。爾來校長からはひどく煙たがられたものである。

それから博物の先生である。地文の時間の時、天地創造の講釋をして、天地の根源は霞雲星から出て來たと斷言したので、私は直ちに立ち上つて、それではその霞雲星の根源は何ですかと質問して、先生を問ひ詰めたところ、先生無言で睨めつけ「生意氣だ」と許り答ふるところがなかつた。

それから五年生のときである。私は町の正教會の會堂の一室に寄宿してゐた。正教會とは俗にニコライ派、グリーキ・カソリックのハリストス教會のことで、東北の各地に比較的廣くおこなはれて居るが、私の家族も信徒の中に加はり私などは七歳の折、白衣の姿で洗禮を受けたものである。私はその緣故で半歳あまり古川の正教會堂の一室に起臥した。然るに此教會の隣りに天理教會があり、朝夕大勢の信徒が出入しては「惡きを拂ふて助け給へ」と踊りはやすのである。私は勉强の邪魔になつてうるさくてたまらなかつた。そこで教會の青年達を糾合して音頭取りとなり、こつちも負けずに讃美歌を歌つたり、詩吟をやつたりして大に威を示して居た。それが日頃天理教師の癇にさわつて居たものと見え、或日牧師の不在につけ込んで問答にやつて來た。私はその頃中學五年の理窟屋であり、正教會の神學書や、其頃問題になつて居た中江兆民居士の「一年有半」又その駁論を讀んで、多少哲學的の頭も出來て居たので、得たりや應と對面し、習ひ立ての哲學論科學論を振り廻してあまり教養のない、子供と思つて見くびつてかゝつて來た天理教師を散々にやり込めたので、遁々の態で逃げ出して行つたことなどもある。

かくして中學五年の課程を終つた。中學時代は比較的順調であつた。格別不自由を知らずして過した。併しかくも私が夢のやうに惠まれたる學生々活を過してゐる間に、家運も次第々々に傾いて卒業の頃にはもうどうにもならぬまでに立ち到つて居たことは、前に述べた通りである。

私は得意の絶頂から失望の絶底に突き落された。急に眼の前が暗くなつた。小學時代より心に描いて居た青雲の志は、今はもう一場の夢となつた。併し悲境に泣いて居る父母のことを思へば、——幼い弟妹等のことを思へば——さうだ小學校の先生なりなんぞして、少しでも兩親の肩を緩めやう——かう決心したのであつた。

その時である。或日母は父と一座して私を一間へ呼んだ。そして無言で父と私の前に一つの小袋を差出した。開いて見るとそれは粒や延の古金銀の幾許であつた。母の生家は父の家よりも家柄も

古く且つ身代も大きかつた。その屋敷は昔「館」と言はれたといふ、母の嫁する頃はこれも可なり家運が傾いて居たといふが、それでも萬一の用意の爲めか、多少の古金銀を古代更紗の袋に納めて祖父が母に渡したものらしい。母はこれを長年鏡臺の小曳出しに秘めてあつた、それを今、我が子が失望落膽の極、顏も靑ざめ食事も進まぬ有樣を見て、投げ出したものと知つた。

私はそれで兎に角仙臺へ出た。準備が不十分で成績も自ら意に滿たなかつたが、それでも八月になつて合格の通知に接した。併しそれは山口の高等學校である——その頃は全國一齊に入學試驗を行ひ、成績と志望順によつて全國に振り分けたものである——ところで山口までの旅費が又心配の種となつた。

今度は父の番である。——此度も母は嫁入りの時に携へて來た電甲の櫛や笄や、珊瑚の根がけの類を持ち出したが、村の質屋はこれを質草に取らず、止むなく父は未だ酒倉の一隅に殘つた大釜を三里餘を離れた町へ賣りに行き、漸く三十餘圓の金を纏めて私に與へた。私は一先づ東京へ出たそして吉野作造、內ケ崎作三郎兩先輩と相談し、內ケ崎氏の知己たる當時山高の敎授戸澤正保先生に同兄より紹介狀を貰ひ受け、心細くもたゞ一人山口くんだりまで出かけて行つた。時恰も明治三十五年九月初め、私は數へ年十八歲、鄕里の都仙臺以南へは全くはじめての旅であつた。

三　高等學校時代

戸澤先生には先づ保證人になつて頂いた。そしてその御紹介で直樣寄宿舍に入つた。漸く入舍したものゝ差當り困難したのは、制服調製の問題である。學校からは矢の催促であるし、金はもう一錢も持合せがない。その頃の敎頭は橫地先生といつた、——後山口高商第一期校長となつた人——もう相當の年輩であゞ髯を蓄へて一寸恐い叔父さんであつた——此先生から度々呼び出されて注意を受けた。私は入學後一ケ月あまりも私服で登校してゐたから——あまり度々なので私も少々腹が立ち、たしか一度學校は人材の敎育が主か洋服調製が主かと先生に喰つてかゝり眼玉の飛び出る程叱りつけられたことがある。此橫地先生が今は高齡に達し、退職して閑地に就て居られるが、昭和五年十一月の學士會月報に、山高當時の思ひ出話を寄稿されてゐるが、その中に私の事などを引き、いつぞやの學藝大會に私が演說の選手として出場したことがあるが、當日鈴木文治の演說が最も

出色の出來榮えであつたなどゝ、褒めて居て下さるところを見ると、私の樣な者でも今尙記憶に留めておかれるのかと思つて有難い心地がした。

漸くのことで父より送金あり、金八圓を投じてヘルの制服を作つた。併し外套の調製費はない。一年間は外套なしで通した。翌年になると、私よりは二年の先輩で、寄宿舍では中寮の寮長をしてゐた筧正太郎君（前東京市電氣局長）が卒業に當つて、その古外套を譲つてくれた。これをその後二年着續けたのである。靴にも困つた。寄宿舍から學校へは廊下つゞきだから大抵草履で濟ましたが、體操の時、外出の時はさうは行かない——大抵の外出には山桐の下駄で通したが——止むなく四十二聯隊の營舍の前の古靴屋へ行つて、兵隊さんの古靴を二十五錢で買つて來て穿いたものである。和服は高等學校在學三年間一枚も送つて貰はないから、それはとても見るに忍びざる有樣であつた、袴の如きはボロ〳〵に破れたのを、觀世撚でつないで穿き通した。

困つたことはその年東北の大飢饉に出遇つたことである。東北といつても重に青森、岩手、宮城といふ所謂三陸地方であつて、それも宮城縣は比較的輕かつたが、兩親は大勢の子供を抱へてその日の生活にすら窮してゐたのだから學資がパッタリ途絶えて仕舞つた。私は鄕里を出たのは初めてである。そして多感の青年である。右も左も他人である。身は天涯の異域に在りて——當時は實際さう思つた——嚢中無一文、月謝の催促、舍費の督促に、どうとも思案にあまり、煩悶懊惱の日を送り夜を迎へて居た。當面の窮乏生活が原因をなしてゐるには相違ないが、我れ何の爲めに生くるか、何の爲めに學問をするか、世間の幸運逆運の存在する理由如何、貧富の懸隔に依る差別待遇といつたやうなことに頭を取られ、よく放課後に學校の外廓をなして居た堤防の上に横はつては、青空を眺めつゝ長太息を漏して居た。私は「皓天」といふ雅號を持つて居て、時々落書同樣に揮毫を求められる折に用ひるが、これを赤松克麿君の如きは、當時よく天を仰いで浩嘆したので名づけたなどゝ宣傳して居るが、これは事實相違である。何もこゝで辨ずる必要もないが、私の雅號の由來は內ケ崎吉野二先輩に肖かつたのである。その頃雅號を用ひることが流行であつた。內ケ崎兄は愛天と稱し、吉野兄は翔天と稱してゐた。私は丁度莊子を習つて居た折なので、その中より取つて皓天といつたに過ぎない。併し事實天を仰いで浩嘆之を久しうすることは毎日であつた。毎夜であつた。或時は北米行を決心した。或時は死を思うた。死を思うて決せず半夜鴻城龜山のほとりを彷徨うたこと幾度か知れぬ。丁度その時のことである、一高の秀才藤村操君が、彼の有名な「巖頭の

感』を殘して華嚴瀑下の鬼となつたのは、思へば藤村君は私と同年であつた。同時に受驗したのであつた。たゞ彼れは秀才の故を以て一高に入學し、私は鈍才の故で山高に入つたといふに過ぎないその頃マルクスは流行らなかつた。併し人生觀、世界觀に思ひ惱む青年は甚だ多かつた。私は生來の多感兒なるが上に、生活の窮乏に苦んで居たので、尙更日に夜に煩悶懊惱にさいなまれたのであつた。それにしても私には當時藤村君の所謂『ホレーショの哲學』とは何の事か見當がつかなかつた。私はこれを戸澤先生に尋ねたところ、先生は『自分もホレーショといふ哲學者のあることを知らない。多分沙翁劇中の人物を引いて來たのであらう』といふことであつた。

藤村君の死は感傷的の青年達の間に一大センセーションを起した。そしてその死を眞似る者が續出し、日光署はために華嚴の瀑布に巡査を派遣し、瀑布に近づけないやうに柵を圍らす必要を生ずるに至つた。私は山口から日光まで死に行く程の旅費も持たなかつたが、藤村君の死がとても羨ましかつた。併し私には人生も分らず、靈魂の滅不滅も分らず、來世の有無も分らず、一切懷疑のまに死んで行くことは、恐ろしくて出來ないことであつた。

私は毎日鬱々として樂まなかつた。物質の窮乏が苦しかつた。寂しかつた。八百里を隔つる北國の家鄕のことが頻りに懷しかつた。そして人生問題に對する疑惑が心を闇にした。おのづから一種の神經衰弱に陷つたものと見え、或日保證人たる戸澤先生に呼び出されて「一體此頃君はどうしたのか」といつて、眞心を籠めて尋ねられた。私は涙ながらに一切を告白した。先生は非常に同情に堪えぬものゝ如く『そんなら僕の家へ來て玄關番でもするさ、別に學資を上げるわけには行かないが、食つて寢て行く分には心配が要らないから左樣したまへ』と親切に言つて下さるのである。到頭私は先生の家に引取られて、約一年間食客書生となつた。勿論普通に學校に出席することを許され、たゞ朝晩に多少の用を足せば濟むのである。あんまり樂過ぎて勿體ない位であつた。殊に千葉縣の素封家より嫁せられたなほ子夫人は非常に寛大で慈悲に富まれ。家族同樣に待遇された、その恩は終生忘るゝ能はざるものだ。

かくて衣食の途は解決がついたが、肝心の學資がない、教科書や參考書は古本で間に合はすにしても、月謝を納めるに苦心した。當時戸川秋骨先生が、矢張山高の教授で、戸澤先生のお宅の直ぐ近所に居られた。戸川先生はよく各種の新聞や雜誌に寄稿され、又飜譯物も出版された。私はその筆耕に雇はれ、一枚二錢か三錢かで謄寫物を引受け學資の補足にしたものである。一年有餘の後、

當時東京帝大法學部の助教授であつた吉野兄は、私のために仙臺の養賢義會といふより毎月八圓づつの貸費をすることに成功された。そこで私は戸澤先生の家を出て、今度は後河原といふところにあつた美以教會の日曜學校々舍の留守番に住み込んだ。無論間代は無料である。その代り日曜學校を教へ、且つ掃除や多少の事務を取らねばならない。

その頃物價は安かつた。寄宿舍に入れば月五圓位の舍費であつた。併し八圓で一切を辨ぜなければならぬ自分としては五圓の舍費は重荷であつた。そこで留守番に住み込み、食事は一食五錢の食堂に食ひに行つた。一食五錢とはいへ、月には四圓五十錢になる。それでは無料の留守番に住み込んだ甲斐もなく、書籍その他の費用がなくなるので、到頭思ひ切つて朝食抜きの二食を斷行した。飯は盛切りでなくお櫃に入れて出すので喰ひ放題である。私を客とした食堂は恐らく損であつたらうと今でも可笑しくなる位である。朝食抜きはズット行つた、慣れるまでは可なり辛かつた、殊に午前に體操でもあるときは、眩暈を感じて倒れさうになることも少くなかつた。今でも朝食なら抜いて抜けんことはない。學生時代の習慣が殘つて居るのであらうと思ふ。

修學旅行も時々行はれたが、大抵は失敬した。特別な費用は、どこからも出ないからだ。友人などのかゝる折に特別の費用を親元より貰ひ、少しの土産位の買つて歸れる小遣などを以て、欣然旅行に出て行く樣子などを見ては、いつも暗然たる心に閉された。三年間無論一度も歸省しない。しないよりも出來ないのであつた、そこで私は夏休暇にはよく、前述の日曜學校々舍を借り受け、英語や國語の講習會を開き、一人二圓位の講習料を取つて、小遣儲けをしたものである、尤も中學や師範の上級生を相手とするときは可なり苦い思もしたが、それ丈け勉强にもなつた、これが一舉兩得の避暑法だなどゝ痩意地を張つたものである。

卒業の上愈々上京するに際しても旅費に困つた。幸ひ同窓の友人に縣下の素封家の當主あり、同君の同情によつて三十金を借り受け、その後明治三十八年九月より四十二年七月卒業に至るまで毎月十二圓づゝ學資を借りることが出來た。數年前に漸くこれを完濟したが、その好意は今尙深くこれを德としてゐる次第である。

私は高等學校に入學してからハツキリと基督教青年會に入つた。山口の高等學校には羊牢會といふ青年會があつた。同時に佛教の青年會もあつて、一寸競爭の姿だつた。教會としては美以教會に出入した。會員になつたのではないが、會員同樣の働きもすれば待遇も受けて居た。牧師として

は最初に柳原直人氏が居り、後に田中義弘氏（田中淳氏の令兄）が居つた。共に熱心に青年の指導に任じ、聖書の講義に、神學哲學の講演に、大馬力を以て奮闘されて居た。又山口より七里の山奥の秋吉村といふところに本間俊平氏が居られた。大理石の採掘加工を業とされつゝ、實は出獄人や不良少年の感化に渾身の努力を拂はれて居た。信仰は熱烈火のやうな實踐的宗教であつた。本間氏はよく時折七里の山路を踏破しては、我々青年の仲間に來り投じ或は手を握つて祈り、或は臂を執つて談じた、此頃同氏の感化を受けたものは少くない、今日知名の人々もある、私などもその感化を被むつた一人である。私はマルクスの說に部分的には共鳴するところ少からざるに拘らず、尙純然たる唯物論者になり切れないのは、此時代の影響が可なりあると思つて居る。

四　大學時代

愈々大學に入學したのは明治三十九年の九月であつた。私は七月中頃に一旦三年ぶりに鄕里に歸省し、九月一日に上京し、兼ねて先輩の吉野兄や內ケ崎兄等の世話で、入舍に決して居た帝大青年會の寄宿舍に入つた。帝大の青年會はその頃本鄕臺町の崖の上にあつた。

例によつて制帽や制服を作る金がない、制帽は吉野兄のお古を頂戴した、制服は內ケ崎兄のお古があるといふのであつたが、一寸身體に合はんので、何ケ月かの月賦で大分後に新調した。靴はたしか誰れかの貰ひ物であつた。

其頃日露戰爭は漸く終つたが、講和の結果について國民の不滿は實に猛烈であつた。到頭日比谷の國民大會から燒打騷ぎとなつたが、着京四日目に其騷動が起り、私は友人と一緒に本鄕から日比谷までこれを見に行つた。今の帝國ホテルのあるところに內務大臣の官邸があつたが、その塀には桂首相や小村外相の生首の畫がベト〳〵に張つてあつた。警官がそれを剝ぎ取らうとする、民衆は夫を妨げる、押し合ひヘシ合ひの大騷ぎとなつた、遠くから洋傘の柄で巡査の頭を擲ぐる者が出て來る、騎馬巡査の馬に投石する、私は此大混亂の渦の中に捲き込まれて出るも引くも出來なかつた。お上りさんの學生のことゝて石一つ投げもせなんだが、怒聲、罵聲、咸聲、擲る、驅る、打つ、突くといふ騷ぎの中に入れば、つひ石の一つも投げたいやうな氣分になるのである、群衆心理の恐るべきものであることを知ると共に、爲政者一度その措置を過まれば大事到るものなることを

つく〴〵と實見した。

その後數日の間は連日連夜、交番の燒打が續行された、彼方でも此方でも血なまぐさい話ばかりであつた。かくて九月も中ば頃ボツ〳〵學校の講義は始まつた。穗積八束博士の憲法、金井延博士の經濟學、岡田朝太郎博士の刑法、等々〳〵、いづれも田舍學生の私に取つては皆驚異であつた。かくて二年、三年、四年、商業政策、財政、政治學、政治史、銀行論、貨幣論、民法、商法、行政法、國際公法、國際私法、法理學等々〳〵。就中私の胸を捕へたのは四年生の時の桑田熊藏博士の「工業政策」であつた。工業政策は本來金井博士の擔當であつた、併し金井博士が何度目かの洋行中桑田博士が臨時に代つたのであつた。桑田博士は人も知る我國社會政策の先覺者である、同博士の工場法の研究を初めとして、その洋行の結實たる『歐洲社會運動の大勢』の如き、此種文獻極めて稀少なりし當時としては實に貴重なる讀物であつた。從つて同博士の講義は、名は工業政策であつても實は社會政策であつた。工業經營方面のことにはあまり觸れず、主として社會問題を說かれた、工場法のこと、勞働組合のこと、勞働保險のこと、勞働紹介のこと、工業裁判所のこと、消費組合のこと等であつた。私にとつてはその一つ一つが胸を躍らす題目で、最も熱心に聽き、屢々先生を自宅に訪問して親しく敎を受けたものである。私の今日ある生涯の運命は既に此頃に於て決せられて居たというてもよいと思ふ。

一方私の生活の內容は大學四年の全部を通じて頗る惠まれざるものであつた。養賢義會よりの貸費八圓、下關の友人よりの貸費十二圓、合計二十圓の學費は、貧書生の身にとつて勿體ない程の金高ではあつたが、舍費八圓五十錢を辨じて、被服費、書籍費、月謝その他すべてを支拂ふには、あまりに貧弱な經濟であつた。當時の學生は寄宿舍生活をして居る人々も被服費、月謝等を除いて每月二十五圓乃至三十圓であつた。私は當時每日和服に竹の皮の草履で通學をした、制服は外着訪問着にして居た。

その頃、突如として一大厄難が私の身の上に振りかゝつて來た。それは父の重病——危篤に瀕せる——であつた。忘れもしない明治三十九年二月のはじめであつた、大學一年の第二學期を迎へた許りの頃であつたが、或日一枚の端書が舞込んだ、夫は母からのたよりである、チビ鉛筆の端をなめては書きなめては書きしたものらしい、文言は父が十日あまり重病に倒れて、醫療手當の途もなく今は死を待つ許りである、至急歸宅して死目に丈けも會つて呉れといふのである。私は正に電擊

を感じた、眼がグラ〳〵として息も絶える許りに思つた。一家は數年以前より、生れ故郷の金成村にも住み兼ねて仙臺に出て來て居た、もとより資本もないのであるから、何をしても成功せず、窮乏のドン底に陷ち込んで居た、私は自分の困るにつけても、一家はどうして日を送つて居るかと思はぬ日とてはない位であつた、そこへ此の便りである。恐らく電報料がない爲めに電報出すことも出來ぬ位になつて居るであらうと思はれた、涙は瀧のやうに兩眼から迸り出た。私はイキナリ三階の祈禱室に走り込んだ、そして思ふ存分に泣いて祈つた。そして取り敢へず、先輩の内ケ崎兄に手紙を出して援助を求め、同宿の友人の誰れ彼れに事情を話して、即日仙臺へ向けて飛んで行つた。

仙臺の二月であるから、翌朝停車場に着いて見ると町の棟々は一面の雪、地は鋼鐵のやうに凍りついて、寒さは骨を刺すやうである。漸くにして元櫓町の我家に辿りついて見ると、母をはじめ四五人の弟妹は皆父の枕頭に侍して居る。父は私の姿を見つけるや、ワツと許りに聲を立て、夜具の下から痩せさらばえた腕を出して、シツカリ私の手を握り、喘ぎ〳〵、「私はもう駄目だと觀念してゐる、年端の行かないお前には氣の毒だが、母をはじめ家族の事は、何分よろしく賴むぞ」といふのである、私は聲を勵まして「お父さんそんな氣の弱いことを言つてはなりません、私が歸つて來た以上はもう大丈夫です、醫者も藥も十分に出來ますし、養生も出來るやうにします、屹度神樣はお救ひ下さるに違ひありませんから」と言へば唯だ一言『ウム、お前にも會へず死ぬるのかと思つたよ』と言つて、又大粒の涙をポロ〳〵流して居るのであつた。

家はと見れば見るもいぶせきあばら家で、戸、障子、襖、疊、皆散々に綻び破れて居る。極寒の際だといふに、火といふものは父の枕邊に漸く螢のやうな炭團の殘火がある許り、幼い弟や妹等もガタ〳〵慄えて居る、食事もして居るやら居ぬやら、臺所の片隅に粥の小鍋がある許りである、此有樣を見て、私は胸も張り裂ける許りであつた、私の來方が今二三日も後れたなら、父の一命はおろか一家もどうなつて居たか分らないのだ。私は隣室に入つてたゞ一心不亂に祈り求めた、私には實に血の出るやうな必死決死の祈禱であつた、私は身を以て一家厄難に當らせたまへと祈つた、自分の一切のものを捧げ奉る、たゞ父の命を救ひたまへ、一家の窮乏を助けたまへと祈つた、何時間經つたか分らない、祈り終へた時は寒中ながら汗ビツショリであつた。私は祈禱の三昧境に入つて、我れも人も忘れ果てたとき、一道の光明を見た、爾の求むる所爾に聽かるべしといふやうな聲を聞いた。私は心に勇躍を禁じ得なかつた、父の顏色も蘇つて來た、聲に力も出て來た、一家も一

安心といふわけであつた。

私は今玆に奇蹟を說かんとする者ではないが、私の祈禱が應へられたといふ感じは、着々事實として現はれて來た。私の歸鄉した翌早朝片桐淸次老牧師は寒風を衝いて訪づれて來て、敎會員なる良醫を紹介された。病氣は胃潰瘍であつた。過勞と粗食と寒氣が原因となつたものらしい。東京の同宿の友人達は醵金をして約四十圓の金を電送して來た、內ケ崎作三郎兄は仙臺の北數里の生家に急信を發せられて、米、炭、薪、味噌、醬油の類荷馬車一臺を送り屆けられた。一家は人の情に泣かされたのである。

斯くて二ケ月程の後父の病は癒えた、そして仙臺の煙草專賣支局の雇に職を得て、幾分薪炭の資を得ることになつたが、固よりそんな薄給では一家七口は浮ばれない、止むなく私も非常の決心をして親の許へ月十五圓づゝの生活費を仕送ることにした。その頃私は鄉黨の先輩內ケ崎作三郎、吉野作造、小山東助氏等の出て居る海老名彈正氏の本鄉敎會に出て居たが、當時同師主宰の雜誌「新人」の同人となり、毎日曜に師の說敎を筆記して「新人」に載せ、又は「本鄉敎壇」なる小冊子を發行し、後に「新人」の編輯主任となつて多少の賚を得ることにした。日本組合敎會の機關誌「基督敎世界」の東京通信員にもなつた。當時柳原にあつた小林ライオン商店の夜學敎師に雇はれて番頭氏小僧君の勉强のお手傳ひもした。後にはさる人の家庭敎師にもなつて、シイガアの經濟學書を讀んだりもした。そのため私は正規の勉强はどうしても疎か勝ちになつた。七月の進級試驗も全部は受け切れず、止むなく二三課は九月に追試驗を受けて行つた、それでも幸ひに一度も落第丈けはせずに濟んだ。

その頃の帝大靑年會は、一種靈的雰圍氣の裡にあつたやうに思ふ。毎月一回位は當時日の出の勢を以て奮鬪しつゝあつた山室軍平氏が見えた、前記の本間俊平氏も亦、上京の折には大抵訪づれて來た、安部磯雄氏も見えた、海老名彈正氏も見えた、これ等の人々の純眞な靑年に對する人格的感化力は相當大きいものであつた。

同寄宿舍の規則として毎朝起床時間がきまつて居て、朝食前必ず一同三階の祈禱室に集合し、祈禱會を開くことになつて居た、毎日交代に司會し、司會者は短かい感話を述べ、讚美、二三の人の祈禱を以て會を閉づるのである。これも亦若人の心靈の火を燃やすには確かに效果があつたやうに思ふ。時々米國の靑年會から訪問者がある、米人ミツショナリーも訪ねて來る、舍生は思ひ〳〵の敎會に出席する。神學、哲學上の議論をする、生物學や、進化論や、哲學史や、信仰美談や、倫理

學說などの著書飜譯は、寄宿舍の圖書室に備へつけてある、仲間の中には救世軍に歸依し、軍の兵士となり赤シヤツを着込むやうな人達も出て來た、私は兵士にはならなかつたが、軍友位のところまでは行き、屢々救世軍の働きを助け、又山室氏の著書等の手助けもしたものである。此頃の友人に今日立派な社會的地位を得、又社會的活動をしてゐる人々も少くはない。

斯くの如くして明治四十二年七月、大學四年の課程を終へた。

五　活社會の門出

愈々卒業となると學部の學長が就職の世話をしたものである。當時の學長は穗積八束博士であつた。博士は毎週數日を割いて學生集會所に於て學生を引見して其志望を聞いた。私も日割順に依つて博士に會見した。博士は謹嚴そのものゝやうな顏をしながら、成績表と見比べつゝ、徐ろに「君の志望は何かね」と問はれた。私は正直に「新聞記者を志望致します」と答へた。ところが博士はその謹嚴の態度にも似ず「何、新聞記者？」と稍々驚きの聲を發せられた。事實その頃新聞記者などを志願する野暮な學生は一人もなかつた。卒業生の殆んど大部分が皆官吏を志願した。一部の人々が實業界その他を望んだ。帝大は——分けて東京帝大法學部は——當時官吏の養成所と呼ばれた實際また官界への登龍門でもあつた。現に當時の私の同期生で官場の俊秀は少くない。おぼろげ乍らも既にその頃生涯を「弱者の友」として送らうと決心して居た私は、官吏として服務規律に縛らるゝことが嫌であつた。私は野人としての自由な生活を望んで居たのみならず、記者生活は自分のその方面の勉强にも修養ともなるであらうと考へて、それを志望したのである。博士は稍々久しうしてから「どの社が希望かね」と問ふ。私は「朝日か時事に入りたいと思ひます」と答へたら博士は「朝日」にも「時事」にも知己はない、「東京日々」なら社長の加藤高明をよく知つて居るから紹介しやうといふことである、私は「東京日々」でも結構ですから御紹介を願ひますと言つて座を立つた。數日の後に事務所から、加藤高明氏への紹介狀を渡された。私はこれを以て加藤氏を「東京日々」へ訪問に出かけやうとしてゐると、思ひがけなく、新しい就職の機會が來た。

それはかうである。私は鄕黨の先輩小山東助氏の紹介によつて——當時小山氏は東大文科を出で て島田三郎氏主宰の「東京毎日」の主筆であつた——大學時代に島田先生を保證人に御依賴してあつ

た。然るに島田氏の令兄相川氏は秀英舎の支配人であつた。私の生活の内情を知つてゐる先輩達は私をして寧ろ實業界を擇ばしめやうとしたのである。要するに新聞界は變動の激しいところである、君のやうな繫累の多い人は、途中でどんな難儀を見やうも知れない、秀英舎は我國に於て最も古い印刷工場の一つで、且つ創立者佐久間氏の職工施設は見るべきものが多い、君のよい研究材料にもなるであらう、將來秀英舎を基礎にして展ぴる機會もいくらもあらうといふのである。私も直ぐには新聞社へも入れさうに思はれなかつたので、島田氏の紹介で秀英舎に社員として入社することになつた。明治四十二年七月一日――卒業式前十日で、月給三十五圓であつた。

私は秀英舎には僅か八ヶ月しか居なかつた。矢張私には實業家の素質が惠まれて居なかつたものと見える。併し此間に多くの珍らしい經驗をした、佐久間氏の施設としては當時殘つてゐるものはいくらもなかつたけれども、工場規則の中にはいろ〳〵面白いものがあつた、私は又支配人に賴んで毎日工場に入つて職工生活に親むと共に、印刷術を研究し練習した。秀英舎の工場には、當時豐原又男氏が監事（職工監督又は工場の一部長）をして居た。同氏は故佐久間貞一氏の遺愛の門弟の一人として社會政策、工場法等の研究に志を寄せて居た、二人は意氣投合して、印刷術の研究には身を入れて指導してくれた、これは後に新聞記者になつてから大に役立つた。

その頃初めて工場法案といふものが、農商務省によつて立案され、各同業組合等に諮問して來た私は僅かに二十五歳の白面の青年であつたが、多少の新知識を有するものと認められたことゝ、秀英舎の社長も支配人も共に出嫌ひであつたので、いつも私が代理を仰せ付かつて、よく同業組合の幹部の會合に列し、年配の二十も三十も上の人達と論談協議した。工場法案の諸問に對して、東京印刷同業組合の答申案の作成には私も參加した一人である。お蔭で私は年少の身を以て、廣く世間學を修得することが出來た。けれども印刷業を以て自分の終生の業とする氣には何うしてもなれなかつた。そこで私は納得づくで翌四十三年三月同社を退社した。退社と同時に「東京朝日社」に入社を志望し、四月入社試驗を受けて合格し、五月一日より同社社會部の一記者として入社することになつた。

其試驗の課題は『東京に於ける救濟事業現況』といふのであつた。此試驗が或意味に於ては私を社會運動に驅り立てた伏線であると見てもよいやうな氣がする。當時救濟事業の大部分は基督教關係であつたから、青年時代より基督教會に出入し、その方面の關係の仕事にたづさはつて來た私には

誠に格好の題目で、十日の期限の中、八日間を各所の訪問と視察に費やし、一日半で二十回分の原稿を書き上げ、十日目の正午に社に持參した。試驗委員長は、當時『世界見物』を以て其名を著聞した社會部長澁川玄耳氏であつた。

入社後二日間はボンヤリと編輯室に座つて暮した。三日目になつて社會部長より『ハレー彗星の記事を書いて貰ひ度い』といふ命令である。法律書生に向つて天文記事を書けとは何事ぞと思つたが、命令なれば否み難く、その頃麻布飯倉にあつた天文臺に駈けつけて行つた。さて行きは行つたものゝ、サツパリ見當がつかずにマゴ〳〵してゐる中、助手小倉理學士が鄕黨の士なることを發見し同學士にせがんで、無理遣り二三日で俄か拵への天文學者となつた、一晩は天文臺に徹夜して天體の觀測もやつて見た。ところが肝心のハレー彗星の出るといふ朝になつて、つひウト〳〵と眠り込んで當の正體を見損つた。これは大變と大いに周章狼狽したが後の祭りで、こんな風であつたと小倉理學士の觀測の結果を聞いて、自分で見て來たやうな圖を書き記事を作つた。他社の樣子はどうかとビク〳〵ものを注意してゐると、いづれの社も同樣の記事と見取圖を出して居たので、初めてホツト安心した次第であつた。

ハレー彗星の次には飛行機の記者に任命された。當時風船形の所謂自由飛行といふのが陸軍によつて行はれて居た、民間では奈良原式がヤツと滑走しだした頃であつたが私は其係りにされた。可笑しなことには、奈良原式が滑走成績が見事で、後輪が地から離れたといつて、『後輪地を離る』といふ標題で記事を書いたものである。それから私は陸軍の試驗飛行に同行して、石橋、雀の宮、所澤と出張を命ぜられた。今は飛行機のことは皆目分らなくなつたが、これでも日本の飛行機記者の先輩なのである。

社會事業、宗教問題、教育關係等の記事は大抵私の擔任するところであつた。『南北朝正閏問題』では一週間も徹夜で奔走して、揚句の果に病氣にまでなつた。幸德一派大逆事件公判の際は、裁判所から當時京橋區瀧山町の東朝社まで、二人曳の車を飛ばし、(その頃自動車などは各社共用ひてなかつた)、國民の記者の車を拔いて、逸早く號外を出すことに成功した。私はいくらか英語が分るからといふのであつたらう、當時專任の外人訪問記者として鎌田敬四郎君(現大朝九州支局長)が居つたに拘らず、折々外人訪問の手傳をさせられた。中に思ひ出しても滑稽なのは、救世軍の某少將が英國の本營より日本視察に見えた折、これを新橋(舊)驛に迎へたはいゝが、シベリヤ經由でお出で

でしたかと尋ねるに私は一向平氣でシベリヤ〳〵を繰返したが通ぜず、側の山室氏が「サイベリヤ」と言ひ直してくれたので始めて通じたことがあつた。それから今の帝劇が創立された時、朝日社へ會話の手直しに來て居つた英國婦人が文藝通だといふので、これを帝劇に案内し、芝居の筋を說明してその批評を求め、更に樂屋に入つて梅幸、幸四郎兩丈を訪問して、その對話の模樣を書けといふ命令である。仰せ畏まつてフロックを一着に及び出かけて行つたはいゝが、さて芝居の說明にはホト〳〵閉口した。漸くこれを切り上げ潮時を見て樂屋に訪問した。演藝記者の水谷幻花兄が萬事取りしまつて引廻してくれたので、その點は助かつたが、梅幸、幸四郎兩丈の部屋は疊敷だつたので、婦人も靴を脱いで入つたが、さて出るときになると、靴をはいたまゝ足を私の前に出すのである、私に靴の紐を結べといふ譯なのだ。大勢の俳優や出方が周圍に立つて見て居る、私は結んだがいゝか、結ばんがいゝか見當がつかない。西洋の婦人は主人公に靴の紐を結ばすといふことは聞いて居たが、赤の他人の男子にこれを要求したといふことを聞かない。況んや靴の紐位自分で結べばいゝではないか、堂々たる日本の紳士に之を求むるのは何事だと中つ腹にもなつたので、其儘放つておいて駈け出した。併し夫れ限りにして歸るわけにも行かんので、暫く待つて居ると、やがて自分で結んだものか靴を穿いて出て來た。私は社に歸つて此事を話すと、例の楚人冠氏をはじめその他の諸君がヤンヤと囃し立てる。婦人に靴の紐を結んでくれと求められることは男兒の光榮なんだ、その婦人が君に大に好意を持つて居る證據なんだよなどゝいつて散々ひやかされたやうな始末であつた。

社會部の記者だから命ぜられゝば何でもした、大逆事件に關しては擔任の敎誨師を訪ねて「死刑囚の心理」を書いた。沖繩よりブラジルに移民に行つた人々の悲慘の話を聞いて、探索の上「移民か棄民か」を書いた。婦人運動の新しき勃興を見ては「新らしき女」と題してフエミニズムの運動を記した。併し自分の趣味の最も向いて居たのは貧民窟のドン底探檢であつた。此爲めに私は印袢纏腹がけの姿に變裝して、東京の貧民窟といふ貧民窟は片端から見て歩いた。木賃宿にも幾度か泊り、繩暖簾、醬油樽、牛どんの味も知つて居る。白粉臭い闇黑の花に追ひかけられて逃げ廻つたこともある。假名を要吉といつた文才ある立ちん坊を手引として出來得る限り見て歩いた。さては救世軍の勞働寄宿舍、淨土宗の共濟會、無料宿泊所等も訪ね歩いた、それらは皆當時發表した「東京浮浪人生活」の中に收めてある。

此時のことである、私はつく〳〵救濟機關相互の間に連絡を缺いて居るのみならず、警察と救濟機關との連絡も出來て居ないのを見て、これ等の缺陷を補ひ、且つは救濟事業の興隆を計りたいといふ考へから、『浮浪人研究會』といふを組織し、毎月一回會員廻り番に集會の宿をすることゝし、私は世話役を勤めたものだ。其會員の中には、故小河滋次郎博士や、山室軍平氏、原胤昭氏、養育院の安達憲忠氏、今の丸山警視總監、前東京市長堀切善次郎氏のやうな人々も含まれて居た。

此頃私は東京市養育院の協力を得て、市内の各所の『立ちん坊』百二十三名につき調査の結果、その中、中學の卒業生五名、外國語學校卒業生一名、豫備騎兵伍長一名、巡査上り教員上り各三名あり、その他大工とか左官とか石工とか、相當の腕を持つて居る連中のなれの果なることを發見して、之は容易ならぬ事だと感じた。これ等の人々は國家の經濟力の上からいつても中堅たる人々である、又國民思想のからいつて上も大切な人々である、それ等が一旦不幸のために從來の地位を支へ切れず此ドン底に落ち込むと、容易に浮む瀬がない。然るにこれらの人々に對する相談の機關も、救濟の機關も、指導の機關もない。生中、行倒れになれば養育院がある、老廢者には養老院がある。けれども、そこまで至らずして、一定の職と收入とある人が、何かのはづみで職を失ひ地位を失へば、野中の古井戸に陷ちたも同樣で、呼べど叫べど助かる見込はないといふのは何たる不都合ぞ、況んや彼等貧しければとて社會がこれを蟲蟻の如く取扱ふとは何事ぞといふやうな義憤を發せざるを得なかつた。これが後に友愛會創立の一動機となつたのである。

かゝる間に私は累進して夜の編輯主任に擢んでられ、神奈川版と市内版とを編輯した。其頃安藤正純君は政治部の夜の編輯主任で、二人で殘つて仕事をしたものである。然るに私は此編輯主任勤務中とんだ失策をやつた。それは同一内容の記事を、通信材料と、社の直接扱ひを區別せず、本紙と欄外とに重複して掲載して仕まつたのである。此失策に乘じて、他の二人の記者と共に責任を負はされ、澁川社會部長より退職の宣告を受けた。私は罪に對する罰として餘りに重刑と信じて憤慨もしたが、實は他に多少澁川君の含んで居た事情もあり、社長まで手廻しよく諒解を濟ませて居たので、同情して奔走してくれた諸君もあつたが、凡ては徒勞であつた。かくて私は一錢の退職手當も受けずに新聞記者の足を洗つた。併し乍ら顧みれば、社僚としては社會部にも、松崎天民君や、美土路春泥君や、鎌田敬四郎君のやうな秀才が控へ、政治部には安藤正純君や、中野正剛君、米田實君の如き一騎當千の士が居つたので、日夕かゝる偉材と机を並べて新聞社編輯局の空氣を呼

吸した一年有半は、私の生涯にとつて多くの教訓と示唆とを受けたわけなので、まことによい試練であり、又興味でもあつた。今でも私にとつて二十年以前の記者生活は、懐かしい思出の種である。

六　實行運動の準備

朝日社を退いた私は、固より悠々自適して居られる境涯ではないので、實は記者時代に紙上に發表したものを纒めて出版し、當座を凌がうと決心した。そして原稿の整理にかゝつて居ると、先輩小山東助氏は私に勸めて是非三田のユニテリアン協會の幹事になれといふのである。

ユニテリアン派は理智的信仰を標榜する基督教の一派である。明治十九年頃、福澤諭吉、矢野文雄といふ人々の勸誘招請によつて、初めて宣教師を米國のミッションが派遣してより當時約二十五年の星霜を經て居た。時の宣教師はマコーレー師であつたが、東京ユニテリアン協會といふが、日本人の手によつて組織され、幾多の變遷を經て、その頃安部磯雄氏が會長、三並良氏が會計であつた。内ケ崎作三郎氏は安部氏と相知る久しく、遂に同氏並に協會の推薦によつて曩に英國牛津大學に留學し、三年の研究を終へて歸京し、早稲田大學に教鞭を執る傍ら、ユニテリアンの運動に參加し、ユニテリアン協會を改めて統一基督教弘道會と稱し、機關誌「六合雜誌」を發行する外、種々の講演會、講習會等を開催し、理智的宗教の宣傳普及に努めて居た。内ケ崎氏は弘道會とは別に――人間は大多數共通であるが――統一基督教會を創立しその牧師となつたので、私に右の弘道會の幹事として就任し、側面から内ケ崎氏の宗教運動を助勢せよとのことである。

私は宗教生活からは相當長く離れて居るし、專門の智識もないので、聊か二の足を踏んだのであるが、内ケ崎氏は私に取つて恩義のある先輩でもあるし、且つ私は「六合雜誌」の編輯の外、惟一館（今の總同盟本部會館）を利用して社會事業をやるがよいとのことで、さらばと許り承諾の旨を答へいよ〳〵四十四年十一月より就職することになつた。

當時私の仕事といふのは、毎日、當時惟一館の二階に住んで居た宣教師マコーレー博士を訪ねてその求むる用事をなす外、「六合雜誌」の編輯を手傳ふのみで、大して事務とてはなかつた。そこで私はつら〳〵會館所在地の附近の情勢を見るに、その頃あの邊一帶は工場地帶といつてもよいところであつた。先づ芝浦製作所、煙草專賣支局が、直ぐ近所にあり、沖電氣、日本電氣、池貝鐵

工所、吉村鐵工所、榎本工場等ある外に、今川崎に屹立して居る東京電氣も、會館の直ぐ前に建つて居た。私は會館の窓から朝な夕なに此等の多數工場に通ふ工男工女の姿に眼をつけて居た。そして私は一種の闇然たる氣持と、懐疑の念に襲はれたのである。『彼等は果して何處より來りて何處へ行くか』、『何を考へ、如何にして生きて居るか』、『今日生きて明日はどうするのか』、『何を望み、何を樂みに生きつゝあるか』。見すぼらしい風をしてゐるものもある、だらしのない姿をして居るのもある、卑猥なことを喋つて行くものもある、喚きつゝ行くものもある、爭ひつゝ行くもある、いづれ今日一日の糧を得んとして働きに急ぐのではあるが、「明日」の備へはあるか、「明年」の貯へはあるか、老後の覺悟は出來てゐるか、彼等は何物も有たず、何事も考へないのではないか、これ等の人々の働き場、住宅の中心に位してゐる「教會」としては、何事かなさねばならぬ筈である。

私はトインビー館のことを思出して、先づ人事相談所を開いた。明治四十四年十一月である。翌四十五年一月よりは毎月十五日に通俗講話會を開いた、三月一日よりは毎月一日に勞働者倶樂部を設けた。人事相談所では家庭の瑣事より人生問題の煩悶解決等の問題まで私一人で相談相手になつた。夫婦喧嘩の仲裁もした、結婚の媒介もした。通俗講話會では、餘興として琵琶や浪花節や幻燈活動などを呼び物に、法律や經濟、倫理道德等に關する卑俗な講話をやつた。勞働者倶樂部では、私自分の身錢を切つて碁盤、將棋盤各一面を求め、教會の信者に畳屋さんのあつたのを說いて仲間に加入させ薄緣十枚を寄附して貰つて、圖書室の板敷に敷き、一日を私も相手になつて遊び暮した。私はこれ等倶樂部員諸君の遊戯の相手をしつゝ、人生を談じ勞働問題を說いた。その頃勞働者の休日は一日十五日と決つて居た、日曜を選んで休むやうになつたのはズット後のことである。講話會に餘興物を多く取り入れるといふのも、今の考へでは可笑しいやうであるが、當時一般民衆に、演說や講演を聽かうといふ風習が出來て居らず、娯樂向の添物澤山でなければ人が集まらなかつたのである。併し此計劃は大體圖に當つたと見え、殊に幻燈活動でもやるときは、おかみさん達や子供さん達で溢るゝ計りの盛況であつた。惟一館の樓上の講演場は、椅子席三百五十位であるが、かゝる折には中ば以上椅子を取り拂つて莫蓙を敷いた、そして六百七百といふ人々を收容した。今日では三町五町毎に活動館もあるが、その頃は淺草まで行かなければ活動は見られなかつた、四國町附近で活動を無料で見られることは餘程の樂みでなければならなかつた。

私はかうした會合を倦まずに續けて居る間に、勞働者諸君の中から、漸次に多くの友人を持つや

うになつた。當時『學士』といふものは、恐らく今日の『博士』よりも光つて居た。その『學士樣』が自分達の仲間になり力になつてくれるといふは、何といふ喜びであらうといふ氣持なのである。かういふ人達は休み日に時たま私の家に訪問して來てくれる、その頃尙ほ獨身生活をして居た私には自然遠慮氣兼も少なかつたのであらう、「おはぎ」などを持ち込んで來る親切者もあつた。私はさういふ人々を相手に冬の爐邊を圍んで話した。私はまだ見ない世界各國の模樣などを話すと、これ等の人々にはその一々が驚異の種であつた。私はかういふ人々と話して見て、如何に彼等が權利の枉屈に苦み、忍ぶべからざることを忍ぶべく餘儀なくされつゝあるかを知つて、少からず驚かされたのである。一二の例を語るならば——

官立の大井某工場のことである。そこの職工は尋常一樣の手段では、何年經つても役付職工にはなれない。忠實とか勤勉とか技術優秀とかは物の數ではなく、定期に多少の昇給はあるが、それさへ上の役付職工の推薦次第だとのこと。その役付職工といふは一種の「株」となつて居て、伍長は二十圓、職長は三十圓といふ相場である、此金の工面の出來たものは、年限が短かくとも比較的早く「出世」し、然らざるものは、年功を經ても元の默阿彌といふ姿である。その定期の昇給や、仕事の難易の振り當などゝいふことも、要するに平生の「附け屆」の有無並に多寡に關係する。そこで相當多年働いて工場の職長の如き地位になると、盆暮には進物の山をなし、かへつて出入の商人に對し、値引して、ビール、砂糖などを引取つて貰ふといふ有樣だとのことである。更に甚しきに至つては、上役の御機嫌を取り結ぶために、女房や娘を人身御供に捧げるものもある。上役の横暴な者になると、役目を笠に着て、暴威を揮ひ、役德のやうに心得て居るとのことなど、聞けば聞く程痛憤の種ならざるはないのであつた。そこで私は彼等に說いた、かういふ實狀に對抗し、横暴を打ち碎くには一人や二人の力には及ばない、團結の威力によるの外はないと、外國の勞働組合の話をした。すると、感激の呻きが忽ち揚るといふ有樣であつた。

併し以上の例は決して某官立工場のみではない、その後民間の工場の誰れ彼れについて聞くにどこもかしこも皆同樣であつた。これは資本主義の弊害といはんよりもむしろ封建制度の遺風である、中間階級の「惡代官」根性を打破することが、日本の勞働運動の一面の任務だといふことを痛感したのである。併し其頃勞働組合の結成は困難であつた。そして幸德事件等があつたゝめに、其筋の神經も頗る過敏であつた。會社と社會と間違へて看板に警察の干涉があつたといふ喜劇も演ぜら

れた位である。よつて右の通俗講話會も最初は勞働問題講話會としたのであつたが、安部磯雄氏の注意によつて、通俗と改めた位である。資本主義の壓迫以外に、勞働者は中間階級の「殿樣根性」のために苦められた、彼等は自から勞働階級に屬することを自覺せず、資本家の心持で居る、そして經濟的搾取の手先を勤めるのみならず、彼等自身の横暴を恣まゝにしたいために、勞働者より一切の自由を奪はうとした。或る工場では勞働者を從順に忠實に訓練するために勞働者を强制して或る宗教に加入させ又は或る教化團體に加盟せしめる、或は勞働者の讀書、新聞の種類に干涉する、政談演說の傍聽に行くことを禁ずる（勞働問題の演說は勿論）もし行く者あるやを人をして監視させる、これが常態であつた。これ思想の自由、集會の自由、結社の自由を奪ふものでなくて何であらう。斯く勞働者をたゞ一圖に資本家の利益のために存在せしめやうとする、いふところの「賃銀奴隸」でなくて何であらう。

私はこゝに無限の公憤を感じた、事情を知れば知る程、私の若き心は躍つた。私は此階級のために生きねばならぬ、自分の持てる凡てのものを献げて戰はねばならぬ、これが私の生きる所以なのだ。富も名譽も何だ、飢餓も、迫害も、死も何の恐るゝところぞ。自ら訴ふること能はざるもののために訴へ、自ら告ぐること能はざる者の爲に告げ、彼等自ら起つて凡てを辨ずることを得るに至るまでは、自分は彼等無產の民、無告の民の權化となつて戰はねばならぬといふ、鬪志は燃えに燃えて來た。ドン底の生活にまで陷ち込んで仕まつた人々は、意地を失ひ、廉恥心を失つてゐる。これが救濟は他にその人があらう。私は此の毎日毎夜定職を有ち技術を以て働いて然も食ふこと能はざる人々、下層社會と恥ぢしめらるゝ人々、權利を蹂躙されて顧みられざる人々、かゝる人々のために働くことが自分の領域だ、使命だ、若し自分が死に臨んで、自分の生れた時よりも死ぬ時の方が少しでも勞働者の地位が高まり、生活の保證の出來たことを見て死ぬことが出來たなら、如何に滿足であらう。如何に生甲斐のある生涯であらう。と思ひ、感じ、決せざるを得なかつた。斯く私の勞働運動に對する志は牢固として拔くべからざるものとなつた。

かくて忘れもしない大正元年八月一日の夜、——長くも明治天皇崩御三日目、改元第一日、全市を擧げて死の沈默にあるの時、前年以來寄り〳〵相談を纏めて來た同志勞働者十五名は、三田は惟一館の圖書室に、永却未來への希望をかけて、血盟の誓を立てたのである。

七　勞働運動創立の動機

以上私が自己の經歷につき頁を重ねて述べて來た所以は、固より漫然己れを語らんが爲めではない。私が何故に勞働運動に身を投ずるに至つたかにつき、一應の諒解を得たいがために外ならない。賢明なる讀者諸君は、私の性格、環境、感化等が畢竟私を驅つて、運動のトップを切らざるを得ざらしめたものあるを、容易に觀取せられたであらう。要するに私の行動を起したのは、何等特に重大事件等があつて、これに感奮して起つたといふやうなものではなくて、一種の見えざる力に押し出されて到頭本流に乘り出したといふ形である。そこで私の勞働運動創立の動機ともいふべきものを要約して見れば、左の數點に歸結すると思ふのである。

第一、私は幼年時代より基督教の雰圍氣の中に育つて來たこと、殊に感受性の最も鋭敏なる青年時代を、強い宗教的感化の下に過して來たことである。私は別に社會問題の理論的研究を極めて、其結果として運動を起したのではない。又肉體勞働の辛慘なる體驗を嘗めて、其結論として運動を

起したのではない、根本の動機に於て、基督教的人道主義の立場から出發して居る。私は近年屢々私の態度について生溫いとか、妥協的だとか、協調主義だとかいふやうな批評を被むつて居るが、私は如何に罵倒されたにしても、どう考へて見ても、唯物論を根據とする暴力革命主義に贊同することは出來ない。私は勞資の兩階級が、利害相反する立場に立ち、容易に越ゆるべからざる差別あることは承認するが、資本家卽惡魔といふ眞には考へられないのである。資本主義の貪慾と橫暴とに對しては、滿腔の公憤を感ずるが、資本家も亦人間なりといふ感じを打ち消すことは出來ない。一度環境の束縛から離れゝば、資本家も勞働者も等しく「人間」であると思ふ、そして勞資の問題も、お互に力づくで爭ふ丈けでは、結局鬪爭を繰返す丈けで眞の解決には到達するものでないと確信する。マルクスの理論も部分的には共鳴する點が少くないが、さりとて其理論體系が飽くまでも唯物論の基礎に立つものとすれば、私はこれを全體としてそのまゝ受取ることは出來ないものである。これは私の信念であつて曲げることは出來ぬ。勞働問題の解決も結局精神的要素を無視することは出來ないと考へる。凡そ以上の見方考へ方は基督教的人生觀社會觀に負ふところが多いと思ふ。これ基督教的感化を第一に數ふる所以である。

第二には私の青年時代よりの窮乏の生活である、そしてそれが突發的に來たことである。私の幼時より少年時代までは、一種プチブルに近い環境にあつたことは前に述べた。然るに家運の沒落によつて急激に貧乏のドン底に突き落された。私は一時眼が闇くなつたやうに感じた。幸に第一に兩親の犧牲的行爲に勵まされ、次ぎには先輩や親友の義俠的聲援に促されて、先づ大過なく學生々活を終へた。併し私が窮乏生活を續けて居る裡に受けた精神的の痛手——夫は一つは自分自身の體驗より來り、一つは兩親や弟妹やのみぢめな生活狀態の目擊より來た——は恐らく生涯拭ひ去ることの出來るものではない。諺に『貧すれば鈍する』といふのは眞實である。格別人から借金をして居るでもなく、又人に不義理をして居るでもなく單純なる貧乏そのもの丈けで、既に裕に社會的蔑視屈辱を感ずるに足る、況んや多少なりとも人に迷惑をかけたり、厄介になつたりでもしやうものなら、相手次第にも依るが、終生頭が上らないのである。貧乏の生活夫れ自身が——悟を開いた達人哲人ならいざ知らず——既に不滿な、不快な、陰鬱な生活である。それが更に他人から馬鹿にされ差別扱ひされ、疎んぜらるゝに至つては、時あつて腸九廻するの感があるものである。

私は自分自身の生活に就て、又肉親の生活に就て、しみ〴〵と貧乏の味を味はつた。別に榮耀榮華を望むではないが、せめてはあまりひどい貧乏丈けはしたくないなァと眞から底から希求し、熱望したものである。併しこれは私ばかりではない、私の家族ばかりではない、社會民衆の大半がさうなんだ。しかもその人々は正しい働きをして正しい酬いを受けてゐないんだ。受くるところの收入を以て支出を補ふに足らず、七轉八倒の苦痛を嘗めた上に、或は病氣に罹るものがある、或は罪を犯すものがある、或は自ら生命を縮めるものがある、或は身賣をするものがある、凡そ社會的事象の多くは「貧の病」から起つて來るのだといふことを知つて見ると、これは自分單獨りのことのみを考へては居られない。自分と共に世を救はなければならぬ、否、己れを捨てゝも人を濟はなければならぬ。先づ同志を糾合して、先づ彼等を自覺させ、團結の威力を揮つて、妄に前途を塞ぐものを粉碎し、理想の社會を打ち建てなければならぬ、此際一身一家の榮達や安逸を希ふが如きは卑怯である、相濟まないといふ感じが次第々々に猛然として湧き上つて來た。私は元來臆病な男であるが、自分の責任とか使命とかいふやうなことを自覺すると、もう眼中何物もないといふ風になる男である。これも畢竟貧乏の賜、逆境の恩寵とでもいふべきであらう。

第三には高等學校より大學に進み、政治や經濟、法律、乃至社會學を學ぶに及んで、朧ろげなが

ら現存社會制度の不合理性に眼覺めて來たことである。その頃社會科學に關する著書論文といふものは極めて稀れであつた。邦書は固より外國物すら、今とは比較にならぬ程少なかつた。併し社會とか國家とかを對象とする學問を研究するに及んで、追々と批評的になり、今の世の中といふものは金持と貴族とにのみ、馬鹿に都合よく出來てゐる社會ではないか。その他一般の人々、商人も智識階級も勞働者も、要するに彼等の特權的地位を維持し、其享樂を擅にせしむるための生きた器械のやうなものではないかといふ疑問がヒタ〳〵と起る。その頃我々の手に入つたものとして先づ安部磯雄氏の「社會問題解釋法」、横山源之助氏の「闇黑の社會」、森近運平氏の「社會主義綱要」、「六合雜誌」に現はれた論文、「平民新聞」「直言」、内村鑑三氏の「獨立雜誌」、堺枯川氏の著述論文、幸德秋水氏の著書論文等で、殊に木下尙江氏の小說「火の柱」「良人の自白」等よりは非常な感銘を受けた。田中庄造翁の鱗毒事件に關する熱狂的運動、島田三郎氏、木下尙江氏の演說、片山潛、西川光次郎兩氏の編輯になる「日本の勞働運動」等は裕に青年の血を湧かすに足るものがあつた。その頃私は吉野氏に勸められてホブソンの「近世資本主義の發達」といふ本を手に入れた。近頃は飜譯も出來て居るやうだ。マルクスものも多少英文の簡單な解說を讀んだ。

大學の工業政策の講義は桑田熊藏博士に聽いた。從つて桑田博士の著書論文も涉獵した。桑田博士は當時社會改良主義を支持し、社會主義を排斥して居られた。その趣旨の下に「社會政策協會」といふものも桑田博士等の奔走で出來た。私もその會員になつた。そして私も社會改良主義を妥當なものと信じ、社會主義は痛快ではあるが、要するに一種の空想に外ならないと思ひ込んだ。私はその趣旨の演說もし、文章も書いてゐた、友愛會創立の頃より少くとも七八年間はさうであつた。併し今日は社會主義の妥當性を信じ、共產主義(暴力主義、獨裁專制主義の)を排する考へになつて居る。時勢の變化といふか、內部生命の發達といふか、兎に角それに違ひない。

以上、社會制度に對する理論的の研究、思索の機會を與へられたことが、私を結局勞働運動の中に引きずり込んだものと思つて居る。

即ち最初は感情的に、無批判的に勞働運動の渦中に進んで行き、更に貧乏の體驗とこれに伴ふ反抗心とが一層此傾向を强め、更に多少の理論的研究思索が、これを決定的のものとしたといへる。思想は社會改良主義より社會主義に變つて來たが、大體その根抵は人道主義、理想主義で一貫してゐると見るべきだと思つてゐる。

二 創業時代

一 友愛會の創立

以上述べたるが如く、東京三田四國町統一基督教弘道會幹事に就任した私は、通俗講話會、人事相談所等の準備時代を經て、愈々友愛會の創立へと邁進した。畢竟するに單に一時的の集會丈けでは效果的ではない、單純なる道德的娯樂的の集會では意味をなさない。是非共利害相一致する階級の經濟的團體へと組織化せなければならぬといふ意圖に外ならないのである。

機は愈々熟して來た。諸種の會合が度重なれば重なる程、同志の親愛の情は增し、其氣組は合つて來た。時分はよしと八月一日と日取を決めて夫れ〳〵通知等をも發送したのであつたが、圖らずも明治天皇の崩御、諒闇の天下となつた。そこで會合は遠慮しやうかとも考へたが、極めて眞面目な會でもあり、固より高聲を發するでもなし、謹愼して會合する分なら差支あるまいといふことで、豫定の通り進むことに決した。大正元年八月一日夜七時、東京三田芝園橋畔統一基督教弘道會(從來東京ユニテリアン協會)圖書室。諒闇第三日、帝都は全市を擧げて死の如き沈默の中を、同志は一人——二人、會場に集つて來た。電氣工、機械工、疊職、塗物職、牛乳配達、撒水夫等計十三名私を入れて十五名である。外に一人現職の巡査があつた。其名板倉定四郎といつて、後に退職をして友愛會主事となり、創立時代に奮鬪した一人であるが、同君は統一教會の信徒の一人で、三田署在勤であり、背宗教學校にも居たことがあるといつて、中々の理論家であり、勞働運動に對しては特殊の興味を以て居た、從つて當夜は何等監督の意味でも、偵察の意味でもなく、心からなる共鳴者の一人として參列したのである。併し現職にあるので、名を出して正會員の中には加はらず、隱れたる同志として極力奮鬪するといふ意思であつた。他の同志の諸君も亦、其志を諒とし、心より歡迎するといふ風であつた。

會は定刻に始まつた。各自は室內の長卓二臺を聯接して、其周圍に陣取つた。私は推されて座長席に就いた。

私は先づ勞働階級の向上と勞働組合の結成とは必然的のものであることを說いた。そこで我々は新たに玆に組合を作るべきだと述べた。併し勞働問題に對する世間の理解力極めて乏しく、官憲の壓迫も亦猛烈である今日――幸德事件終了後漸く二年――到底直ちにその組織を作ることは困難である、暫らく友誼的共濟的又は研究的の團體で滿足しやうではないかといつた。

一同は納得したので、私は其意味で會合を進めることゝし、さて會名の詮衡に入つた。これは誰れも格別腹案といふものを持ち寄つて來なかつたので、思ひ〳〵の案が出た。或は八月一日に因んで「八一會」はどうかといふものもある、或は大正第一日ともいふべき日だから「大正會」との說も出る、或は同志會とか、交友會とか、同志研究會とかいふ案も出たが、いづれとも決しなかつた。

「そこで私は然らば「友愛會」といふ名はどうかと言ひ出した。といふのは英國にフレンドリー・ソサイティーといふのがあるが、それは譯せば友愛會となる。フレンドリー・ソサイティーは今日も引續き各方面にあるが、わけて勞働者が所謂「團結禁止法」の彈壓の下に組合組織の自由を有せず、フレンドリー・ソサイティーの名の下に共濟、親睦、娛樂等を目的とする團體たることを標榜して、着々組合建設の方向へ進んだことは、頗る賢明な方法であつた。日本の勞働者も今は正しく隱忍して力を養ふべきときであると語り、英國勞働運動の故智を學ぶことにしやうではないかと述べたところ、滿場の同意を得、結局「友愛會」の名稱を異議なく採用するに至つたのである。

フレンドリー・ソサイティーは、今尙存在する英國に於ける一種の社會運動である。その組織は單に勞働者の間にのみ限られるのではない、從つて直ちに以て英國勞働組合運動の母體とすることは出來ない。併し英國の勞働組合にして、此種の組織の間より生長發達し來れるもの決して少くはない。私は双葉の間にむしり取られるやうでは、却つて害となるべきと思ひ、且つは日本の勞働運動も、大體英國流の勞働運動の流儀に從ふことを、最も健全なる行き方であると考へて、玆に「友愛會」なる名稱を附與することゝしたのである。

會名が定まると、今度は會費である。今までの會合の諸費用は、大抵弘道會社會事業部の金か、私の自腹か、乃至臨時の寄附金を以て支辨して來た。併しこれからはさうは行かない。又苟くも自治團體である以上、一から十まで他人の厄介になるべきではないといふので、いろ〳〵協議の結果當分の內金五錢とすることに決した。

次ぎは會長及び幹事の選擧である、會計は幹事の一人がこれに當ることにした。會長には到頭私

が推された。實は勞働者諸君自身の間よりといふ考へであつたが、當時の狀勢は尙これを許さなかつたので、私は諸君自身の中より會長の現はれ來るまで假に引受けやうと念を押して結局就任することにした。幹事には岡村寅次郎(疊職)、高橋秀雄(電機工)、伊藤友吉(大工職)(當夜缺席)三君が當選した。岡村君が會計の任に當ることになつたといふのは、同君は當時既に年齢四十で、最年長者であつた許りでなく、自分の家も有つて居り、二三の弟子を養つて居る親方疊職で、從つて家計も相當餘裕があつたからである。岡村君は佐治實念氏、神田佐一郎氏時代より東京ユニテリアン協會に出入し、早くより社會的福音に接して居た、當時も統一教會の會員の一員で、然も相當熱心な信徒であつた。私は教會で相識つたのであるが、私の企てには卒先して贊成し、或は薄緣類を寄附し、後に創業費の中へ金十圓を寄附した。當時職人の身で十圓を寄附するといふことは餘程の大奮發でなければならなかつた。

高橋秀雄君は日本電氣の青年職工であつた。元氣發剌、俠骨稜々といふ風があつた。友愛會創立以前、一夜工場內の紛爭問題を携へて相談に來訪せられたのが緣となつて、其後熱心なる會員となつた人である。曾て上役の者より不公平極まる酷遇虐待を受け、腹に据ゑ兼ねて遂に一大決心をなして、大事を決行せんとまでしたことのある人間である。同君が決意間際に血涙を以て認めた長文の袂別書を受取つた私は、取るものも取り敢へず、同君の自宅まで駈けつけて行つたこともある男である。

伊藤友吉君は京橋桶町の生れ、當時建築技師コンデル氏の幕下の一人で、腕利きの青年家大工であつた。同君は或日報知新聞に、通俗講話會の記事の載つたのを携へて、私の事務所を來訪せられたのがはじまりで、最も熱心な會の支持者となり、當時日給一圓に滿たぬ職人であつたが、一日休日を犧牲にして家大工の職違ひ乍ら、一個の本箱を作成し、友愛會の本部まで擔ぎ込んで來たことがある。又大正元年の暮の三十日に一本の手槍を持ち込んで來た、何のためかと聞くと、新調の會旗の旗竿の選定に苦んで居た折なので、是非新年例會に間に合せたいといふので、諸所を奔走の結果、麻布狸穴の古道具屋の店頭にあつたのを最も手頃と思つて買ひ込んで來たのだといふ話である。今も尙此手槍は友愛會本部旗の旗竿として、總同盟本部の一室に保存されてある。後年、各勞働團體の會旗の旗竿が槍式になつたのも、これが抑も濫觴となつたものと思はれる——尤も此頃は警察の干涉によつて槍の尖端が揉ぎ取られてはあるけれども——。

以上を以て一通り會の陣容は定まつた。卽ち會長あり、幹事あり、會計ありといふわけだ。是に於て我等は豫ねて準備してある草案に從つて會則の審議に從つた。併し會則に先立つて先づ會の建前、立場を明かにする必要がある。そこで先づ綱領といふものを決定した。綱領は三ケ條と定め第一は共濟と相互扶助、第二は修養向上努力、第三は地位の維持改善である。今左に當夜決定した

る綱領會則を掲げることゝする。

友愛會綱領

一、我等は互に親睦し、一致協力して、相愛扶助の目的を貫徹せんことを期す。

一、我等は公共の理想に從ひ、識見の開發、德性の涵養、技術の進歩を圖らんことを期す。

一、我等は協同の力に依り、着實なる方法を以て、我等の地位の改善を圖らんことを期す。

友愛會々則

第一條　本會ハ友愛會ト稱ス

第二條　本會ノ目的ハ綱領ニ掲ゲタル三要項ノ定ムルトコロヲ貫徹スルニアリ

第三條　本會ハ第二條ノ目的ヲ達センガタメニ毎月一回例會ヲ開キ毎年一回總會ヲ開ク

但シ會長ハ必要ト認ムル場合ニ於テ臨時集會ヲ招集スルコトヲ得

第四條　本會ノ目的ヲ達スルニ必要ト認ムル事業ハ例會ノ協議ヲ經テ會長之ヲ遂行ス

第五條　本會ノ事務所ハ當分ノ內之ヲ東京市芝區三田四國町二番地六號惟一館內ニ置ク

第六條　本會ハ本會ノ會務ヲ遂行センガタメニ、會長一名、幹事若干名ヲ置ク

會長ハ本會ヲ代表シ會務ヲ統理シ本會ニ關スル一切ノ責ニ任ズ

幹事ハ會長ノ指導ニ從ヒ之ヲ補佐シ會務ノ處理ヲナスモノトス

會長及ビ幹事ノ任期ハ之ヲ一ケ年トシ毎年一回總會ニ於テ之ヲ改選ス、但シ再選ヲ妨ゲズ、

選擧ノ方法ハ之ヲ會員ノ互選トス

第七條　本會々員タラントスルモノハ會員二名ノ紹介ニヨリ本會幹事ニ申込ムベシ

本會正會員ノ資格ハ勞働者ニ限ル

勞働者以外ノ者ニシテ本會ニ同情ヲ有スル者又ハ特殊ノ功勞アル者ハ贊助會員ニ推薦ス

第八條　本會ハ本會正會員以外ニシテ學識名望アリ且ツ本會ニ特殊ノ同情ヲ有スル人々ヲ以テ

本會ノ顧問又ハ評議員ニ推薦スルコトヲ得

第九條　本會正會員ハ本會ヲ維持センガタメニ毎月定額ノ會費ヲ納ムルノ義務アルモノトス
一度納メタル會費ハ如何ナル事由アルモ之ヲ返却セズ

第十條　本會正會員ハ本會ノ諸集會ニ出席シ發言並ニ投票ノ權利ヲ有ス
顧問、評議員、贊助會員ハ本會ノ諸集會ニ出席シ發言ノ權ヲ有スレドモ議決ノ數ニ加ハルコトヲ得ズ

第十一條　本會ハ本會ノ發達ニ從ヒ會員ノ職業別ニヨリ其部會ヲ編成スルコトアルベシ

第十二條　本會々則規定以外ノ事項ニシテ本會ノ發達ニ必要ト認ムルモノハ擧ゲテ之ヲ會長ノ自由裁量ニ委ス
本會々則ノ修正變更ハ本會例會ニ於テ出席正會員ノ過半數ヲ以テ決ス

附　則

第一條　本會ハ毎月一回(一日)例會ヲ開ク

第二條　本會正會員一ケ月ノ會費ハ當分ノ內之ヲ金五錢トス

第三條　本會ニ同情ヲ有シ且ツ毎月二十錢以上ノ維持會費ヲ納ムルモノヲ贊助會員トス

そこで私は厚紙表紙の日本罫紙を墨絲でとぢた帳簿に『友愛會々員名簿』と毛筆を以て筆太に記しその開卷第一頁に友愛會第一號會員として私の姓名を自署し、左へ左へと廻した。私の次に署名したものは岡村寅次郎君であり、次ぎは高橋秀雄君、次は伊東傳藏君であり、以下順を追うて廻つた。最後に重ねて私の手許に返された。私は名簿の上に手を置いて默禱した。一同起つて記念の堅い握手を交はした。再び元の座に復して互に見合つた、ホット一息といふ形である。我等は酷暑の際でありながら暑さを忘れて居た、磐石の如き責任と使命の感は頭上を壓して來る。重ねていふ、時はこれ諒闇第三日、大正元年八月一日の夜である。かくて日本勞働運動のさゝやかなる流はこゝに其源を發したのである。

會は漸く成立したが、會員十五名、會費合計七十五錢では、何もかも不自由だらけであつた。筆墨紙の類はどうやら私の自腹で濟ますにしても、椅子やテーブルや、文庫の類までは手が屆かない。此不自由がちの狀態に發奮して金十圓の寄附を申出でたのは、前記岡村寅次郎君であつた。すると、その頃統一教會に繁々出入して居た辯護士松尾清次郎氏はその事務所に使用中のテーブル一臺を寄

贈された。松尾氏はその頃年齢六十に近い人であつたが、明治初年の代言人出身で、自由民權の洗禮を受け、三田に住んで居られた關係から、福澤先生に私淑し、塾の出身でないに拘らず、屢々先生の散歩にも同行し、その感化を受けた人だといふ。嘗て東京辯護士會長たりしこともあり、正義硬骨、談論風發の士であつた。友愛會の創立せらるゝや、卒先して贊助員となり、後評議員に推された。

次に惟一館の直ぐ近所に戸板女學校があつた。校長せき子女史は私と鄕里を同じうするのみならず、統一教會の信徒でもあつたので、夫妻共卒先して友愛會の贊助員となり、良人芳三郎氏は後評議員となり、屢々集會の折に茶菓を寄贈され、芳三郎氏は講演のために獨り東京のみならず、近縣各地にまで出張應援されたのであつた。

ユニテリアン・ミッションのマコーレー博士は名譽會員に推され、弘道會長安部磯雄氏はかくれたる顧問――同氏は一旦公然顧問たることを承諾されたが、學校との關係上當分公然名を出すことを遠慮したいとの御意嚮であつたのでその意に從ふことにした――弘道會の役員では一高教授三並良、統一教會牧師早大教授の内ヶ崎作三郎氏等又屢々講壇に立つて應援されたのであつた。

會勢の進むにつれて次に問題になつたのは會旗と徽章である。近年、各種の團體が盛んに團旗やバッヂ、ボタン類を用ひるやうになつたが、當時は殆んど誰れも用ひるものがなかつた。――これについて一つのエピソードは、私が大正二三年の頃、友愛會の徽章をつけて、靜岡縣小山町の富士紡工場のあるところに遊説に行つたとき、動章類似のものを佩用してゐるといふ理由で警察の取調を受けたことがあつた位である――。會旗や徽章の意匠については私が一任された、一任はされたが實は思案に餘つて居た。そのとき不圖眼に付いたのは、統一教會の來客用の椅子に敷いてあつた布團の模樣である。その圖柄は西洋風の炬火を月桂樹の葉で圍つたものである。私は此圖柄から思ひ付いて、一の圖案を完成した。月桂樹の葉は、これをリボンで二ケ所くゝり付け、西洋風の炬火はこれを日本式の篝火に代へた。月桂樹はありふれた意匠であるが、これで勝利、凱旋（即ち勞働の勝利）といふ意味を現し、リボンをくゝり付けて、團結、一致、協力を表象し、火焔を以て、正義純潔、熱情、愛、光明を象徴した積りである。西洋の炬火の代りに日本式の篝火に改めたのは、我等の運動は決して西洋直譯の運動にあらずして、日本の國情、國民性に即した運動、即ち外發的運動にあらずして内部發生的運動であるといふ意味であつた。我等はこれを最初は徑八分位の洋銀

の打ち拔きとして、一個十錢で賣り出した。後には入會金二十錢として、會則、機關紙に徽章を添えて出すことにした。而して此徽章と同じ意匠を取つて會旗の旗印とした。その旗の地を黃色にしたのは、他意あるのではない。此圖案の出所の教會の椅子の布團が黃地であつたのでこれを其まゝ取つたのである。今は二十年の風雨に曝されてボロ〳〵になつた。別に昭和五年新調の總同盟本部旗が出來上つて、燦爛たる光輝を放つてゐる。而してその旗の地色は黃色でなく赤色である。會名も友愛會より勞働總同盟と變るにつれ、旗の地色も、本部より支部に至るまで悉く赤地となつた。これ日本の勞働運動の變遷進化の歷史を物語るものである。

二　顧問、評議員の人々

苟くも自治を本位とすべき勞働者の團體に、顧問とか評議員とかいふ制度のあつたことは、今日の眼より見れば、如何にも奇態にも異樣にも滑稽にも見えるであらう。けれども二十年も前の當時の實狀としては、全くの眞摯、何の不思議もなかつたのである。何故かといふに、日本在來の勞働者は全く一種の棄てられたる民であり、生ける器械であり、賃銀奴隷であつた。從つてその情操も理智も全く耕されて居ないのであつて、自覺の程度も極めて低く、階級意識なるものも、全く未發達の狀態にあつた。從つてかゝる人々を誘引して或る水準に到達せしむるまでの過程としては夫れ相當の膳立が必要なのであつた。但し顧問といひ評議員としても、何も一から十まで伺ひを立てゝ運動の方針を決定したといふわけではない。早くいへば一種宣傳上の便宜のためであつて、此人々の名前を列することによつて、對外的にも對內的にも我々の會に信用と箔とをつける必要のためであつた。會自體のことについては、常に協議會を開いて幹部を招集し、必ずその協議の結果に從つて事を決行して行つた。勿論、創立當時僅か二十八歲であつた私は、屢々顧問の人達に意見を求めその教を受けたことも少くはない。とりわけ安部磯雄氏には、教會の關係で會ふ機會も多かつたので、比較的最も多く相談相手になつて戴いた。

當時(第一回)の顧問、評議員の氏名は左の如くである。

顧問　法學博士　桑田熊蔵
　　法學博士　小河滋次郎

外賛助會員として別に當時統一教會の重なる會員三十五名を數へた。要するに友愛會は統一教會の間借をしてゐたやうなわけなので、自然これ等の人々の同情を求め、且つ相互の聯絡を取る必要もあつたのである。

評議員　法學博士　高野岩三郎
法學博士　堀江歸一
女學校主幹　武田芳三郎
文學士　内ケ崎作三郎
文學士　内藤瀧
一高教授　三並良
辯護士　松尾清次郎
子爵　法學士　五島盛光
幹事　安達憲忠
法學博士　關一

顧問の桑田熊藏博士は私の恩師である。大學四年生の折、私は先生より「工業政策」の講義を聽いた。桑田博士は人も知る我國社會問題の先覺者で、當時既に數種の著書を出して居られ、類書の少なかつた當時に於ては、貴重なる參考文獻であつた。先生は工業政策といつても、その社會政策的方面の講義に於て、一段の熱情と光彩とを發せられて、私共學生を惹きつけられた。私は教室の講義のみに滿足せず、屢々先生の自邸を訪問して、その蘊蓄を聽いた。私が勞働運動に志を立てたときに、眞先に此事を先生に話すと「ウム、面白い、やつて見給へ」といつて進んで賛意を表し、又少からず激勵された。後私が世上の誤解やその他のために困難に遭遇したときなども、先生は最も懇切に指導され、打開の勞を取られた。友愛會がいよ〳〵創立さるゝに當つて、第一に顧問たることを承諾されたのも、因縁淺からずといふべきである。

次に小河滋次郎博士については、前記生立ちの記の中に述べた浮浪人研究會のメムバーとして知遇を辱うするに至つたのである。當時浮浪人研究會の同志に、東京養育院巣鴨分院の幹事高田慎吾君があつた、後に大原社會問題研究所の主事に就任したが、私の親しい學友であつた。同君は日頃小河博士と親しくして居たので、同君より浮浪人研究會の話をしたら、博士は進んで會員たるこ

とを希望し常に熱心に出席されたのであつた。私はその關係で懇親を結び屢々御家庭にも出入した後に友愛會を創立するに當り、博士にも計つたが、卒先賛意を表せられ、又顧問たることも快諾されたのである。博士は單に名目上の顧問たるのみならず、東京、大阪その他各地に於ける例會、大會等にも出席して講演をされたこと數少からず、後に博士は知事大久保利武氏の懇請により、大阪府囑托となり、其救濟事業のために全力を傾倒さるゝに至るや私の友愛會も亦漸次大阪方面に延びて行つたので、彼の地に於て又屢々相會し、友愛會のために博士の御盡力を煩はすと同時に、私も亦時折博士の事業に參劃して微力を盡したのであつた。大阪方面に於ける友愛會の發展は、博士の協力に俟つもの尠少ではない。

法學博士添田壽一氏は大正三年の晩に至つて、顧問の一人に加はられたのであるが、博士こそ終始一貫、恐らくは昭和四年その長逝の直前まで、常に友愛會――總同盟――の發展のために――勞働階級の合理的向上のために、特に勞働運動者としての私自身の相談相手となり、指導者となり、有力なる援護者となつて呉れられた。私は衆ねて博士が夙に勞資問題の先覺者であることは承知して居たが、直接に相知る機會がなかつた。然るに大正三年の十二月であつたと思ふ、社會政策學會の例會が學士會に於て開かれた折、博士は勞働問題を論じ、我國に尙勞働組合の組織なきことを痛論された。然るに座に私が控へて居たのみならず、桑田熊藏博士が幹事として席に在り、添田氏に對して、日本にも既に幼稚ながらもその組織の出來てゐることを告げると、博士は稍々驚かれたやうで、やがて別席で私の話を聽きたいといふのである。私は友愛會に就て概略御話したのであるが、尙盡さゞるところがあるので、その翌朝博士の自邸に御伺ひすることにした。私は創立の動機より詳細を述べ、且つかゝる事業の創業期には大人物を要するので、博士に進んで會長を引受けて下さるまいかと懇請した。それがために現在の日本興業銀行總裁の地位を擲つ如き何でもないではないかとまで極論した。博士は私の不見向の暴論には可なり辟易された樣でもあつたが、又少からず動かされたやうにも見えた。やがて博士は襟を正して申さるゝには

「如何にも貴方の御熱心には感動しました。併し私は會長といふ柄ではない、矢張創立者の貴方がどこまでも會長として會を守り立つて行くべきだと思ひます。私は微力ながら必ず出來る丈けの御盡力をしませう」

といふのである。そこで然らば是非顧問にといふことを御願したら快く受諾された。これより博士

は最も熱心に後援の實を擧げられた。當時白面の一書生に過ぎざる私としては、何もかもやつて行くのに困難を極めたが、博士は屢々身を以てその缺陷を補ふことにつとめられた。演說會講演會等には御都合のつく限り、可なりの片田舍まで辨當持參で出かけられた、公私の各方面への紹介の勞も取られた。大爭議等の場合には、博士には隱れたる御力添えも願つた。室蘭製鋼所の大爭議の折には、殊に御盡力を煩はしたが、解決（實は勞働者側の慘敗）に當りては、當時報知新聞の社長たりし博士は、自ら筆を取つて社說欄に論評を下し、友愛會の辯護を試みられた位である。又後に說かんとする私の第一回渡米の際にも卒先盡力せられ、爾來、友愛會より總同盟まで幾變遷を重ねたが、私に對しては常に慈父の愛を以て望まれ、私自身を通じて日本の勞資問題に貢獻せられんとする志は更に渝るところがなかつたのである。

評議員高野岩三郎博士は、帝大統計學の教授で私の恩師である。別に統計學の講義に於て社會改造の理想を說かれた譯ではないが、博士の亡兄房太郎氏は人も知る我が國勞働運動の先覺者で、何處ともなしにその面影が博士の風貌にひらめくのであつた。私はむしろ卒業後に社會政策學會に於て博士に親む機會を有つた。そして時々房太郎氏の運動中の苦心談、その犧牲となつて倒れられた顚末などを物語られ、博士自身の血脈の中にも燃えるやうな血潮の流れてゐるのを思はしむるものがあつた。後に博士が或は勞働代表に選ばれ、又は無產黨の顧問に推さるゝやうに至れる如き、要するに博士の此天稟、此性格の然らしむるところたるを思はしむるものがある。

堀江歸一博士も社會政策學會で知つた人である。博士は慶應の教授で、ユニテリアン教會とは因緣も深く、友愛會創立前、通俗講話會にもよく出演を煩はした人である。友愛會創立後は博士も最もよくその例會等に出席して講演をせられた一人である。

三並良、內藤瀧兩氏は共に統一基督教弘道會の同人で、三並氏は當時一高教授、內藤氏は陸軍教授であつた。日常相會する機會も比較的多く、種々の指導と援助とを被むつた。一人は一高教授一人は陸軍教授であつて、然も勞働團體の評議員としてその名を列し得たところに當時の世相を伺ひ知るべきではないか。

內ケ崎作三郎氏は鄕黨の先輩で、且つ既述の如く私には恩義のある人である。その頃英國の留學より歸朝されて、宗教界に一大改革運動を起し、ユニテリアン協會を改めて統一基督教會と稱し、その牧師となられた。新神學を眞向に振りかざして論陣を張り、一大センセーションを捲起した。

加ふるに天成の雄辯を以てしたので、同氏の講壇には青年の俊秀が集まつた。例へば今早大文科の吉田絃二郎氏の如き、同政治科の高橋清吾氏の如き、若くして悲劇の主人公となつた野村隈畔氏の如き、又は無政府主義文學の尖端を行つた加藤一夫氏の如き、後の辯護士平山六之助氏の如き錚々たる人々が集まつて居た。私は友愛會の創立に當つて、内ケ崎氏を最も信頼すべき評議員の一人に推薦することを得たるのみならず、その周圍の俊秀をも合せて贊助員に列することが出來た。

松尾清次郎氏に就ては前に述べた。安達憲忠氏は當時東京養育院の幹事として、都下の救濟事業界にあつて錚々たる人物、關一氏は社會政策學會に於て知つた人、私はその『工業政策』殊に下卷の社會政策的論策研究に於て深くその學殖識見に推服し、乞ふて評議員になつて頂いたのである。時折講演にも出席された。

讀者諸君は或は恐らく評議員の名の中に「子爵」五島氏あるを發見して、殊更奇異の念を抱かれるであらう。五島子は當時内務省囑托として細民部落改善の事に專心して居られた。肥前五島の殿様で、帝大出の法學士であつた。矢張浮浪人研究會の仲間の一人で、私は年配も相しき、屢々往來したものである。その頃としてはかゝる人の名の列せられてあることが、實に對内的にも對外的にも却つて效果的であつたのである。

其他評議員中には平野鐵工所主平野龍亮氏、大江印刷所主大江太氏、東京電氣工業部長新荘吉生氏等がある。何れも今日の資本家氣質の持主ではなかつたが、工場主であり、又資本家の地位に立つ人には相違なかつた。併し平野氏の如きは自ら海外で勞働生活の體驗を積んだ人で、最も理解ある工場主といつてよかつたであらうと思ふ。徒弟の寄宿舍を設け、集會を催しては自ら淳々として說くところがあり、身を以てこれを敎導しやうと努めて居られた。そして工場も事實上友愛會のクローズド・ショップ締付工場であり、今日の團體協約とまでは行かなくともそれに近いものがあつた。大江太氏は大江卓氏(後に天也)の令息で、自由主義者であつた。工場も大體締付工場同樣で、私は屢々同工場支部例會に臨むため、同會社樓上に開かるゝ會合に列席したものである。

新荘吉生氏は向軍治氏の令弟で、東大出の理學士であつたが、技術家肌の人に似合はず、經營の材幹あるは勿論、趣味も學問も廣い人であつた。向軍治氏の紹介で同氏に會つたが、勞働問題に關して意見の相違を見、激論三時間に及んだ後、漸く同氏も納得するところあり、進んで評議員となり、會の發展のためには陰に陽に盡すところ甚大であつた。川崎工場の大半は會員となり、大井工

場は殆んど全部入會し、集會のために會社事務所樓上を使用することを許された。時折その工場内の職場に爭議の起ることもあつたが、決して資本家氣質を發揮して片手落の所置を取ることなく、極めて公正なる見地に立つて裁斷するといふ風であつた。一例を擧げると、同社川崎工場の一職場で、四十餘名（いづれも友愛會員）の爭議があつた。爭議といつても會社に對する不平から來たものではなく、その職場長の技手某の侮辱的言辭に奮慨したものであつた。（その頃此種の紛擾は各方面に多かつた）そこで私は事情を新莊氏に述べ、其技手をして勞働者の前に陳謝せしめよと要求した。然るに新莊氏は言下に快諾して、即刻右技手を呼び出し、私の前で面責し、陳謝するやう嚴命を下したのであつたが、工場長の伊東氏は、それでは監督者の威信にかゝはるといつて極力反對した。併し氏は頑として聽かなかつた。私は直ちに右技手を勞働者側の集團して居る川崎支部に連行し、兩手をついて謝罪さして、平和に局を結んだことなどがある。

最後に同じく評議員であつた神田孝一氏について一言したい。同氏は當時淺草煙草專賣局の製造課長（即ち工場長）の地位にあつた。兼ねて工場管理問題について研鑽を重ねられ、堂々たる識見を持つて居られた。（「工場管理」の大著あり）私は同氏とは社會政策學會で知合となつたが、それ以來私は特に同氏と懇親を重ね、屢々私は同氏を淺草の工場に、又御自宅に訪ねて會談することを樂みとしてゐた。その中間もなく淺草の專賣局にも友愛會の支部が出來た。その發會式は、その頃局の門前にあつた植木屋といふ寄席でやつたが、氏も親しく出席して祝辭やら注意やらを述べられたのであつた。政府の官吏であり、又多數勞働者監督の地位にある同氏が、勞働團體の評議員たることについては、上司からその事情を質して來たさうだが同氏は勞働者監督の任にあるが故に、勞働者向上の機關に特殊の關心を有し、その助長發達を計る必要があると思ふと答辯したといふことであつた。氏は今尙研究の手を緩めず、孜々として勉めて居られる。

吉野作造博士も、創立後兩三年にして評議員の一人に列せられた。同氏は當時筆舌共に非常に多忙であつた折で、常時會合に出られるやうなことはなかつたが、併し私自身を通じて、會の發展と基礎の確立に、寄與せられたことの多いことは、今更多言を要せざるところである。

元利用

三　友愛新報の發行

會は漸く出來た、內容も少しづゝ整備して來る、會員の數も續々と增して來る、だが宣傳の機關としては、所謂機關紙がなくては駄目だ、併し五十や百の會員では出版費が出ない。これには殆んど途方に暮れたが、結局、時事問題は載せず、出版法による發行とすれば、保證金がなくて濟む。まよ第一號の出版費位はポケット・マネーから絞り出さうと決心して、幹部諸君に謀つたところ、諸君も大に喜んで贊意を表してくれたので、いよ〳〵十一月三日を以て初號發行の段取に進んだ。

菊四倍版四ページ、一ページ五段組、一段四十一行詰、總ルビ付とし、第一ページは論說並に連續講義物、第二ページは講演欄とし、例會や通俗講話會の講演を筆記して載せることゝし、第三ページは會員並に會友のための文藝欄とし、小說、隨筆、和歌、俳句等に割くことゝし、第四ページは會員の寄稿、會報、廣告等を載せることに決めた。後には坂本正雄君が出版部の主任として活躍してくれたが、最初は一から十まで皆私が直接に手を下すの外はなかつた。幸ひ學生時代に雜誌

「新人」の編輯に從ひ、秀英舍時代に『印刷雜誌』を經營し、ついで朝日社に入つて社會部の市內版の主任をやらされた經驗が役立つて、幸ひに餘りに間誤つかずに濟んだ。併し其出來上りを見ると、頗る不出來で恥かしい至りであつたが、幹部、會員共有頂天になつて喜んで、會勢も亦メキ〳〵と發達して來たのである。

今試みに其第一號の出來榮えを見るに、先づ第一ページには勞頭に「發刊の辭」を載せ、次ぎには『友愛會案內』といふリーフレットを再錄して、「友愛會とは何ぞや」といふ入會の勸めと、會の綱領と會則とを載せてある。第二ページは殆んど全面を講演筆記に當て、安部磯雄氏が一度通俗講話會に於て試みられたる「最低の生活費」といふ講話が載つて居る。その中央のところを中拔きにして、山野春吉といふ人の名で「工夫の歌」を挿入してある。勞働者の生活を歌つた短歌である。其下段の下尾には短かい「會報」が載つて居るが、其時の會員數四十八名と報じ、八月、九月、十月の例會の景況を報じ——

いづれも活氣ある會合で、毎回二十名前後の會員が集まつた。第一回は相談會、第二回は會長の「權利義務の話」あり、第二回には安部磯雄氏の「勞働者の自尊心」の講話あり、去る十一月一日

は山崎法學博士の「貨幣の話」があつた云々

とある。以て當時の概況を彷彿することが出來ると思ふ。

第三面は文藝欄で、殆んど全面を吉田絃二郎氏の小説「淺黄服の男」といふ勞働者の描寫を戴せてゐる。吉田氏も苦學力行の士で、或期間肉體勞働の體驗をも持つて居られるといふ話で、書かゝれた物にヒシ〳〵と胸に迫るものがある。而して此短かい小説はたしか吉田氏にとつては小説に執筆された最初のものではないかと想像される。吉田氏はその後も時折文藝欄に寄稿されて紙面に光彩を添えられた。

第二號以下二十數回に亘つて、私は當時漸く施行し始まつた『工場法釋義』を連載した。工場法は我國に於て勞働立法としては最初のもので、これが施行に當つては疑義百出の觀があつた。私は一應の連載を終へると直ぐこれを一冊のパンフレットに纒めて出版した。何等一般的宣傳を試みなかつたが、注文殺到して五千部を賣り盡した。多少の收益は擧げて友愛會出版部の所得に歸したのである。

第二號以下、記事が輻輳して到底四ページに收拾し切れず、二ページを增して六ページとした。

更に第三號よりは四ページを增して八ページとした。翌二年八月以降は更に一日十五日の月二回發行に改めた。以て會勢發達の一斑を伺ひ知ることが出來やう。

今當時の「友愛新報」の綴込を繰つて見ると、萬感交々起るが、中には隨分隔世の感あるものがある。第二號には堀江博士の「職工組合の話」といふのが載つて居るが、博士は先づかういふ調子で話を始めて居られる——

今夕は主として英國に於ける勞働者の現狀を話し、職工組合なるもの〻如何なるものなるか、又日本に於ても斯くの如き組合を起してよいか否か、起すとすれば如何なる方法に據るかといふことを申して見たいと思ひます云々。

以て當時の世相と勞働階級の自覺の程度とを伺ひ知ることが出來やう。

更に第四號には、今の丸山警視總監の「警察の話」といふのが載つて居る。當時丸山氏は警視廳の方面監察官であつた。社會問題に關して特に興味を持ち、注意を怠らなかつた。現に前記浮浪人研究會の一人であつた。後に特高課長に就任の折にも、屢々勞働爭議等に關して、理解ある裁決を下したものである。私とは大學時代同期の誼があるので、友愛會創立後も度々會の例會や講演會に出

席された。京橋支部發會式の折には、方面監察官の制服のまゝで臨席し、祝辭を述べられたことがある。其の頃勞働者の集會に、警官の「臨監」することはまだ流行らなかつたのであつた。丸山君は曩に警視總監に就任するや、早く『明るい警察、強い警察、正しい警察』の三標語を掲げて、警察に對する平素の理想と抱負とを明かにされたが、焉んぞ知らん、二十年前、惟一館の講堂に於て其片鱗を示して居られるのである。

其頃丸山君の紹介で、同君同郷の後輩であるといふて、當時尚一橋高商專攻部の學生山縣意一君が來訪された。同君は同專攻部卒業論文に「勞働組合論」を草し、後單行本として公刊されたが、其末尾に於て、漸く創立された許りの友愛會に就ていとも親切な紹介をして居られる。これは恐らく友愛會を世間に公に紹介したものゝ嚆矢であらう。これより山縣君は親しく友愛會の本部に出入して、我等の最もよき相談相手となつてくれた。後に同君が神戸高商の教授に就任されて後も、勞働組合に對する態度に變りがなかつた。惜むらくは此少壯學者は病のために夭折した。此山縣君が「チャック君の一生」と題して、第二號以後、勞働組合の實際智識について連載してゐる。同君は其書き出しに——

「チャック君の一生」といふ題で、私は英國に於ける職工組合の實況を述べて見たいと思ひます。職工組合のことは諸君の大部分が最早御承知のことゝ存じますが、其實際については未だお聞きにならない方も多いかと存じます。そこで成るべく面白くこれを書きたいと思ふのでありますから、讀者諸君も活動寫眞でも見る氣になつて、打ち寛いで讀んで下さい。

と、こんな調子で五六回連續して、所謂職工組合の仕事の內容、その效果、その手續等を說いて行かれた。當時はかゝる智識を與へる機關が何一つないときであるから、會員の間に大に歡迎を受けたものである。

それから講演欄には引續き、小河滋次郎博士の「勞働神聖論」が出る、阿部秀助慶大教授の「歐米勞働者の話」が出る、添田壽一博士の「勞働の萬能」が出る、武田芳三郎評議員の「己れを知れ」が出る、鎌田慶大塾長の「工業と自尊」が出る、出るものも出るものも此調子で、兎に角一日も早く我國の勞働階級に正しい「自覺」を植付けたい、而して此正しい自覺の上に立つて、强固健全な勞働組合への組織に導きたい、これが新報の編輯者であり、會の會長たる私の寤寐に忘れざる念願であつた。友愛會はそのための搖籃、幼稚園、支關であれば足るのだ。私はその搖籃の監護人、幼稚

園の褓姆、玄關番であればよいのだ、小學、中學、大學、大學院等々に至つては他に自づからその適任者がある筈だ、と、これが私の信念であつた。其頃勞働者の組織運動に關する團體は何一つなかつた。從つて其運動を刺戟し、其方向を指示する機關紙なるものもあらう道理がない。友愛新報が貧弱ながら、菊四倍版八ページの毎月二回發行がせめてもの慰めであつたのである。

友愛新報は大正三年十一月に至つて、「勞働及產業」と變つた。それは單に題名が變つた許りではなく、新聞紙型より雜誌型へと變つたのである。それは又單に新聞より雜誌へと形を變へたばかりでなく、同時に內容に著しい變化が起つた。固より指導精神の變化ではないが、編輯員の增加、編輯の整備である。いはゞ私の片手間仕事より多人數の協力仕事へと轉化發展を遂げたわけである。友愛新報の終刊號たる大正三年十月十五日號（第三十八號）には左の如く宣傳してある——

本會創立第三年發展計劃

友愛會創立以來玆に滿二年二ケ月、來る十一月を以て事業年度第三年に入る。諺に曰く「三年經てば三歲になる」と。本會は此世に生れてより將に三歲にならんとし、大抵母親の乳離れしてもよい頃となつた。顧みれば過去三年の間に成し遂げたる事業は幾程もないが、それでも會員の數は全體に於て三千五百に達し、醫療部及法律顧問部の取扱件數は本部のみにても數百件に達す。會員個人の離合集散も亦免れなかつたのであるが、併し乍ら大勢上よりして見れば、依然として進歩一方である。吾人は彼の公私の慈善事業に於けるが如く、財政上においては何等貴族富豪の後援を藉ることなく、全く自助をもつて遣り通して來た。今後も亦斯くあらねばならぬと信じてゐる。

斯くて本會は玆に第三年を迎ふることになつたのであるが、此機會を利用して一發展を試みたいといふ考へで、從來の『友愛新報』を改めて、月刊雜誌『勞働及產業』を發刊しやうと決心したのである。而して其第一回の發行日を來る十一月一日と定めた。これは先月十九日の協議會に於て決定した通りである。本誌の發展に盡さるべき人々は顧問評議員の人々は勿論、特に神田孝一氏林一男氏、豐原又男氏、高田愼吾氏、古川仲太郎氏等毎號執筆せらるべく、添田、桑田の二顧問も、毎號卷頭に御意見を發表せらるゝ筈である。こゝに一通り陣立は揃つた譯であるが、夫れにつけても此際

會員諸君へ御注文したいのは、

第一、會費は規則正しく前納せらるゝ事。これ出版費の重要基礎なるが故である。

第二、極力會員又は購讀者を募集せられたき事。これ本會の主義を宣傳するのみならず、同時に財政上の土臺を固くする所以なればである。

切に會員諸君の奮闘を待つ。諸君夫れ奮へ！

といふのである。當時の情勢彷彿たるものがあるではないか。

機關紙は新聞型より雜誌型となつた。形式に於てはたしかに一段の進歩である。然るに出版費は俄然として倍額に達した。會費は此頃一ケ月十錢に値上したが、本部と支部と折半するのであつて此半分で本部は誌代も人件費も一切支辨しなければならなくなると、實に途方に暮れる外はない。會員の募集を激勵して見たが、急激に效果の上る筈もなし、これは實に私にとつて頭痛の種であつた。十一月は兎に角越した、併し十二月は越せさうにない、百方思案を凝したが力に及ばず、止むなく私の持つてゐる凡ての物を投げ出さうと決心し、フロック一點、背廣一點、時計一個、書籍數十冊を入質して一時の急を凌がうと思ひ、二十八日まで待つことにした。二十八日に至るも格別名案が浮んで來ない。遂に覺悟を極めて二十九日には決行しやうとしてゐると、偶然にも或る人より

じて二百圓の寄附の申込があつた。全く思ひも寄らぬ喜捨であつて、私もお蔭で質屋の門を潜らずして濟んだ次第である。

茲に一通り紹介しておかなければならぬ人々がある。「それは此「創立時代」に活躍した若き人々の中で、特に異彩を放つた三人の智識階級出身者である。一人は野坂鐵君、一人は久留弘三君、今一人は酒井龜作（後興と改む）君である。

此三人は大正三年の春頃よりして、殆んど時を同じうして友愛會に近づいて來た。そして殆んど時を同じうして友愛會に入つた、そして一心同體となつて非常に奮闘された人々である。今はいづれも去つたがその去つた事情や時期は一樣ではない。

野坂鐵君は大正二年の暮か、大正三年の春に堀江歸一博士の紹介狀を以て來訪した。慶應理財科の二年で、もうぢきに卒業するが、卒業論文に勞働組合のことを書きたいから、友愛會の實際運動を見せ、又話をして貰ひたいといふのである。私も奇特なことゝ思つて快く會談した。野坂君は其時、縞の着物に鳥打帽を被り前垂をかけて來た。どこかの番頭さんといふ風采であつた。併しこれはその頃の塾の風であつた。溫厚な眞面目なそして內氣さうな、それで居て內に熱情を持つてゐ

る小柄な眉目清秀の青年であつた。大抵一週三四回はやつて來た、休暇の折には他の事務員の諸君と一團になつて働いてくれた。かくて大正四年春卒業と同時に友愛會本部員として入つて來たのである。眞面目な學究肌の人でつひに一回も演壇に立つたことはない。その位の人であつたが到頭第一回の日本共產黨事件に連座して仕まつた。出獄の翌日私は同君を荏原小山の自宅に慰問に行くと二三町先の赤松克麿君の宅に行つて居るとのことに、私は更に赤松君の宅まで跡を追うた。同君は私の顏を見るなり「どうも會長いろ〳〵心配かけて濟みませんもう今後は決してこんな馬鹿なことはしませんから、勘辨して下さい」といつた調子に詫びるのである。赤松君も亦ひたすら恐縮して惡かつた、間違つて居つたといつて、はては兩君共に私の前に手をついてあやまるのである。私はそんなことはするに及ばんから、過去は過去として今後のことをよろしく賴みますよといつて分れたのであつた。赤松君は別に事件に連座してゐるのではない。併し何か臭い關係あるもの〻如く睨まれて居た、そして事實上同君は當時共產理論に共鳴し、同志と常に議論を上下して居たのである。野坂君は洋行以來一層其信念を堅くしたもの〻やうである。野坂君その後のことは世間周知のことであるから、述べる必要はないが、私は同君の長兄次兄共によく知つて居る、奧さんも亦固よりよく知つて居る、私は今でも此底力のある立派な闘將を我等の陣營より失はざるを得ざるに至つたことを殘念に思ふものである。

久留君は早大政治科大正四年出で、矢張野坂君と一緒に友愛會本部に入つて來た。これより先き同君は一日酒井龜作君と同道して私を訪問して來て、いろ〳〵勞働問題の話をして行かれたが、既に兩君協力して、小石川久堅町に或る一つの勞働團體を組織してあるが、その方も免倒を見てくれといふ話であつた。

同君は野坂君とは性格が餘程違つて居て、豪放磊落な一面に用意周到なところがあり、陽氣で元氣で能辯能文、しかも事業經營の材能もあり、行くとして可ならざるなしといふ風であつた、大正五六年の頃から關西方面に轉戰し、大阪、神戸の方面の基礎を固めた。大正十一年神戸の大爭議の折には、賀川豐彥氏と共に陣頭に立つて奮戰力闘し、遂に紛糾の辱めをも受けたのである。惜い哉、爭議後總同盟を去られた。近年まで神戸に留まつて勞働者教育のために盡力されたが、一昨年その關係して居た司厨同盟が海員組合と大合同を遂ぐるや、我事終れりと言ふが如く漂然として一家を擧げて熱海に赴き、今や悠々自適の生活を送つて居られる。併し同君は別に思想上何等の變化を來

して居るのではないやうであるから、必ず捲土重來の時あるを信ずるものである。

酒井君は久留君と共に友愛會に近づいて來たが、久留君が當時學生であつた時に、酒井君は日本大學を出て、遞信省の一屬吏をつとめて居た。官吏たるが故に表面運動に顔を出せなかつたが、內部的に同君の援助を受けたことが甚だ多い。大正五年春であると思ふ、遂に同君も決然遞信省を辭して友愛會本部に入り會計部長の要職に就くと共に、雜誌『勞働及產業』の編輯同人として働いた。然るに大正八年であつたと思ふ、同君一身上の都合によりて退會され上海に於て、野坂君の次兄小野氏の經營する鐵工廠に入り、遠く支那に去つた。今日は獨立して基礎を確立し、上海の邦商界にあつて活躍して居られるが、勞働運動に對する志を斷たず、我等と交渉をつゞけて居るのみならず、屢々我等の同志にして上海を訪ふ者、恐らく同君の厄介にならぬ者はないといふ有樣である。

四　最初の勞働爭議

友愛會創立後未だ一年ならずして、一つの勞働爭議に打突かつた。更に又その後一年ならずして今一つの大きい爭議に出會した、一つは大正二年六月末の神奈川縣川崎に於ける日本蓄音器會社の爭議、一つは東京府下吾嬬請地の東京モスリン會社の爭議である。勿論、その以前にも爭議といふべきものはチラホラあつた。併しこれ等はいづれも爭議のボヤともいふべきもので、その關係の人數に於ても、其發生の原因に於ても、勞資の衝突といふべき種類のものではなく、いはゞ仲間の喧嘩乃至は感情の衝突ともいふべきものであつた。勞働組合運動の上に於ける爭議ともいふべきものは、先づ友愛會としても、私自身としても最初の經驗は、次に掲ぐる事件である。何故に私が此二つの爭議を取立てゝこゝに述ぶるかといふに、共に當時の爭議としては代表的のものであり、此爭議を通して、當時の勞働事情を伺ふに足るものありと信ずるからである。

大正二年の六月廿八日であつた。私はその頃職を奉じて居た統一基督教弘道會の機關雜誌『六合雜誌』の發送をセッセとやつて居ると、その日午後三時頃、同じ月の七日に發會式を擧げた許りの川崎支部から、山中、長谷川の二君が顏色を變へて駈け込んで來た。何事ならむと、早速別室に請じて來意を問へば、兩君交々語るところ左の如くである——。

私達蓄音機商會の從業員は、本日突然次のやうな通告を受取りました。即ち七八兩月は會社の都合によつて暑中休暇をする、其間の生活費には、例年六月末に下げ渡してある賞與金(日給者)積立金(請負者)をば、七月末に半額、八月末に半額を拂ひ渡すことゝするといふのです。私共は寝耳に水で大に驚かされましたが、結局協議の上、會社に向つて次のやうな申出をしました。即ち我々は今突然さう申渡しを受けては當惑する、夏期休業はいらないから、是非仕事をつゞけて貰ひ度い、でなければ二ケ月分の給料を渡して貰ひ度いと。然るにいくら談判しても毫も聽き入れてくれません。止むを得ず一同協議の上で、事件の解決を會長に御願ひしやうといふことになりましたので、御迷惑ながら御盡力を御願ひに參りました。

といふのである。

私はこれを聽いて勃然として怒りを感じた。時は六月の廿八日である、此日に至つて突然七月から夏期休業だとは、一體何たる人を馬鹿にした仕打であらう。夏期休業とは一寸洒落れて居るやうに聞えるが、その休業は自分の費用で休め、その代り毎年六月末に渡してある賞與は七月末と八月末まで取つて置いてやるといふのである。私はその時頭にひらめいたことは、これは普通の日本人間に見る勞働者無視の仕打のみではない、米人の立場(日本蓄音器商會は名目は日本といつて居るが、實は米國資本の經營するところ、社長支配人工場長副工場長悉く米人であつた)から日本人を無視してかゝつてゐるなといふ感じであつた。

「よろしい」と私は言下に引受けた。若き日本人の血汐が一時に全身に漲り走つた。勞働運動の最初の小手調べに、米人支配人に一泡吹かせずに置くものかといふ猛烈な反感であつた。併し感情許りで物事は成功するものでない。第一その支配人のラビットといふ人間に會はなければならぬが、突然訪ねて行つても、關係のない第三者とか何とかして會はぬかも知れない。これはのつぴきならず會ふことの出來る方法を講じなければならないと思つたので、早速ユニテリアン・ミッションのマコーレー博士に相談すると、幸にも米人仲間として面識ある間柄だといふことである。そこで私は同博士よりラビット氏に對して紹介狀を書いて貰つた。先づ會ふことが第一だ、會ひさへすれば、それから先きは何とでもなる、といふ考へであつた。併し會ふことの前に更に大切なことは一同の結束である、そこで私は前以て當日より罷業に移つて居た全從業員諸君を集めて貰つてゐた。私は一同の諸君の前に立つて、諸君の御依頼ある上はその要求の貫徹するやう極力奮鬪するつもり

である、たゞその談判の手段は勿論、諸君の實際行動についても、私に一任してくれるかと尋ねたのである。するといづれも異口同音にかくなる上は、事の成否を問はず全權を委任する、自分等の行動についても亦御指圖のまゝに從ひますといふのである。私は更に結束の必要なる旨を力說し、裏切者の出ないやうに固くこれを警め、その足で直ぐ警察署に須永署長を訪問した。勞働爭議の進展に當つて一番困るのは警察の横槍である、殊に當時は尙治安警察法第十七條の光つて居たときである、迂つかりすると資本家との戰ひが警察相手の問題に轉化する恐れもある、私は爭議の經過につき警察當局に一應の理解を得て置くことは、戰術としても必要であると考へた。果して署長は私の訪問を喜んだのであつた。私は爭議に至る大體の經過と、爭議團代表として會社側に談判開始の決意とを語つた。署長も私が代表して懸合ふことがよからうといつて贊成した。そこで私は、それでは勞働者を動かすことに就て私に自由を與へてくれと交渉した。どうするのかとの問に、私は明日會社に出かけて談判する際に爭議團員全部を會社の門前に集合させたいと答へると、それは困る。立派な屋外集會だから、それを勝手にやることは丈けは承知が出來ないといふ。私は格別示威運動をやるのではない、たゞ從業員としては自分達の死活問題に關して代表して談判する人間を門前まで送り込みたいといふのは人情の自然であるし、且つその談判の成行を懸念し、一刻も早くその結果を聽きたいと思ふのも、それまた極めて自然のことであるし、そのため自分達の働いてゐる會社の前の廣場に三々五々集まつたからといつて、別に騷ぐわけではないから不思議でもありますまい。尙しかし當局として心配されるのも無理はないから、そんなら私服刑事の二三名も寄越してお置きなさいといつて、漸く三々五々ならといふことで諒解を得た。時恰も夜になつたので私は一旦歸京した。

翌廿九日朝私が支部に出かけて行くと、もう多數の從業員諸君は續々と參集される、二三刑事の諸君も亦詰めかけて來た。そこで私は刑事諸君に話しかけた、諸君は一體どう思ふ、今度の爭議はどつちが正しいと思はれるか、誰れだつて突然夏休みをやるから休んでくれ、尤も賃銀はやれないけれどもと言はれて腹の立たん者があるかね、それに爭議團は何も會社を襲擊するの、叩き毀すのといふのぢやない、私に任せてたゞ成行を心配のあまり後からついて來るといふのは差支へないぢやないかと漸く納得を得たので、サア諸君私はこれから交渉に出かけるよ、成行心配の人達は三々五々ついて來てもかまはんのだ、但し是非來いとは決して言はんから、支部に殘つて居たい人は殘

つて居給へといつてサッサと歩き出した。すると幹部の諸君は心得顔に、我々は我々の死活問題について會長にお願して、たゞ一人丈け行つて頂いて、安閑としては居られない、俺はどこまでも會長について行くんだといつて立ち上る。すると我れも〳〵と後からついて來るので、三々五々だから隊を作つたわけではないが、隊を作つたも同樣、私を眞中に取り圍んで一同は押出して行つた。途中刑事の諸君は度々一團となつては不可々々と警告したが、同じ目的で、同じ會社の人間が同じ所へ行くのに自然に一緒になるのは仕方があるまいといつて、到頭會社の門前まで行つて仕まつた。門の中に入るときに私は一同に別辭を述べた、一同は萬歳を連呼して門内に送り込んでくれた。一同は尙ほも門の附近より退去せず、田圃の中や堤防の上やに三々五々屯ろして動かず、宛然爭議團が會社を包圍したるが如き形勢となつた。私は此情勢を背景として、事務所に進入したのである。當時の『友愛新報』に私は當日談判の光景を左の如く述べて居る——。

ラビット氏（支配人）は當日午後の三時といふに漸く會社へ見えた。僕は直ちに友愛會長の資格を以て會見を求めた。一時間程の後、井合庶務課長と予を階上の事務室へ導いた。階上は二百疊も敷かるゝかと思ふ大廣間で、數十人の事務員が急がしく執務してゐる。總支配人の卓子は其中央に据ゑてあつて、ラビット氏を始め、工場長リユキス氏、副工場長シャッツマイヤー氏なんぞ居並んでゐる。僕が設けの椅子に就くや否や、ラビット氏の最初の言は斯うである。『君は英語は話せますか、私に會ひたい用事とは如何なる事ですか』と。用向の次第は名譽會員マツコーレー氏（當時既に名譽會員に推薦してあつた）の紹介狀に記されてある筈、改めて何の用事とは何事ぞ、僕も聊か癪に障つたが、先づ溫やかに來意を告げ、無事の解決を望む旨を述べた。けれども氏の見幕といふものは、机を叩き手を鳴らし、僕の顏の上まで乘出して來る勢、たゞ僕は丹田に力を集中して、飽くまでも冷靜ならんことを努めたが、中途に於て談判は屢々破裂せんとするの危機に迫つた。結局當日は物分れとなつた。明朝九時を期して重ねて會はふ、當所でその時重役會議を開くから、僕にも出席して意見を述べてくれといふ、勿論さういふ同氏の言動も餘程和らいで居た。

實をいふと、當日は危ふく掴み合ひの喧嘩になるところであつた、後で聞くとマツコーレー氏の紹介狀の中に『勞働者は飢ゑんとしつゝあるさうな』といふ言葉があつたさうで、あまりに大袈裟に物を言つてゐるといふのが、癪にさわつて居たらしいし、私を白面の一日本青年と見くびつて、えら

い見幕で嚇しつけたら驚いて引退る位に考へて居たらしいのである。ところがこちらは一向に驚かない、驚かんどころか、滿腔の憤慨を抑へて居たのだ、一つは勞働者を無視してゐる、一つは日本人を蔑視してゐる、來れ、日本人にも骨があるぞといふ意氣込で行つて居るのだ、私は多少自分の膂力に自信を持つて居た、學生時代にはこれでも柔道の選手であつた、年は廿九歳である、ラビット彼れ何者ぞといふ勢ひであるから、談判高潮した時には、我も彼も一緒に立ち上つたのである、私は彼を床の上に叩きつける覺悟で身構までした、もしその時販賣部長某の仲裁がなかつたなら、無論腕力沙汰まで行つて居たに相違ない。彼れは案外私の與みし易からざると見て取つた結果であらう。場所もあらうに、私に明朝の重役會議に出席して親しく意のあるところを述べてくれといふ、私はこれを快諾して辭し歸つた。

翌くれば六月三十日、約の如く午前九時に會社に同氏を訪づれると、氏のいふには、昨日あんな約束はしたが、突然のことで重役一同に通告を出すことが出來なかつた。此上は止むを得ないから東京電氣の當時工業部長の新莊吉生氏に意見を聽き、その裁決に從はふではないかとのことである。私は言下に承諾した。といふのは、新莊氏は既にその頃友愛會の評議員ともなつて居て、勞働者には溫い同情を持つて居る、決裁の惡からう筈はないと思つたからである。併し尙ほ念のため、ラビット氏が書類整理のため少し待つてくれといふ間に、新莊氏に電話をかけ、よろしく賴むといつた、氏も心得たとの返事である。

書類整理といつても一種の證據書類で、新莊氏に提出のためである。それがかれこれ二時間あまりもかゝつたが、その間に工場長と副工場長は、自分達の部屋に來て待つてゐてくれといふ、ついて行つて見ると、上等の葉卷を出し、商賣物ながら蓄音器に和洋の曲を奏して下へも置かぬ歡待振である。門前には昨日の如く大勢の勞働者が屯ろしてゐる。工場長の部屋からはよくこれが見える、何でも二人とも曾つて苦いストライキの經驗があつて、殊に副工場長のシャツツマイヤー君はイタリーの工場とかに在勤の折、多數の職工團に包圍されて袋叩きに遇つたことがあるといふ、さてこそ歡待の事情も讀めたといふものではある。

やがて書類が出來たと知らして來た、いざと許りにラビット氏と連れ立つて同じ川崎なる東京電氣に出かけて行つた。販賣部長の吉武氏が祕書役としてついて來た。

新莊氏に對しては交々事情と經過とを述べた、その間隨分爭ひもして、新莊氏に仲裁された。同

氏は辛抱強く兩者の言ふことを聽かれたが、結局最後の斷案はかうであつた。

日本では、會社の都合によつて俄かに仕事を休む場合には、之に對して手當を出すが當り前となつてゐる。若しこれが嫌だといふなら日本で事業は出來ない譯である。

事理極めて明白、一點疑義の餘地がない。ラビット氏も多少ツベコベ理窟を並べて居たが、遂に潔く新莊氏の意見に服し、尙最後の打合をするからといつて横濱に居る社長の許まで急行した。回答は午後の四時といふのである。――午後の四時は來た、會社の決定は左の如くであつた。

（一）會社は七月十五日まで仕事を繼續し、更に八月十五日より仕事を開始すべし。此一ケ月間は勿論從來通りの賃銀を支給す。

（二）七月十六日より八月十四日までは休業す、但し此一ケ月間の休業に對しては各自に對し、一週間分の給料を手當として支給すべし。

（三）賞與金は即時金額を支給すべし。

勿論、全部が全部從業員側のいふ通りになつたのではない、殊に一ケ月の休業に對して一週間分の手當とは、容易に承服し難いところであるが、一面に於て「一ケ月の休業が一ケ月に短縮された、賞與がお預けを喰つて居たのを即時拂渡しとなつたので、從業員諸君には喜色が蘇つた。私は當時の光景を左の如く（友愛新報第十號）記してある――。

僕が報を齎らして支部に參集した從業員諸君に告ぐれば、期せずして一同の顏に喜びの色が漲つた。僕が一度音頭を取れば三百の會衆は一齊に『友愛會萬歳』を唱和した。須永署長もいたく無事の解決を喜んで予の勞を謝された。僕が歸京しやうとすると、諸君は僕を圍んで停車場の構內に集まつた。發車間際に再び萬歳の聲は構內に響いた。

それから數日の後である。從業員一同の代表として廿七名の諸君が私の茅屋を訪問されたのである。そしてオヅ〳〵紫の幅紗から奉書包に水引をかけたものを差出し、一同私の前に平服するのである。私は『これは何ですか諸君』といふと、甚だ輕少ながら過日來の御奔走の御車代ですといふのである。私は勞働組合運動の本質を說いて、私の奔走は私のなすべき當然の事をしたのみで、御禮には及ばないと固辭すると、それなら會の方へ寄附したいといふ、それならば頂戴しませうといつて會計へ廻したのであつた。

するとそれから更に數日の後である、川崎支部の例會の日（七月十五日）に行つて見ると、今度は

町長小宮隆太郎氏が、會の費用として五十圓を寄附された。實は爭議の經過については町の治安に關して少からず心配してゐたが、お蔭で無事に濟んでこんな嬉しいことはないのだといふ。私もかういふ寄附は面白いと思つたから、辭退に及ばずして頂戴した。固より會の會計の方へ廻したのである。――かくて最初の勞働爭議は解決した。

次ぎには東京モスリンの勞働爭議である。これは最初から手がけた譯ではない。實は當時友愛會の存在も知らず、會社内部の勞働者諸君の手だけでやうて失敗した跡仕末を中途から持ち込まれて引受けたのである。併しその解決の結果については固より滿足といふことは出來なかつた。

事件の大樣はかうである。

その頃モスリン紡織界は不景氣の影響を受けて不況甚しく、其結果として當時の同業四大會社（東京モス、東洋モス、上毛モス、大阪モス）は協議の上操短五割と決し、六月一日（大正三年）より實施することゝなつた。そこで東京モスリンでは其直前に於て男女工合計一千百拾餘名を解傭した。然るにこれは相當手當もあつたので、先づ以て無事に濟んだが、素直に濟まぬのは殘留職工二千八百餘名に對する減給處分であつた。

六月十八日同工場内には左の如き掲示が張り出された。

掲　示

職工定傭給左ノ通低減來ル六月二十日ヨリ實施ス

一　現　給　三十一錢　改正日給　三十錢

一　現　給　一圓廿錢　改正日給　一圓

平均一割五分强ノ減給

織機、引通、精紡請負賃金左之通六月二十日ヨリ實施ス

平均一割五分以上減額

以上

作業部長

これを見た從業員諸君は頗る憤慨し、遂に期せずして、同盟罷業の勃發を見るに至つたのである。それは成程定傭給者は掲示通一割五分内外の減給であつたが、請負者に至つては四割乃至五割の減

給に相當するのである。然も東京モスリン丈けは、他の協定會社の無配狀態なるに拘らず、裕に一割の配當を繼續してゐる、社員連には減給も解傭もなく、その上ボーナスすら相當額貰つてゐるのである。事業の不振は職工丈けの罪かといつて、『やれ〳〵！』『ストライキだ!!』といふやうな勢で、忽ちの間に全部結束し、二十日の夜を以て完全に作業の停止を斷行したのである。

會社も此情勢に大に狼狽し、代表委員との間に數次の接衝の後、結局翌二十一日を以て左の如き覺書を以て妥協することになつた。

覺　書

一、大正三年八月二十日迄ニ減給ニ相當スル收入額ヲ或方法ヲ以テ補塡ノ途ヲ講ズルコト

一、大正三年十二月一日ヨリ減給前ノ俸給ニ復活スルコト、但シ復活ノ上ハ第一條項廢止ヲスルコト

大正三年八月二十一日

東京モスリン紡織株式會社

作業部長　登坂秀興㊞

東京モスリン紡織株式會社

職工一同

若し此事件にして此儘で濟んでしまへば、私などの出る幕ではなかつた。併しこれ丈けでは決して濟まなかつた。それは職工側の自覺であつた、階級的意識の眼ざめであつた。資本家や會社は到底信頼することが出來ない。自分に都合のいゝ時は甘言を以てどこまでもこき使ふが、少し都合が惡くなれば、眞先に自分等を血祭に上げる、俺達だつて同じ人間だ、いつまでも彼等の甘い汁を吸ふことの犧牲にされてたまるものか、團結だ、團結の力だ、團結より外にはないと、團結は遂に彼等の間の輿論となり、同月廿八日の定例休業日を利用して、各課の有志七八十名、本所押上倶樂部に集合して、遂に『工友會』なる一勞働團體を組織して仕まつたのである。

工友會は其會則第一條にも明示してある通り、一個の修養團體であり、親和團體であり、共濟團體に過ぎない。勞働條件の維持とか改善とかいふやうな條項には少しも觸れて居ない。併し其共濟といつても其附則に示すところに依れば、本人の意思に非ず、會社の不當解雇を受けたやうな場合には、調査の上で金八十圓也の惠與金を交附するといふことが記してある。萬一會社から睨まれて

馘られても、其犠牲者は決してこれを見殺しにしないといふ申合せである。會社もこれには驚いたものと見えて、百方策を講じて干渉壓迫を試みて來た。或は各課主任者よりその不心得を諭さしめる。或は威嚇的な掲示を張り出す、併し職工側の結束は堅く、頑として應じない。もちあぐんだ結果、今度は懐柔の手段に出で、左の如き掲示を出した。

掲　示

六月十八日掲示セル請負賃値下及ビ日給減額ハ來ル十二月一日ヨリ六月一日ト同樣ニ復舊スベキ筈ノ處都合ニヨリ來ル七月二十日ヨリ復舊ス

但シ大正三年八月廿日迄ノ減給ニ相當スル收入減ヲ或方法ヲ以テ塡補ヲ講ズルコトハ自然消滅ス

六月十三日

これで大抵納まるだらうといふ會社の目算はガラリと外れた。其效果は寧ろ逆であつた。職工諸君惟へらく、これは多分工友會結成の賜物かも知れぬと、却つて結束は前よりも固くなる許りであつた。勘忍袋の緒を切つた會社は遂に最後の切符を出した。登坂作業部長は會の幹部と認むべき者十二名を順次呼び出し、工友會を解散すべしとの會社の命令に服せざる者は、今日唯今限り解雇す る故、各自の工場に歸ることなしに即刻退場せよとの嚴命を下した。十二名の諸君は棄ねて期したることゝして、更に惡びれたる樣もなく、悠々として引上げて、幹部の一人にして會社の附近に住つて居た村上君の家に集合したが、報を聞いた殘留の職工諸君は一時に憤激して騒ぎ出したのである。

「一部の者が犠牲となつた時は、全部の力を以て之に當らう」、これが工友會の申合せである。既に幹部十二名の馘首を見た以上、これが全體の同情罷業に赴くは當然の成行であつた。併し馘首せられたる幹部諸君は、出來得る限り次の犠牲を最少限度に止めやうと努力した。夫れにも拘らず、事態は益々惡化する許りであつた。遂に翌十五日干蘭盆の休日を利用しての工友會員二百四十二名の集會の席上で「苟くも大和魂ある諸君は、よもおめ〳〵と會社に膝を屈して哀訴的態度に出ることは出來ないであらう」と言つたこと、其前夜村上君宅の幹部會に於て「最早かくなる上は第二の騒擾事件を惹起すの覺悟がなければならぬ」と言つたといふ、かどを以て、會長今西君は、所轄小松川署に檢束引致の身となつたのである。

これから先きの結束の崩れは早かつた。當時警察、檢事局に引致されることは、勞働者にとつて最大の恐怖であつた。會社は直ちに一般に通知狀を發して、十六日より出勤すべきを通達し、所謂役付なるものが、口を酸くして利害を說き脫退を勸めた。機關部職工大野某なるもの〻變心を機として、堤の切れたやうに結束は亂れた。斯くて今西會長の檢束引致、やがて送局といふこと丈けが事實として殘された。共に枕を並べて倒れたる他十一名の諸君の困惑は蓋し想察に餘りある次第である。恰も此時である、彼等同志の一人は友愛會江東支部の幹事齋藤君より、はじめて友愛會なる團體のあることを知つたといふので、協議の結果、思案にあまつたから、是非共救援を願ひたいといつて、打ち揃うて友愛會本部に私を訪ねて來たのである。

私は菊地、村上、横田三委員の交々語るところを聽いて痛く動かされた。問題は可なり惡化してゐるから、私の盡力もどれ丈けの效果あるかは分らないが、併し出來得る限りの努力をなすべき旨を告げた。

私は先づ第一に今西會長の釋放を求めることが急務だと考へた。そこで直ちに小松川警察署に林署長を、次に警視廳に丸山特高課長(今の警視總監)を訪ねて懇談を重ねたが、事件は既に檢事局の手に移つてゐるとの事に更に東京區裁判所檢事局に、係り今居檢事を訪問して、釋放を求めた。檢事は何も罪人を製造することが能ではないからとのことに、多少の望を囑して歸つたが、雖行かずして、公判に於ては檢事求刑懲役三ケ月、判決同斷、但し三年間刑の執行を猶豫すといふのであつた。公判廷には私も傍聽に行つたが言語同斷である。判事と檢事と寄つてたかつて被告を脅しつけるといふ有樣であつた。

問題の中心點は今西君の演說中の文句『大和魂云々』と『第二の騷擾事件云々』と『最後の手段云々』とにある。判事の訊問振も傍聽席に居る我々には誘導的としか受取れなかつた。追及又追及、結局陷落する外ないやうに追ひ込んで行く。私ならば……といくら嚙ぎしりしても傍聽人の悲しさにはどうにもならない。到頭罷工の煽動を認めざるを得ないやうな破目になつて仕まつた。判事のいふやう『其方は工友會の會長として相當の人格を備へながら、何故に會社に對して不穩の事を企てた、不都合とは思はんか』、檢事のいふやう『今西、其方は今少し人格の高い男と思つたら見損つたかな、何だ今日のその答辯の有樣は、今少し男らしく答へたらどうだ、其方等の間で最後の手段とか、一致協同でやれとかいふのは、同盟罷工の外にないぢやないか』といつた調子である。私は治

警第十七條の撤廢のためには如何なる犧牲も厭ふべきでないといふ感情を以て當日の判決を聽いたのである。今西君一旦は控訴した、併し執行猶豫ならばと遂に控訴を取下げ服罪することにした。

次ぎに解雇者の後始末である。爰に十二名後から十名合計廿二名、中一名は事情あつて拔けて二十一名である。私は兩三回會社を訪問して登坂作業部長、松村經理部長、野村庶務課長といふ人々に遇つて談じ込んだが、納簾に腕押し同樣で、殆んど何等の效果も見えない。業を煮やした私は最後に登坂氏に向つて「恥を知れ」と大聲叱呼し、床を蹴つて歸つた。談判は一時全く杜絶したのである。

然るに玆に一人秋保安治氏といふ人があつた。當時東京府立職工學校々長（現今教育博物館長）であつたが、私とは同鄕の誼あり、且つ早くより友愛會の趣旨に共鳴して評議員ともなつて居られた。その學校も亦屢々我等の集會に借用して居た。此秋保氏が又登坂氏と同樣藏前出身であつて然も登坂氏が先輩であつた。秋保氏は事柄が職工の問題で東京モスリンにも自校の卒業生が行つてゐる。人の關係に於ては先輩と同鄕人である。默つて觀ては居られないといふので、調停に立つた。かくて同氏の斡旋で登坂氏と私とは再度職工學校で會見した。だん〳〵話して見るとそこには大會社にあり勝ちな複雜な事情もあり、誤解もあつた。併し會社の體面上、馘首職工の復職の如きは思もよらず、又會社からとしては一錢も出す譯には行かない、但し青木專務の名に於て同情金を渡さうといふことになつて、秋保氏の立會の下に一封を受取つた。中には二百十圓入つて居た、要するに二十一名に對し各十圓づゝといふ振合になる譯である。所謂涙金といふやつである。私も一寸グッと來たが、深く爭ふも詮なきを知つて廿一名の諸君に計つた。諸君はいづれも疲弊の極點にあつた。たとへ十圓づゝでも少からず役立つといふので、結局一同立會の上、十圓づゝ配當して遂に事件は終焉を告げた。併しこれ等の諸君は勿論奮つて友愛會に入會し、幹部として活動した。幾許もなくして千數百名を擁する本所支部は、これ等の諸君の活躍の結果として誕生したのである。

五　排日問題と友愛會

斯る間に大正三年も明けて行つた。機關誌『友愛新報』は『勞働及産業』と改題し、會費も五錢より十錢へと値上された。一時會費値上の結果は會員の激減となり、二千より一千五百に下つた、頗る

憂慮すべき狀態となつたが『勞働及産業』發行の後形勢を挽回し、今度は逆に二千より三千と激增して行つた。かゝる折柄私の渡米問題が起つたのである。

事の起因は米國に於ける排日問題との引つかゝりである。その頃、頻りに米國殊に加州の排日問題は傳へられた。或は日本學童の排斥問題となり、或は在留邦人の迫害問題となつて現はれた。我國のショーウビニストの諸君など、早くも日米開戰論などを主張したものである。然るに茲にシドニー・ギューリックといふ博士がある。明治の初年に日本に渡來した組合派の宣教師であつたが、任期漸く終つて故國に歸つて行く途中、太平洋上の船中に於て天啓を感じたとのことである。曰く日米間の不和の根源を除き、その友好關係を恢復することは、爾の大なる使命であると。是に於て博士は奮起した。その紐育に歸着して米國基督教會聯合會の國際部長に就任するや、あらゆる工夫研究を凝らして日米の平和友好關係を促進することに努力された。博士はいろ〳〵その原因を探究された結果、その深因の米國勞働組合側にあることを發見し、加州に於ては加州勞働同盟會主事パウル・シャーレンベルグ氏、中央に於ては米國勞働同盟會長サミュエル・ゴムパース氏と接觸し、懇談を重ねた末、日本の勞働者の代表的人物を連れ來つて、米國勞働組合側と交遊せしむることの必ず多少の效果あるべきことを確信するに至つた。かくて博士は大正三年秋、當時のシカゴ大學總長マシウス博士と共に、基督教會聯合會の特使として日本に重ねて渡來せられたのである。かくて博士は其考ふる所を歸一協會の會合の席上に於て述べたのであつたが、博士の說に同感の意を表したのは、澁澤、阪谷、添田（壽一）の諸氏であつた。

これより先きギューリック博士は、一應自分の確信に基いて日本の友人に諮り度いといふ希望を有たれ、義弟のフキッシャー氏――當時日本學生基督教青年會同盟名譽主事――と協議の上、麴町區富士見町にあつたフキッシャー氏の自邸に安部磯雄氏、田川大吉郎氏、永井柳太郎氏及び私の四人を招かれて相談されたものである。當日安部氏は定刻通りに參着され、私の到着した時には既にギューリック博士（安部氏と同博士とは舊知の間柄である）とは既に協議を進められて居た。田川氏と永井氏とはたしか當日は見えなかつた。私はギ博士は同じ組合派の海老名師の教會に出席してゐた關係上知合ではあつたが親しい關係はなかつた。安部磯雄氏はギ博士の相談に對して、直に私を指名された。日本に現在勞働組合ともいふべきものは友愛會の外にない。鈴木さんはその代表者であるから適任といふべきであるとの話で、ギ博士に對して極力推薦されると同時に、私に對して

も決心を促された。私は夢にも考へないことであつたので、一寸面喰つたが、いづれ一度世界の勞働運動の樣子も見度いものだと念願して居た矢先であつたので、各方面の同意が得られゝば、あまりに大任で力の及ばざることを恐れるけれども、最善を盡して當つて見てもよいと答へた。ギ博士は此安部氏の推薦と私の決心とを聽いて右の歸一協會の會合に臨まれたのである。

眞先に贊意を表されたのは添田壽一博士であつた。添田博士は當時既に十分友愛會の趣旨を理解し、顧問にも就任され、友愛會の發展と充實との爲めに極力盡力されて居る最中なのであつた。間もなく私は添田氏の自邸に招かれて頻りに渡米を勸められた、日米關係のための努力もさることゝ乍ら、此絶好の機會を利用して、米國の社會と米國勞働組合の實情を研究して來いとのことである。私も渡りに舟であるからよろしく賴むと言つた。そこで添田氏は私を澁澤子(當時男爵)に紹介された。私が澁澤子爵と相知るに至つたのは、此時が全く初めてゝある。澁澤子には再三引見を受けた。人物試驗を受けたやうな點もあつたことゝ思ふ。かくて澁澤子もよからうといふことになつたが、難關は外務省の承諾如何である。

當時の外務省は所謂米國の排日運動の根源を勞働問題にありとは考へて居なかつた。一般的人種問題にありと觀て居たやうである。只下等な勞働者がガヤ〳〵騷ぐので五月蠅い位にしか考へて居なかつた。外務省の關係者中に、勞働運動の理想と目的とを正解するものがなかつたと言つてもよい位であつた。時の外務大臣は加藤高明氏であつたが、同氏を促すために澁澤氏も一度訪問され、添田壽一氏に至つては再三足を運ばれたのである。結局問題は阪田通商局長と當人の私との對談によつて決するといふことになつた。

大正四年の三月であつたと思ふ。豫め電話で打合せた上阪田局長を外務省に訪ねた。私は人口問題、移民問題から立論して、日米關係を一日も早く解決しなければ、日本將來の發展の上に多大の禍根を殘すべしと論じた。阪田氏の議論は小村壽太郎以來の傳統を踏襲するもので依然たる滿韓集中論であつた。米國などへ日本の移民を送つても何にもならないといふのであつた。二人は口角泡を飛ばして論じたので、時の移るを忘れて居た。時計を見ると午後の九時に垂んとしてゐる。凡そ五時過ぎより約三時間餘り議論をしたわけである。此爲め同氏は夕食を取り得なかつたので、時に君飯は濟んだかといふのである。私はまだゞといつたら、そんなら一緒にやらうといふので外務省で辨當を御馳走になつたのであつた。結局阪田氏の意見は、日米關係の解決のために外務省は決し

て君等のやうな勞働者の助力を仰がうとは思はない、併し聞けば君は中々熱心に勞働者の世話をして居るさうで、その點誠に奇特と思つて居る、よつて君の留學といつたやうな意味で、君の渡米を認めることにしやうといふのであつた。私は理由は何でもいゝ、いづれ解るときが來るであらう、兎も角早く旅券を下附して貰ひたいと言つて分れて來たのであつた。

統一基督教弘道會の方は、會長の安部氏が推薦をして居られるので問題はなかつた。ミッションのマコーレー博士は却つて非常に喜ばれて何くれとなく世話された。序でにボストンのユニテリアン協會の本部をも訪問することに話を決めたのである。費用は往復四千圓の豫定であつたが、これは一部は會員有志で寄附金を募つてくれた、澁澤子の餞別もあつた、友人知己の餞別もあつた。船の方はこれも澁澤氏の盡力で東洋汽船の地洋丸として、船賃は特別割引して貰ふことになつた。友愛會は正式に協議會を開き、友愛會代表として私と共に吉松貞彌君を送ることに決定した。吉松君は最も古い幹部の一人であつたのみならず、兼て渡米の志望を抱き、旅費の用意もしてあつたのである。かくて一切の準備が整ふと、友愛會は我等の會長を始めて海外に送るのであるといつて、大喜びを以て我々のための盛大な送別會を開いてくれた。

六月一日の夕である、友愛會主催の下に全國勞働者大會といふことにして、神田の青年會館に開いた、會衆滿堂の盛況であつた。澁澤男、添田壽一博士、內ケ崎作三郎教授、秋保職工學校長、武田芳三郎評議員、マコーレー博士等の送別演說あり、十時半散會したが、會員の歡喜は絕頂に達し、得意は無限ともいふべき有樣であつた。

かくて私は武田芳三郎評議員に留守會長の事を囑托し、吉松君と相携へて六月十九日橫濱埠頭を出發した。途中無事十七日の航海を終へて最初の「外國」たる米國の土を踏んだ。初めての「洋行」のことゝて種々の物語もあるが、直接の目的に關係なきことは凡て省略する。

加州には先きに歸朝されたギ博士も待つて居られた。桑港には舊知の安孫子日米新聞社長もあり又太平洋通信社を主宰して居た河上清氏も居られた。更に勞働運動の先覺としては、片山潛氏が居られた。片山氏は態々布哇の寄港地まで手紙を送られ、君が桑港に着いたら日本人勞働協會で歡迎會をやらうといふやうなことまで言つて寄越された。片山氏は此機會に於て私の補導役として、米國の勞働大會に出席の希望を有つて居られたやうである。然るに日本政府側の干涉のために結局此希望も水泡に歸したものゝ如くである、私が到着の折には態度全く豹變し、氏の舊友河上清氏の事

務所に於て偶然ギュリック博士に會見されたときの如きは、同博士を痛罵するといふ有樣であつた氏は日本政府の干渉的態度をギ博士の入れ智慧に依るものと解されて居たに相違ない。

加ふるに私の此度の使命を諒解してゐてくれた者は、加州に於ても全米の勞働團體に於ても、ほんの少數の最高幹部に過ぎず、多數は私に對して猜疑の眼を向けるといふ狀態であつた。チャップの奴め、何しに來たか、日本政府の間諜でないかといふ者さへ出て來た。ギ博士に對しても氣の毒な程漫罵(面と向つてゞはないが)を浴びせ、坊主の癖に生意氣な、勞働者の問題に餘計なおせつかいをしやがつてといつたやうな態姿であつた。私も年少にして初めて渡米し、艱難の途を歩んだわけである。

然るに茲に一人最も心強い味方は、加州勞働同盟會主事兼會計パウル・シャーレンベルグ君であつた。彼れは囂々たる周圍の反對には耳を藉さず、徹頭徹尾私の立場を支持してくれた。彼は曰く日本勞働者移入反對の我等の舊來の態度は態度である、併し夫れがために日本勞働代表の來朝に反對すべき理由がどこにあるか、日本は勞働運動に於ては後進國である、後進者に對しては出來る丈け親切に我等の事情を知らせ、これを誘掖することが先輩の義務ではないか、且つ又此機會に於て彼をして、我等が何故に日本の勞働者を排斥するかの理由を正しく理解せしむることが、我等の立場よりしても便宜であり利益ではないかと。

斯く彼れは勇敢に私を支持し、加州同盟の大會にも、全米同盟の大會にも、共に日本の友誼代表として出席出來るやう斡旋した。我々は茲に固い友誼を締結することになつた。私は獨り彼れ個人と親友關係に入つたのみならず、彼れの全家族と最も親しい友情を結んだ。爾來十有六年、私も前後六回米國に渡つたが、いづれの時も彼れを訪問するを忘れない。彼れも千九百二十九年秋、京都市に於て第二回汎太平洋會議開催の折、米國代表團の一行に加はり、全家を擧げて來朝した。私は彼等を横濱港外に迎へて、又これを横濱港外に見送るまで、先づ以て親切の限りを盡して歡待した。翌千九百三十年秋、第十四回國際勞働會議の歸途、米國を訪問した際は彼れは前年の私の歡迎に答ふる歡待をしてくれたのである。

私は此シャーレンベルグ君を力にして加州勞働同盟の大會にも米國勞働同盟の大會にも出席した幹部會に於て議論は沸騰したさうだが、幸に私並に吉松君の信任狀は受理された。友誼的代表、(Fraternal Delegate)といふのである。

加州の大會は九月サンタ・ローザで、全米の大會は十月桑港で開かれた。サンタ・ローザは葡萄の實るところ、我が長澤鼎氏が葡萄酒醸造工場を經營するところである。我々代議員一同は大會中同氏の招待で、同工場を視察した。同邦人としての私が同氏に初めて會つたのも此時である。

十月全米勞働大會の開かれた時は、桑港に巴奈馬太平洋博覽會が開會中であつた。何千萬弗とかの豫算なさうで、とても素晴らしい仕掛であつた。大會第一日開會式は同會場内で行ひ、構内の大建築を背景にして一同記念の撮影も行つた。構内に日本館あり、金閣寺風の建物で、その中で屠々茶の湯、活花などをやつて、大に日本文化の紹介に努めたものであるが、私も大會中度々交る〳〵多數の代議員を案内して日本を語つたものである。

加州、全米の兩大會を通じて、私は可なり歡迎を受けた。最初の間はよその貰ひ子でも見るやうな調子で私共の樣子を眺めて居たが、一度私が大會で演説をやつた後は、意外な面持で好意と同情とを持つて接近して來た。最初日本の勞働代表なんて、餘程下等な奴だらう位に思つて居たらしい、英語演説なんか出來るものかと輕蔑し切つて居たやうである。事實その頃の在米日本勞働者は彼等の輕侮嘲笑の的となつて居た。ところが案外やるな、日本の勞働者も馬鹿にはならんぞといつたやうな感じを與へた樣子である。

勿論私は當時英語に自信はなかつた。日本で教育を受けた者の大多數がさうであるやうに、私も讀むことは教はつたが、話すことは習はなかつた。讀むこと〻話すことは大變な違ひである。多少の僥倖ともいふべきは、新聞記者時代、私は時々外人訪問をやらされた、その必要上一週二三度社に見える會話の先生に手ほどきをやつて貰つた。ユニテリアンの幹事になつた後も、毎日職責上、宣教師のマコーレー博士と話をせなければならぬ、これ等が兎に角多少の役に立つて、外人だからといつて別に臆せない丈けの精神的準備は出來てゐた。その上桑港のプレチン紙の勞働記者イーリー氏と懇意になり、そのお世話で桑港美以教會牧師ヂャックソン氏の家に二ケ月許り厄介になり、共にマスターであつた牧師夫妻から毎朝食後一時間レッスンを取つた、會話中度々アクセントを直して貰つた、英語演説の草稿なども一々丁寧に直して貰つたりした。これ等がいくらか物を言ふことになつて、ブロークンではありながら、彼等と應酬して餘りひけ目を感じなかつた。加州の大會ではチャールス・チャイルドといふ桑港洗濯勞働組合の組合長が、猛烈に私の大會出席に反對した後で、――チャイルドといふ男はスコットランド人なさうだが、その名の通り珍らしい小男で、

私よりも遙かに身長も低かつた――同君をつかまへ、親愛を示す風をして同君の肩を三回強打して同君を驚かしたことがあつた。

全米大會の折には私は演說して次のやうに言つた――。

今日日本の勞働組合員は僅かに六千人しかない。これを諸君の二百數十萬の團體に比して問題にならないことは明瞭である。併し乍ら諸君の運動が四十年の歷史を有するに反して日本の勞働運動は僅かに四年にしかならない。若し日本勞働組合の會長の頭が米國勞働同盟の會長の頭のやうに白くなるときが來るならば、日本の勞働組合はその組合員數の點に於ても、恐らくは諸君の下風につくものではあるまい。

彼等は大に喝采した。ヅケ〳〵小氣味のよいことをいふ奴だといふ風に感じたらしい。更に此大會中のことである。前記大博覽會の日本部の出品中に、「ストライキ」と題する彫刻があつた。全體の構圖をいふと、一人の筋骨稜々たる勞働者が半裸體のまゝ、ガッシリと兩腕を組み何事か深く考ふる面持で突立つてゐる。その左の腕には片方に乳兒を抱えた女房が饑餓と憂愁に精も根も疲れ切つたやうにして倚りかゝつてゐる。その脚下のところには、五つか六つ位の頑是ない女兒が、何物か訴ふるものゝ如く、右指を啣へたまゝ兩親を見上げて居るといふ光景である。この彫刻が餘程大會出席代議員連の心を動かしたものであらう、寄ると觸ると噂さの種になつた。到頭シヤトル勞働組合聯合會の教育部長カンニング君が、私に勸めて、「一つこれを寫眞版に刷つて一同に配つたらどうか、その方が生中言葉を以てするよりも宣傳が效果があるぜ」といふ。私も成程と思つて早速五百枚の印刷を注文して一同に配布すると共に別に一尺五寸に二尺五寸の特大のものをセピヤ寫眞に撮り、枠に納めて、會長ゴムパース氏に贈ることにした。此時大會に於て贈呈演說を試みた。

演壇の上にゴムパース氏と相對して立ち私は日本勞働者の刻苦奮鬪を述べて此彫刻の意味を說明し「日本の勞働者も諸君と同樣なアスピレーションを有つて居る、何物が此勞働者の一家を饑餓に陷れたか、いふまでもなく近世の怪物資本主義である、我等は此怪物を退治し盡さずんば、眞に人類の福祉を恢復することが出來ない、我等は人種、言語、宗教、國境を超越して、此共同の敵に向つて戰はざるべからず」と、ゴムパース氏も亦感激に滿ちて「我等は共同の目的を有し、又共同の敵を有す」といつて、ガッチリ私の手を握つた。私も力强くこれを握り返した。滿場嵐の如き喝采が起つたのであつた。

私はこれから米國勞働組合の巡禮に出かけた。加州勞働同盟をはじめとして、桑港勞働組合聯合會、洗濯勞働組合、海員組合、音樂家俳優組合、荷馬車引組合、印刷工組合等より始めてワシントン府に於ける米國勞働同盟會の本部まで訪ねて行つた。ボイコット戰最中の樣子も見た、紐育に於ては裁縫工組合のストライキの有樣も見た。シカゴに於てはハル・ハウスも訪ねた。I・W・Wの事務所へも行つて見た。ボストン、シヤトル、ロスアンゼルス等到るところを視察し廻つた。田舍侍がはじめて江戸上りをしたのもこんな風であらうかと思はれた。見るもの聞くもの驚異の種ならざるはなかつた。私は井戸の中より飛び出して、はじめて世界的勞働運動の大潮流に打突かつたのである。從つて私が歸朝に際して、携へたる土産も亦決して少くはなかつたのである。

土産といふのは他でもない、即ち將來の日本の勞働運動に對する參考品の數々である。例へば各種勞働組合、地方聯合會、地方同盟會、全國同盟會等の規約、綱領、前文、歷史の如き、組合經營又は關係の教育事業、調査事業、協同組合、勞働銀行等の報告書の如き、組合機關紙、宣傳用リーフレット、トラクト、パンフレットの如き、ストライキや、ボイコットの奮鬪の記錄の如き、組合運動と政治運動の交渉の記錄の如き、皆一々最も有用なる參考資料ならぬはない。殊に私に取つて珍らしく感ぜられたのは、ギヤベル、ユニオン・レベル、パッチ等である。ギヤベルは凡そ組合の集會に於て、委員會に於ても、小協議會に於ても、大集會に於ても、必ず議長の持つところの小槌であつて、これを以て或は混雜を整理し、或は議事の決裁をして行くに最も便利有效なものと考へた。日本流にたゞ言葉や掛聲などを以てするよりも遙かに效果があると考へたので、早速之を輸入して、我が友愛會の諸集會に利用することゝなつた。今日、各勞働組合や無產黨の集會に、大抵此式が採用せられて居るが、もとは米國より輸入せられたものである。

ユニオン・レベル（組合證票）の組織も、成程うまい仕組だと感に入つたのであつた。凡そ勞働組合を承認し、これと團結契約を締結してゐる工業の製品には、組合で制定したるマーク（一種の商標の如きもの）を附着せしめ、勞働組合員たるものは、普ねくこれを常用するの義務あるものとする。その組合員といふのは、全國的の同盟に加盟してゐる全組合員並にその家族の意味であつて、例へば米國の如きは、同盟會がその組合員の總數を三百萬と見れば、その影響はその家族並に知友の間に及ぶから、その範圍は千萬又は數千萬に達するであらう。從つて此制度が完全に行はれるときは、その勢力は誠に恐るべきものである。組合の大會等のある場合には、その入口のところに組

合證票勵行委員が頑張つて居て、苟くも代議員にして、組合證票附着のもの五種以上を着用しないものは入場を許さないといつたやうな方法を行つてゐる。今日米國に於て組合證票の種類は五十種を越えるであらう、それが一覽表のやうに一枚のポスターに色刷で印刷して、總同盟の本部から全國の各組合に配布される、各組合はこれをこの事務所に掲げて、普ねく組合員に知らす組織を取つてゐる。私も最初此制度を見た時、洋服、帽子、シヤツ、靴、靴下、名刺（印刷工組合）、その他數種のユニオン・レベル入のものを買ひ込んで來た。遺憾ながら日本のやうに組合勢力の微弱なところでは實行が出來ない。

バッヂは徽章である。組合に一定樣式の徽章を制定し平時に於て之を佩用するものもあるが、それよりも組合大會等に於ては、必ず相當の金をかけて可なり綺麗なものを作る、一見勳章と見違ふやうなものもある。大會で使用の後はこれを時計のラケットに用ふるとか、若くは長くこれを保存して、自分は何回大會に出席したといつて、誇としてゐる。此意味に於て一種の從軍徽章のやうなものである。私はこれは面白いと考へた。そこで歸朝の後早速、友愛會の大會に於てやつて見た。果せる哉好評嘖々であつた。今日各無產黨や勞働組合の大會に、代議員章の用ひられるやうになつたが、これも元來米國輸入であると云つてよからうと思ふ。

以上述べたるが如く、私は千九百十五年第一回の渡米によつて得るところが實に多かつた。私が得るところ多かつたといふことは、それ丈け友愛會の發達のために裨益するところ多かつた譯である。かくて友愛會はあまり世間の眼に立たぬ間に、着々として勞働組合らしき方面に於て生長して行つたのである。

私は一旦翌年一月に歸朝し更に其年（大正五年）九月四日重ねて渡米した。これは前年度の成績に鑑み、日米國交の親善を增進する意味に於て必要であるといふことになつたからである。其年の勞働大會は加州はユレカにて、全米はバルチモア（メリーランド州）に於て開かれた。いづれも盛會で私も益するところ更に多かつた。私は翌六年一月廿三日を以て歸朝したが、更に大正七年十二月には巴里平和會議に赴かんため米國を經由し、歸路も亦米國に取つた。爾後千九百二十四年、三十年にも國際勞働會議の歸途米國を經由し、米國の勞働運動には馴染深く、知人も亦多い。從つて少くとも友愛會發達の初期に於ては、米國勞働運動の影響は少くはないのである。併し近年、殊にサン

ヂカリズムや共產主義運動の刺戟猛烈となつて以來、勞働運動の立場に於て米國より受くる影響は殆んど皆無といつて差支へない。畢竟、勞働運動が理論鬪爭を重んじ、思想運動的色彩濃厚となつて以來、米國の如き固より顧みるに足らずとする風頗る盛んになつて來たのである。

六　當時の勞働事情

今から約二十年前もの勞働狀態は實に慘澹たるものであつた。その收入は固より其支出を補ふに足らず、其住宅と衣服と食物とは家族の健康を保全するに足らず、子女の敎育の如きは殆んど顧みるに遑なかつた。私は今本書の『創立時代』を終らんとするに臨み、少しく當時の勞働事情を述べて見たい。

『友愛新報』から『勞働及產業』へと改題し、新聞型より雜誌型へと發展した、其『勞働及產業』の第一號（大正三年十一月發行）を見ると、開卷第一に私の名で『勞働者に代りて天下に訴ふ』といふ論文が載つて居るが、其冒頭の一節に曰ふ。

今日勞働者として最も苦痛に堪えざるは、其生計の困難にして且つ不安なることである。先年內務省に於て細民調査をされた折、同時に職工家庭の調査をもされたのであるが、其調査に依れば、其戶數は三百三十四に及んでゐる。勿論同一の職業についてゞはなく、職業の種類は數十種に亘つてゐるが、其三百四十四の世帶中で、戶主の收入一ケ月五十圓以上の者が僅かに一名に過ぎずして、二十圓乃至二十五圓の月收のものが最大多數を占め百〇六に達して居るのである。二十圓乃至二十五圓といへば、平均一日七八十錢の收入がある譯で、日本の今日の生活狀態としては或は必ずしも悲觀するに足らぬと思ふ人もあらうが、此調査の仕方は少々樂過ぎた觀察をして居るので、吾人の觀るところでは、先づ二十圓前後の收入の者が多數と思はれる。中には六十圓七十圓と取る人もあるが、夫れ等は寧ろ例外で、二十圓前後が最も多いのである。而して此收入を以て大抵三人五人の家族を養うて行かねばならぬ（內務省の調査では平均三人半）。勿論家族には內職といふものがあるけれども、其收入は極めて少く、又子供とか同居人とかの關係で、內職をやれない家も多いのであつて、要するに主たる收入は戶主の勞働に俟たねばならぬのである。云々。

此書出しの下に、子女教育の不可能の狀態を論じ、その社會的地位の劣等なることの不當なることを述べ、勞働者の自覺の必然性を說き、解決策として、勞働立法の促進、勞働保險の實施、勞働組合の組織の三を擧げてゐる。結論の當否は別として、當時の勞働者の生活は實にひどいものであつた。勞働者と貧民とは同意語に通用した。而して貧すれば鈍するの譬に漏れずして、教育の機會は望んで得られない。要するに、走屍行肉、生ける器械として孜々營々、資本家の繁榮のために奉仕するの外はなかつた。たとへそれが私でないにせよ、苟くも正義觀ある者、座して此暴狀を無視することは出來なかつたであらう。今私は左に今日の勞働事情と對比研究のよすがとして『友愛新報』を探つて二つの記事を得た。一は今尙新聞記者として大阪に在住するの人の筆、一は純勞働者にして努力の結果、多少文筆の才を發揮することの出來るやうになつた人の筆、共に僞らざる事實の告白である。

紡績會社で夜業をした私の經驗

北浦夕村

（一）

『友愛新報』第二十二號第一面首欄に掲げられた『夜業禁止の問題』を讀んで、私は端なく、大阪時事新報に居つた二十二歲の冬、大阪合同紡績會社天滿支店へ田舍青年に假裝し、紡績職工として入込んだ當時に經驗した『夜業』の害毒に就て、少しく本紙上の餘白を借りたいと思ふ。

その天滿紡績は、當時一日平均五萬二千斤の石炭を吞んで四六時中、絕えず魔の呼吸のやうな黑煙を吐き出してゐる、高さ百六十尺の煙突の中心として、北區天神橋筋東一丁目に一萬一千三百四十一坪と云ふ大地域を別世界とし、平家建二千三百七十五坪の第一工場と、二階建一千四百九十坪の第二工場とを有する大工場で、千三百餘名（內寄宿八百餘）の女工と三百餘名の男工とを使役してゐた。田舍の基督教の夜學校に學んでゐた二十二歲の私が、都會の新聞記者となつて、第一に注目したのは、此の紡績會社へ職工として入込み、悲慘なる勞働者の狀況を見やうと云ふのであつた。

（二）

私は、十二月の下旬と云ふ寒空に、破れ布子一貫のみすぼらしい姿で、夕ぐれの工場町を紡績會社に急いだ。而して、門番の老爺に對して、使つて呉れるか何うかと問ふた。と門番は突慳貪に『今晩は分らんから明日來い、泊る處がないなら林と云ふ下宿へ行け』と怒鳴つた。

門番に敎へられた『林』と云ふ紡績男工の下宿へ行つた私は、一日二十錢の下宿代五日分を前納することが出來ないと云ふので、忽ちたゞ一枚の布子を剝がれた。私はシャツとズボン下の寒い姿で、バラ〳〵の南京米と煎餅蒲團に、漸く寒さを凌ぎつゝ、第一工場の總務に『木管曳』と云ふ勞役に服した。

千六百餘の男女の職工を、その會社では甲乙の二組に分つてゐた。これは、半數づゝ晝夜交代に勤勞せしむる必要からであつた。私は最初の一週間は晝間の部であつたが、軈て私共の甲組が夜勤に廻る週間が來た。

（三）

職工の天地は一週間毎に晝と夜とが轉倒するのである。自分は日曜の晝を夜にして、例の蛋と半風子に攻められながら、下宿の煎餅蒲團に宵越の夢を貪り、暮の六時前から會社へ行つた。

夜業も宵の口はまだよいが、工場の夜がだん〳〵と更けるとなか〳〵辛い。十二時になると夜食を食ふことになる。重い工場のドアを開けて、突と屋外に出ると、夜陰の寒風が身に泌み入る。休憩室には少しの火もなく、たゞ此處彼處に卷線香の火が佗しう燻つてゐるばかり、四壁の寒氣は、人の暖い肉を待構へたかのやうに、忽ち犇々と骨まで透る。然も支那米の冷飯を喰ふ職工の群は、皆がた〳〵と顫へてゐた。

多くの工場は、何處までも、人を機械の如く休憩なしに運轉させるやうに、設備が整つてゐる。十二時の休憩時間は三十分といふ定めであつたが、その寒い室には、何うしても十分間も辛抱することが出來ない。

慄え上る寒さに、憐れな職工は、辨當を濟せば先を爭ふて工場へ入る。機械の熱と人いきれの爲に蒸暑い工場の中の濁れた空氣も、骨に喰入る寒さよりは遙かに優つてゐた。

夜が更けるに從つて、睡魔と疲勞とが男女の職工の血のうすい身體に迫つて來る。

（四）

工場の夜は早や一時を過ぎた。

世間の人は皆暖い臥床に樂しい夢を結んで居る時ではないか。黑く垂るゝ夜の帳は、人の子に眠れ憩えと訓ふる大自然の意思ではないか。然れども紡績職工は、此の偉大なる天地の法則を破つて、轟々と運轉する機械に使役せられて居る。

『紡績職工は人ではない、一種の機械である』、と私は思はざるを得なかつた。成程彼等は、夜の代りに晝眠る。然しながら彼等は猶且人の子である。天地の法則を全く破ることは出來ぬ。晝間十時間の睡眠は、夜間の五六時間の睡眠ほども、人の身神に休息を與へない。二時、三時、夜が刻々に更けて、四時も過ぎ五時も近くなると、淋しい勞役に疲れた工女は、綿埃に塗れて、工場の隅、機械の前に頽然と假睡するのであつた。然し可憐なる彼等は此の假寢の暫しの間も、心をゆるめる譯には行かぬ。工務係の靴音に儚い夢を破られるのである。

私の殊に憐れに堪えられなかつたのは、十一二歳から十三四歳位までの男女の幼年工が、工務係にみつけられないやうにと、爭つて綿屑箱に隱れ、頭からすつぽりと綿屑を被つて、他愛もなく眠るのを見た時であつた。富める人の子の、間食代にも價せぬ僅かの金の爲に、斯かる幼年工は、血を吸はれ肉を削がれて居るのであつた。

私は、そのころ、喧しかつた操業短縮問題が、經濟問題としてよりも、寧ろ人道問題として速に成立せんことを希望するの情に堪えなかつた。

偖て工場の夜が、白々と光線取りの窓から明けると實勤工が入場して來る。夜勤工は最う頽然と慾も得もなく、殆ど喪心したかのやうに、工場を出て、漸く蘇つた如き心地になる。

通勤工は、一日の勞銀を記しつけられた、通帳を貰つて下宿なり、銘々の家なりに歸り、寄宿工女は寄宿に歸る。そして朝飯を喰つて、何れも夕方まで眠りつゞけるのである。

（五）

紡績職工の天地は、斯くて一週間毎に、晝と夜とが轉倒する。私は前後二週間ばかりの間、斯うして紡績會社で働いてゐたが、痛切に夜業の惡いことを知つた。

夜業は、勞働者の身體、精神を疲勞させることが實に夥しい。啻に、勞働者の身神を過度に疲勞させるばかりでなく、資本主の爲から云つても、決して絶體の利益ではない。晝間の勞働よりも、確に製品が粗惡に流れて、殊に十二時から先は、實際身を入れて仕事をするものが餘りないやうであつた。三時四時になると、無意識に手を動かして居るものが多いやうである。如何に晝間に於て睡眠時間を與へられたからと云つて、決してそれだけの活動力を、彼等に與へる事は出來ないのである。

私は工場に於ける夜業には、反對を唱へたい。殊に幼年工に、夜業を強いることは絶對に禁止し

たいものである。（大三年正三月十五日、友愛新報掲載）

以上は主として夜業の弊害を說いて居る。夜業は漸く禁止せられた。併し愈々禁止になるまで『夜業』は果して幾十萬の人の子の靈と肉とを蝕んだであらう。

次ぎには勞働生活の體驗を掲げやう。

職工生活二十年の告白

（一）

唖涙生

私は十三の歳から此歳まで、丁度二十年間と云ふものは、工場より工場と飛んで歩いたもので、股に掛けた工場の數は五十七ケ所、酢いも甘いも嚙み分けた、二十年間の工場生活の概略を搔摘むでお話しいたしませう。

私の生れは芝で、品海の入江潮さす處で育つたのでありますが、丁度私が十三の春、或る工場に弟子として年期奉公に住込んだので御座います、ところが親方と云ふのは、それは〳〵隨分殘酷な人で漸く十二か三の年齒もゆかぬ子供に、冬は寒い〳〵凍り付く樣な霜の朝、風呂場の水の入れ替や、それから臺所の拭き掃除に休む間なしに、追ひ使はれたのであります。見るも傷々しいひどの破れ目から黑く血潮がにじんで居る、夫にも拘はらず親方は素足のまゝで足袋も穿かせなかつたのでありました。それから夏は石も鎔ける樣な炎天の晝日中、跣足のまゝで重い荷車を曳かせられ、度々眼が廻つて倒れさうになることもありました。それもよしとして雜役にばかり追ひ使つて一向仕事を敎へてくれませんので、一二年の後、私の親は遂ひに此の工場を退かせて了つたのであります。

夫れから私の十六の秋に、或る人の緣故で築地の海軍工廠に、旋盤の職工として入つたのであります。ところが前にも述べた樣な仕儀で、約三年半と云ふものは飯焚きに車力、風呂の掃除、小供の守をさせられた丈けで、親方よりはロクな仕事も仕込まれなかつたのですから、腕も藝能も無かつたのですが、ノメ〳〵と旋盤師で候と押强くも入廠したのです。今から當時の事を想へば冷汗が流れる位であります。それにも拘らず私はテンから日給三十錢を給せられる事になつたのですが、當時少年職工の日給は、大抵二十五六錢から七八錢が止りであつた、是れも畢竟ヒキが良かつたお

蔭であつたのです。

腕も藝もない私が、日給三十錢を貰つて居るといふ爲めに同僚からは蛾まれ迫害されて二六時中情ない、つらい悲しい想ひに心で泣いて、味氣ない其日其日を過して居つたのでありました、アヽこんな事なら一層の事日給を下げて貰つて、此の壓迫から寸時も早く逃れたいと思つたが、それも今更出來なかつた。

生來私は餘り學問が好きではなかつたので、數學とか英語とかいふものに力を入れなかつたのです。其間で今工廠に來てつく〳〵學問の必要な事を身にしみて感じたのである、學問と云へば少し語弊がある樣に聞えるが、こゝでは技術上の事でつまり齒車の掛け合せを知らぬ爲めに、何れだけ自分は泣かされたか知れません、そこで私も一生懸命、毎日自分の仕事の間隙を偷んでは、他人のやつて居る齒車の掛け合せを見取り、それを晝飯の後で、他人が一服やつて居る間に、他人に見られぬ樣、先きに見取りの覺えをば、金釘流で自分の手帳に控へ置き〳〵致しました。

斯う云ふ工合で腕の鈍い自分は、同僚よりは壓迫さるゝし、そうかと云つて止めるわけにも行かぬので、泣く〳〵苦心慘憺遣瀨なき月日を一年半といふものを此處で過して仕舞つたのであります。

或日の事でありました、丁度オクリ螺釘のピッチを間違へて、仕事をば遣り害ひ、晝休みの時、衆て憎まれて居た同僚の爲めに多人數集合して居る滿座の席で、散々赤耻をかゝせられて丸で顏から火の出るやう、穴あらば入りたいと思ひました。アヽ何といふ情ない事であるかと物蔭にかくれて、無念の涙にかき暮れたのであつた。えゝまゝよ自分は今日限りこゝを止めるのみと決心して泣き乍ら、此事を事務所に申出でました。其時見るに見かねて、自分を親切に助けて呉れた一人の老職工があつた。未だ年齒も行かぬに可哀さうだと云ふので、小石川の砲兵工廠に世話をして呉れたのであります。盲龜に浮木、地獄で佛、渡る世間に鬼はないとしみ〳〵有難いと感じました。

斯くて一週間といふものは、試驗といふので毎日々々砲兵工廠に通つたが、幸に試驗は合格したそして直ちに日給四十二錢と云ふ事に決つたのである。此時位自分は嬉しかつた事はない、恰も鬼の首でも打ち取つた樣な氣持ちになつて、ムラ〳〵と高慢の心が萌し。『俺れは四十二錢位の腕がある、あんな所に何時までも燻ぶつて居る樣なお兄さんぢやあねえんだ』、とをぞくも獨天狗に成り濟し、元の築地の仲間を見返してやらうと云ふ氣が一ぱいであつた。

此當時自分は三田に住まつて居りましたが、こゝから砲兵工廠に通ふには二里近い里程、雨の日

も風の日も通ふ事になつたが、夫れが爲め一方私の家では、自分を工場へ出勤させる爲めに、毎朝三時には起きて、御飯の仕度をせねばならぬと云ふ騒ぎで到頭家の中に苦情が起り、此處も止める樣になつて了まつた。

斯う云ふ理由で工廠を退いて仕舞つたが、遊んで居る譯にもゆかず、仕方なく本芝の山越といふ鐵工場に入る事になつたが、其時には日給がやつと二十八錢、榮枯盛衰泡沫夢幻、驕る平家は久しからず、それもこれも皆身から出た錆とは云へ、思へば自分ながら殘念千萬の極、不覺の涙に咽んだのであつた。

墮落の第一歩

前回にも申述べました樣な次第で山越工場に入つた私は、是非とも名譽の恢復をせねばならぬと決心をしましたのも眞の束の間でありました、工場内には惡風潮の流れが滔々たる有樣で、其當時職工長の御機嫌を取らねば、陰に陽に職務上から壓迫され、從つて安い仕事をさせられると云ふ有樣であります。（職工長の名は玆には暫らく預り置く）。斯樣なわけで素行修らぬ職工長は部下を強いては、花柳の巷に耽溺し、又は唆かしては飲むといふ有樣でありました。

夫れで此工場は總て請負仕事で、工長の機嫌を取つて居る者は、大抵六十錢乃至七十錢位は、貰ふ事が出來たのであります。私は斯る有樣でありますから、承知しつゝ墮落の淵に第一歩を踏入れて仕舞つたのでありました。

溫き情け

偖如斯工場が腐敗して居る一方に、私は今に欽慕、忘るゝ事の出來ぬ人がありました。夫れは工場管理人である山岡と云ふ人でありました。

常に溫情篤實を以て接し其部下を恤勞り、夏の盛りにはさぞ熱からんと氷水など飲ませ、夜業の折には空腹であらうと「そば」など馳走され、二六時中同情の眼を以て其の職工を取扱つて呉れたのである。そして常に其の部下に、全力を盡して其の全力の報酬を取れと云ふ主義を皷吹されたのでありました。家族團樂全力主義とでもいふのでありませう、兎も角も非常に親切な人でありました。

或時私は酒氣を帶びて、仕事をして居りましたが、恰度そこへ山岡工場管理人が廻つて來られ、そして物柔らかく意見をされたので、固より本心でやつたのでは無く、四圍の情況に迫られて、遂ひ自墮落に身を持ち崩した私は、翻然として、永い惡夢から眼覺めた樣な感じがしまして、本心に立

ち遷りました。斯様な譯で此工場も退いてしまつて林と云ふ工場へ轉勤するやうになりました。

親心ある工場主

私が此の工場に入りまして、早々嬉しく感じました事は、上は工場主から下は職工の末に至るまで、皆親切に扱つて呉れる事でありました。

血あり涙ある此親心ある工場主の爲めには、永く勤勉の誠を盡さうと決心致しました。處が此所に不圖も不幸な事が持ち上りました、と云ふのは一般經濟界の不振の結果、不幸此の工場も其の渦中に捲き込まれ、經營慘憺たるものがありました。毎日毎日〳〵辨當を持つては工場に出掛け、差當り爲す仕事もないまゝに、工場内で唯ぶら〳〵として、居つたのでありましたが、情け深い工場主は良い口が見付かる迄、こゝに居よとの事でありましたが、ペン〳〵爲す仕事もなくて唯遊んで居ると云ふ事は、如何にも主人に對して氣の毒でならぬのでありました。斯う云ふ仕儀でありますからこゝに勤めて居乍ら或ひは三日或ひは二日と、外の工場へ出掛けて良い口を探しましたが、それと思はしい口も無かつたのであります、斯る有様で、とう〳〵四ケ月目に此工場を退いて仕舞つたのであります。

（因に此林工場はカラン絹絲機械製造工場であります。）

煙突より煙突

以上のやうな仕儀で林工場を退いた私は、毎日〳〵家から辨當を持つては、工場より工場と口を尋ねに芝區内の工場は、大抵探し廻つたのでありますが、面白い口も無かつたのであります、仕方泣く〳〵私は疲勞れた足を、塵や埃に塗れながら、氣力も失せて月島一圓から佃島、深川、本所と煙突を頼りに煙突より煙突と、目的どもなく歩いたのでありました。或る日の事例の煙突を頼つて或る工場に飛び込んでとんだ失策をして仕舞つた。

暗涙生『私は旋盤師でありますが、當工場で使つては、呉れませんか』とやつた處が、門衛『ハーア』と云つた様な挨拶で、旋盤とは何んなものか、一體あなたは何所であるかとの事で、自分は芝に居住して居る者で、旋盤とは鐵を削る職であるが、仕事がなくて困つて居る事情を訴へたので、門衛も夫れは氣の毒である、それならばガラス瓶でも吹いたら何うだとの事に私は職違ひの工場であるのに氣付き二度愕然、顏を赤くして早々此處を飛び出して仕舞つた。

月日の經つのは早いもので、斯う云ふ具合で丸三ヶ月たつて了つた、四ヶ月目に或る人の世話で吉村工場に入る事になりました。三日間は試驗と云ふので、尤も私は最初から電氣の方は經驗が少しもないので、試驗當日の第一日から他の職人が四時間位の仕事を、八時間もかゝつて結局の果が試驗品をもろにオシャカにして仕舞つたので、しまつたとは思つたが、手間も決らぬのに止すのも殘念であると、三日間辛抱して居りましたが、結局二十六錢の常傭給と、宣告が下つたのでありました。とてもこんな風では請負はさせられぬとの事でありました。之れと前後して、赤羽根の海軍工廠から呼出しがありました、と云ふのは以前に人を以て賴んで置いたのでありましたが、之れ幸ひと海軍工廠に出掛る氣になりました。恰度兩天秤に引掛けて置いたのでありました。

海軍工廠内の一年有半

前申した通り兩天秤の片方の吉村工場ではマンマと試驗に失敗して、日給二十六錢と相場が定つて頗る悲觀をして居る所へ、今一方の海軍工廠から呼出が來た。早速出かけて行つて見ると、今日から一週間は試驗、試驗中は一日雇當料として金二十五錢を給すと云ふのです。此度の試驗には首尾よく及第して、手間は四十八錢に決つた。吉村とは實に二十二錢の相違であるが、これはやうやく十九の私としては、甚だ割がよいので、それには組長の信用があつたからです。一年半ばかりは何のお話も御座いません至極平穩無事泰平で、たゞ一生懸命に働いたといふ丈けであります。一年半經ちますとやがて、組長から定期職工にならぬかとの交渉を受けた。定期職工とは十年間勤續の約束で、無事に勤め上げれば三百圓乃至四百圓位の下賜金がある外に十年間に百二十日丈けは、定休日の外に休める特權があるのです。けれども私は其頃年は若いし元氣は旺盛で、何のこんな所で老い朽つべきと云ふ氣があつたので、此交渉を素氣なく斷つた。するとこれよりして組長の態度はガラリと變つて今まで目をかけて呉れたものが、丸で冷淡になつたので、私もつひ面白くなく、一層飛び出さうと思ひ始めた。

コムミツションは河童の庇

これから私は傳手を求めて、城北の某大工場に入職致しましたが、其の前に一つ工廠内の情弊を素破拔いて見ませう。工廠内に於ては、賄路は全く公行です。組長とか工手にでもならうものならコムミツションは一つの役得と心得て居る。職工が新しく入廠する時もコムミツション、昇級にもコムミツション、一から十までコムミツションで事が定るので、本人の技倆性行などは、殆んど之を

顧みないのです。ですから昇給間際や盆暮などには上役の人達への遣ひ物は大變なもので、ビール何十ダース、鰹節や呉服切手が何百圓、中には現金で贈るものもある。さうすると一家の内では使ひ切れぬので夫れを割引して商人に拂ひ下げると云ふ有様で、本人は普通の事のやうに思つて別に良心の苛責も受けぬそうです。これですもの、今度の事件の如きは、それこそ河童の屁であるのです。

恥かし乍ら奇策を廻らす

これよりして城北の某大工場に入つたのですが、實は以前吉村工場に入る前に福永工場に居つたことがあります。こゝでは丁度三十七年の二月で、日露戰爭が始まつたので、いづれの鐵工場も大多忙でありました。福永工場でも水雷發射管の注文を受け、夜を日に繼いで仕事を急いだのですが、十五日の半勘定に賃銀を一文も呉れません、今日だ明日だと言つて一日延しにして呉れさうもないので到頭十九日にポイと出て仕舞つたのです、酷い工場主もあつたものぢやありませんか。

さて其某工場に入つた後は、矢張りこゝでも技師組長等に引立てられ二月から六月まで働いて居ました。スルト前に述べた林工場から、主任にして日給一圓二十錢を出すからと云つて迎ひに來ました。私は其時八十八錢を貰つて居たが、餘程の違ひですから二つ返事で承知をし、いよ〳〵此工場を辭職をすることになつたが、兼ね〳〵引立てられて居るので、これといふ口實がない。そこで惡いことだが、こゝに一種の奇計を案じました。

突如として出征の召集令

それは私も其時二十一歳でしたから、兼ねて徵兵檢査に合格した所、此度突然赤紙を付けられたといふのです。此旨を恐る〳〵技師の方に申しますと、『ウムさうか』と言つて暫く私の顏を見て居られたが『暫く待て』と言つて隣室に退き、やがて出て來られた時には、奉書の包紙に水引を懸け、私の前に出し極めて沈痛な語調を以て私を喩され、國家の爲めに出征するは男子の名譽なること、一死以て國恩に報ずべきこと、家族に對しては出征中日給半額を給するが故に心配に及ばぬことなどを述べられたので、私は穴にも入り度い心持でしたが、今更嘘とも言へず、其儘紙包を貰つて、家へ歸りましたところ、親父から火の出るやうに叱られて、直ぐに返して來いと嚴命を受けたのです。

口實を設け砲兵工廠に入る

私も止むを得ませんから、其足で直ぐ技師の自宅を訪問しましたが、留守だといふので、弟さん

にお目にかゝり重々不心得を詫び、尙此際職工が動搖して居るので、私が出た爲めに他の職工に動搖を來さしては不可と思つて、わざと嘘を吐いたのですと抜けました。歸宅すると間もなく技師が歸宅したと言つて迎に來ましたので、さぞ叱られることゝ覺悟を決めて行つて見ますと、案外で却つて用意の周到なるを賞せられて同時に十五錢一時に昇給させられて、留職を懇請されました。一旦訣別を告げて萬歳まで祝はれた私も、此技師の懇請に絆され、恥を忍んで工場へ歸り（林工場を斷り）十一月まで留まりましたが、又々此月口實を構へて此工場を辭し砲兵工廠に入りました。工廠の腐敗と亂脈とは話の外ですが、それは次回に申上ることに致しませう。云々。（大正三年四、五、六月號掲載——友愛新報）

以上の告白でも明瞭である通り、如何に當時の所謂工場なるものが小規模であつたか、工場生活が亂脈無秩序であつたか、又如何に情弊の多いものであつたか、職工の移動が激しかつたかを伺ひ知ることが出來る。今日と雖も全然面目を一新したとはいへないであらう。併し一方に於ては僅かながらも勞働立法の進歩あり、一方に於て勞働者の覺醒と其組織運動の發達あり、蓋し隔世の感がある。今にして思へば、日本の勞働者も亦、長く荆棘の途を歩み來つたものではある。

七　友愛會の生長發達

私は今、創業時代の歴史物語を終らんとするに臨み、其當初よりして中心となつて活躍して來た人々につき一言したいと思ふ。

第一は創立總會に臨んだ人々である。此人々は何といつても日本の勞働運動の草分けであり、陳吳の役目を果した人々に違ひない、創立の當時には皆熱心に働いた、そして會員の增加にも努めた。併し今日の所謂熾烈なる階級意識に眼ざめた人々であつたのでないから、或者は一二年、或者は三五年、或者は八九年、夫れ〴〵その地位の變り、身分の動くにつれて、一人去り二人去つて、今日まで勞働運動の陣營の中に殘つて居るものは一人もない。尤も十五名中死者六名、行先不明二名ある、其他はいづれも生存してゐると思はれるが、明かに居所の分つて居るもの兩三名に過ぎない。今更ながら、歳月は流るゝ水の如く、行く者歸らずの感を深くせざるを得ない。

創立の當初は、會員も少かつたし、從つて事務も少かつた、且つ會員はいづれも興味半分で、誰れも彼れも隙々に來ては、總がゝりで働いた。併し會の形も整ひ、會員も增加するにつれ、片手間の仕事にはあり餘るに至つた。そこで最初ほんの暫くの間は、統一教會の傳導師であつた加藤一夫（後のアナキスト文士）君に手傳つて頂いた。幾許もなくその同窓の友人で、當分遊んでゐるからといつて、高山豐三君を紹介された。高山君の助けてくれたのは約半歲餘りであつた、いふにも足らぬ報酬であつたが、極めて誠實に眞面目に働いてくれた。同君はその後本職の牧師として、靜岡縣の小山町に赴任されたが、間もなく出來た小山支部の顧問として、陰に陽に多大の盡力をされたのである。何でも一日高山夫人が町の朝風呂に行かれた折に、徹夜明けの女工さんが、雪のやうな綿埃を浴びて、風呂にやつて來て、子持の女の如きは、我子の垢を流しつゝ居眠りしてゐる樣子を見て心を打たれたといふのである。それからといふもの、夫妻協力して熱心に同支部の面倒を見てくれたのであつた。高山君はその後兩三年にして米國に赴かれた。今でも在米同胞の間にあつて、福音を傳へて居られる筈であるが、今尙引續き音信を絕たれないで居る。

高山君の後任には、其頃東京電氣の一職工であつた落合吉行君を起用した。同君はその頃尙一青年職工であつたが、文才もあり事務も出來、且つ非常に眞面目な正直な性格の持主であつた。既に友愛會にも入會し、統一教會にも出入してゐた。同君は精勵格勤最も勉められたが、三年の後一身の都合によつて退職して朝鮮に去られた。落合吉行君の後を受けたのが、前記創立總會にも列席した巡査の板倉定四郎君であつた。板倉君は大震災の一兩年前まで友愛會の常務員として働いたが、大正八年以來、横濱出張所を設け、同主任として活躍された。板倉君の後を襲いで主事に就任したのは、卽ち松岡駒吉君である。

松岡君についてはあまりに世に著聞してゐる。現役の闘將で、總同盟を一人で背負つて居る氣概を有する人、且つは大に前途のある人であるから、玆に多くを述べる必要を見ないが、同君を起用して勞働運動の陣營の中に引入れたのは、何といつても私の働きといつてよいと思ふ。

同君はもと北海道の室蘭製鋼所の職工であつた、大正二年、今の總同盟神奈川聯合會長三木治朗君が、東京池貝鐵工所より室蘭製鋼所へ轉勤するや、直ちに友愛會の宣傳を始めたが、松岡君は自重して動かなかつた。入會の後、幾度勸めても容易に幹部にならなかつた。漸く幹事に就任して會計の任務を執るや、俄然として理財の能力を發揮し、支部の基礎を確立するに至つた。當時多數

幹部諸君の協力と活動とによつて、全國に卒先して室蘭支部の會館を建設するに至つたが、同君の力最も大なるものがあるのだ。そこで私は支部の幹部諸君と相謀り、漸く同君の承諾を得、友愛會の本部員として採用すること丶なり、先づ大阪聯合會の主務として働いて貰ふことになつた。一年有餘同君は大阪にあつて刻苦精勵された後、本部主事兼會計として東京に在住すること丶なり、幾多の難關に遭逢して機鋒益々鋭利に、遂に日本勞働運動の重鎭たる今日の地位を贏ち得られたのである。

久留弘三、野坂鐵、酒井龜作（今は興と改稱）三君のことは前に述べた。その頃、友愛新報より引續き「勞働及産業」にかけて、最も熱心なる寄稿家に、池貝鐵工所技師長林一男氏があつた。常に貴重な時を割いては、技術方面の指導にあづかつたのであつた。他の方面の助力者には豐原又男氏があつた。今の東京府職業紹介所長である。

平澤計七君が本部員として入つて來たのもその頃であつた。同君は大震災に死して、不幸なる犧牲者となつたが、藝術的賦能の豐かなるものあり、「勞働及産業」や「友愛婦人」には屢々其作品を發表したが、其才能大に伸びんとして伸び盡さゝるに、空しく長逝を遂げたことは、惜みても餘りある次第である。

平澤君の前には坂本正雄君があつた。「六合雜誌」社員より入つて編輯部員となり、出版部主任として最も活躍した人であつた。志を立て丶早大專門部に入り、卒業の後には、朝日、時事より電通に入り、米國に特派され、居ること數年、兩三年前歸朝して、尙電通社員として活動して居られる。

菊地喜市君、內田茂喜代君の入つて來たのも此頃である。菊地君も東京モスリンの馘首職工であり、多藝多能の士であつた。內田君も巡査部長たりし人、板倉定四郎君の紹介によつて本部員に就任し、專ら外務主任として、大正五、六、七年頃、勞働爭議の解決のために努力された。菊地君今日大阪に在り、東洋紡績の宿舍係として在任、內田君も東京にありて實業に從事して居られる。

油谷治郎七氏も亦、大正五六年頃三四年の間、友愛會の囑托として、主として教育方面に活躍された。同氏は人も知る同志社の出身にして牧職にありし人、在米十數年、哲學社會學等の研鑽を積まれ、その頃歸朝されて、宗教、矯風事業等に活躍されて居たが、特に乞ふて友愛會に入職を求め、私の及ばざるところに協力を願つたのである。私が大正五年再渡米の折には、留守會長の大任

をつとめられた。矢部圓次君、福田龍雄等の或は外務に、或は組織方面に活動されたのも此ゞである。

其頃の常任の一人に別に加藤滋君といふ人があつた。「救世軍の篤信家で、軍曹として常に軍服を着て居た。印刷局職工として友愛會に入り、遂に本部員となつて、福島縣炭坑方面に轉戰し、磐城聯合會の主務として在任數年の後、更に大阪聯合會主務として、松岡君の後を襲ひ、玆にも數年働らかれたが、友愛會が漸く思想運動の渦中に捲き込まるゝやうになるや、同君は遂に友愛會を去つて救世軍に復歸された。今は同軍の士官として社會方面に活躍されて居る。」

友愛會が婦人部を設けたのは大正四年であつた。一時會員三千數百名に達し、機關誌「友愛婦人」を發行し、書記に稲葉捨松氏を迎へ、隆々たる勢を示したのであつたが、數年ならずして寂滅に歸した。會員の大多數が年少なること、長く勞働者として留まらざること、父兄の干渉を受くることは甚しきこと、その他いろ〳〵の原因があるであらうが、婦人の勞働運動は、今尚未成品といふべきである。現在の婦人部は、主として赤松常子氏の献身的努力に基くところ、今日は時勢も違ふし、意氣込も違ふのであるから、先づ以て大磐石と考へてよからうと思ふ。

其頃、友愛會の會勢も亦氣持よく展びて行つた。併し一方彈壓も亦嚴しかつた。官立の工場でも鐵道省の諸工場をはじめ、陸海軍の各工廠共、曾つて一度は支部の設立を見ざるはなかつた。遺憾ながら、當時會員の自覺尚未熟に、鬪志又從つて少く、事多くは私自身で當らなければならないことが多かつたので、足も不足、手も不足で、官憲の彈壓、世間の誤解に對する抗爭力も極めて微かであつた。各所に出來た支部も出來ては潰され、又起つては潰されるといふ有樣で、抗議に出かけて行くと、一應極めて合理的なことをいふが、一旦歸京すると、直ぐその後から陰險なる手段を以て、これを潰滅するといふ有樣で、殆んど手のつけやうがなかつた。

海軍方面の彈壓に對しては、遂に鄕黨の大先輩たる齋藤實大將（現朝鮮總督）の力を藉るべく決意し、一日大將を自邸に訪ねて、詳さに友愛會創立の事情、目的等を懇談し、幸に同大將の諒解を得たので、その舊部下に當る栃内中將（當時海軍大臣加藤友三郎大將の下に次官であつた）に紹介狀を貰ひ、數日の後同中將を海軍省に訪問したが、此小僧何しに來たといつたやうな態度で應接されたのである。私は僅か三十二三歳の一書生に過ぎなかつたが、その横柄の態度に憤慨して、思はず大聲を發して痛論すると、中將は威丈高になつて『オイこゝを何處だと思ふ、海軍省だぞ、聲が高

い」といつて叱咤する、私も負けては居ず、「海軍省は分つて居る、あんまり分らんからサ、聲の高いのは俺の地聲だい！」と怒鳴り返し、闘を排して歸つて來たことなぞもある。

海軍工廠中で、一時最も勢力のよかつたのは、舞鶴の工廠であつた。こゝは一千名以上の會員を數へるまでに立到つた。それは當時の工廠長木村剛中將は私の鄕里仙臺の出身で、早くより私の志を諒解してゐられた。或時の如きは特に工廠員全員を集合させ、鎭守府は參謀長以下、工廠は工廠長以下各將校列席の上で、私に一場の講演を依頼したこともある位であつた。聞くところに依れば其後一週間を出でざるに、本省より友愛會撲滅の訓令が達したさうで、木村中將大に立場に窮したさうである。

海軍關係はかくして命令一下、友愛會の大彈壓となつた。可なり勇悍に抗爭して尊い犧牲を拂はれた諸君もあるが、海軍省を敵とする丈けの力があつたわけではなく、幾許もなくして海軍各工廠には遂に友愛會員の隻影を止めざるに至つた。併し乍ら、海軍も長く勞働運動に無關心なることは出來なかつた。たとへ夫れは特殊の組合なるにもせよ、各工廠を通じて勞働組合の組織は生れ、海軍勞働組合聯盟の誕生を見るに至つたのである。

陸軍方面は海軍程に展びなかつた。併し壓迫は可なり激しかつた。けれども結局各工廠に向上會は組織され、他の官業の組合と聯契して、官業勞働總同盟の結成となつた。夕陽の沈むは淸盛の暴威も施すべきなく、溪流と雖も隻手を以て防ぎ止むべきでない。以上の組合は友愛會の組織の中には入つて來なかつたが、現在最も緊密なる聯盟の友誼を結んで居るのである。

尙ほ玆に傳へなければならぬのは、友愛會海員部のことである。友愛會海員部は今の日本海員組合長濱田國太郎君の献身的の奮鬪によつて大正四年二月横濱に生れ、幾許もなくして神戸に支部を設くるに至つた。濱田國太郎君は聞えたる海員界の元勳で、曾て海員同志會を組織し、推されて其會長となり一時は勢威隆々たるものあり、遂に大正初年に於ける大爭議を惹起すに至り、事志と違つて一敗地に塗みれ、同君は靜かに後圖を期して英氣を養つて居られた。然るに前記板倉定四郎君は兼ねて同君と相知ること深かつたので、大正三年秋、私を促して同君を横濱に訪ひ、同君と初めて相見えたのである。同君は俠骨稜々の士、初對面にして意氣投合するものあり、君も亦私が親しく同君を訪問して語るに海員團體を組織を以てしたることを大に徳とし、玆に瞿然として起つて友愛會に入會し、海員部を創設すべきを以てした。同君は正しく然諾を重んずるの士であつて、忽

ちに舊知の諸君を糾合して先づ其基礎を作り、期年ならずして同志數千を數ふるに至つた。獨り多數の會員を組織し得たるのみならず、多くの鬪士を養成することが出來た。これ等の諸君は今尙ほ日本海員組合の中堅として活躍して居られるのである。私も亦毎月何回となく足を横濱海員部に運び、これ等の諸君と交はり、諸君から海事並に海上勞働問題等について學ぶと同時に、演說に講演に勞働問題の理論的方面や、實際運動等について語つた次第である。後、大正九年伊太利ゼノアに開かれたる第二回國際勞働會議が、海員勞働問題を取扱ふための會議なりしため、これが代表も海員側より選出することゝなつたが、その實際の役割を演じたものは、當時の友愛會海員部であつた。而して此會議が動機となつて、我國にも海員自身の意思發表の機關を必要するこゝとなり、海員團體糾合の大運動起り、遂に大正十年五月七日を以て發會式を擧げた日本海員組合の成立を告ぐるに至つたが、其主唱者となつてこれを取纒めたものは、我が濱田國太郎君を中心とする友愛會海員部（當時改稱して日本海員同盟友愛會）であつた。

これより先き友愛會本部には、大正五年五月を以て本部の制度を改革して、總務部、會計部、出版部、法律部、教育部の五部を設け、各部に部長並に部員を置き、事務の處理に當つた。又別に樞務課、庶務課、外務課を置き、七月には前記婦人部を設くるに至つた。大正六年二月には、主として久留弘三君の努力によつて神戸聯合會、同五月には大阪聯合會が組織された。更に大正七年一月には關西出張所を設けて關西九州地方一圓の運動を統轄し、同二月には本部に人事相談部を設けて、諸種の勞働紛議、身上相談、職業紹介、法律相談、技術相談等の諸事業を開始した。

一方會勢は着々として延びて、全國的に擴大し、北は北海道より南は九州に及び、やがて滿洲地方に及び、大連、旅順、沙河口、撫順、鞍山、本溪湖より更に朝鮮京城等にまで支部並に聯合會の創立を見るに及んだ。

今、靜かに友愛會創立以來の發展の經過を顧みるに、先づ會員數に於ては、大正元年八月一日本會創立の當日に於て、僅かに十有五名を算するに過ぎざりしもの、一週年後の大正二年七月三十一日には一千三百二十六名に增加した。更に二年後の大正三年七月末には、二千人を越え、同四年七月には約七千五百名となり、同五年七月末には一萬六千名に達し、大正六年三月、丁度創立五週年大會を開催せんとしたときには、正會員總數二萬七千名に達せんとしてゐたのである。

勞働爭議について見るに、會長としての私が直接に取扱つた件數合計三十有二件、又外務主任た

る内田茂喜代君の當つたもの十二有件である。（大正六年三月三十一日調）

法律相談に於ては當時法律部長囑托であつた柳田辯護士をはじめ、同部顧問松尾辯護士並に私自身の取扱つたもの約六百件、内鈴木自身の取扱つたもの丈けでも七十二件に及んでゐる。

出版事業の方面を顧みれば、固より薄資であつた爲めに思ふやうな活動も出來なかつたが、機關誌『勞働及産業』創刊號三千部を印刷したるもの、一年後の大正四年十一月號は九千部、二年後の大正五年十一月は一萬九千部、大正六年四月には二萬七千部、別に『友愛婦人』三千部を發行した。單行本としては、『大正五年友愛式懐中日記』及『大正六年友愛式懐中日記』各五千部、『工場法釋義』（拙著）五千部、並に『勞働問題早わかり』（拙著）五千部、及び『友愛會創立五週年史』壹千部である。

「又創立當時より醫療部を設け、運動に好意同情を有する醫師、産婆、看護婦等と特約し、無料又は半額を以て診療、看護を受ける制度を設け、本部より支部に及び、會員及び家族を稗益することは鮮少でなかつた。

又娯樂部を設け、室内遊戯としては休日毎に本部支部に同志集會し、碁將棋又は俳句の運座を行ひ、戸外運動としては屢々遠足會を行ひ、郊外散策を試み、殊に春の花見、秋の紅葉見の如きは、最寄々々に於て好んでやるといふ風であつた。

又方面を分ちて委員を設け、幹部は常に支部名を記したる提灯を用意し、火事其他の場合には必ず見舞に駈付ける習慣を有し、本人病氣又は家族に病人ある場合には常に多少の金品を贈りて慰問し、殊に死亡等の場合には會旗を捧げて葬送するの慣例を有した。殊に幹部員等の死亡に際しては、私自身會を代表して鄭重なる慰問狀を認め、及ぶ限り他の幹部並に會員を率ゐて會葬するを例としたのである。

尚ほ私は此際、友愛會の入會式なるものについて一言したい。

諸君も知らるゝ如く、友愛會はその改組以前に於ては、今日の所謂合同勞働組合乃至一般勞働組合ともいふべく、職業産業の異同を問はずして、全部一團としたものである。尤も各職業別又は産業別の組合員相當多數に上るときは、これを部に分ち又班に分つて統轄した。それが本部支部と分れるのは單に地域的の關係に過ぎなかつた。但し産業の中心地等に於ては、屢々一工場一支部、又は同一職業、若くは同一産業一支部を設け、更に分會に區分し、支部を合して聯合會としたのであつた。そして私は毎年一、二回位づゝ各支部を巡訪して、所謂入會式なるものを行つたのである。

入會式は先づ或る一定の會場に多數の會員を收容する、そして新入會員は全部最前列に列席せしめ、全員の起立を求め、支部幹部を正面に立會せて、私が先づ會の三綱領を讀上げて、簡單にその趣旨を說明し、これに對して服從を誓はしめるのである。斯くて一同の肯づくを見て、私が『諸君の誠意のあることを確かめ、友愛會全員を代表して、玆に本日より正式に諸君に我が友愛會の會員として承認致します。そのしるしとして玆に諸君と私との間に握手の禮を行ひます』と宣言して、小人數の場合には一人一人、多人數の場合にはその代表數名と固い握手を交換する。そして私はその意義を註釋して『古の武士は互に其血を啜つて結盟を誓つたと申します、今日開明の世に於て血を啜るといふが如きは、聊か野蠻に類すると考へますので、握手の禮を以て之に代へることに致しました。凡そ社會の改造に志す今日の勞働者が、其決意の點に於て古の武士に劣つてはならないと思ひます』といふのである。滿場莊嚴の氣に打たれるを常とした。斯くて滯りなく入會の式を終れば、參列の會員大拍手を以て新入會員を歡迎するの意思を表するのであつた。

私はこれを基督教會の洗禮式より思ひついたのである。洗禮式は何ともいへない莊嚴の氣に打たれるものであつて、本人に對しては心氣甦新の感を與ふるものである。入會式に關する諸手續は凡て私の創案にかゝるのであるが、入會式に握手の禮を受けた諸君は、當日何ともいへない感に打たれるといふのであつた。

思へば運動開始以來二十年、その友愛會當時に於て、親しく私と握手の禮を交換したる人々、恐らくは十數萬に上るであらう。その或る人は右し、或人は左し、或は全く所在を失うた人々も少くない。併し今でも私が演說に講演に、若くはその他の使命を帶びて、地方に、海外に旅するとき、よく思ひもかけない人の來訪を受けることがある。これ等の人々に多く當時の友愛會員が居るのである。

尙當時用ひたる形式の一つに役員の選任狀といふものがある。役員は固より一般の選擧に依るを常則とし、濫りに會長たるが故に勝手に人を選定したのではないが、各支部より、今回何の某君、某君を幹事、幹事長、又は委員に選擧したから選任狀を送つてくれといつて請求が來る。さうすると本部の書記は左の如き選任狀(模造紙の稍々部厚のものを用ひた)を書いて送るのである。

選任狀

何々支部正會員　何　誰　君

右本會々則第何條ニ依リ何々支部幹事（又ハ幹事長、委員）ニ選任ス

年　月　日

友愛會々長　鈴木文治　印

別に割印を頭部に押捺するのである。豫め石版刷にしてあるものに支部名や本人の姓名やを書き込むのであるが、これは一寸辭令の形が出來るので、當時の會員はこれを餘程名譽と心得て、屢々額に納めて壁に掲げなどしてあつたものである。今でも古い當時の會員などが面會を求めに來る時往々その頃の「辭令」を携へて來て見せる人などがある。又當時長年勤續の幹部や、特に功勞ある人を表彰するために、楯形七寶燒の功勞章を作製し、支部の總會又は本部大會等の場合に表彰狀と共に交付したものである。

いづれも今より見れば、兒戲に類する方法として冷笑する人もあらう、併し乍ら少くとも當時に於ては最も眞面目なる一つの運動方法であつて、且つ效果の顯著なるものがあつたのである。

斯くして友愛會の創業時代は過ぎて行つた。

八　米騷動

米騷動と勞働運動とは、一見何の關はりもないやうに見える。米騷動は一時限りの飢民の暴動で勞働運動は永續的な、自覺せる勞働階級の解放運動である、其間に何の聯絡があらうかと。併し乍ら事實は決してさうでない。「米騷動は民衆に『力』の福音を傳へた、勞働階級に自信を與へた、多數團結して事に當れば、天下何事か成らざらむと、即ち米騷動は無產階級の自卑心を一掃した、自屈心を拂拭した、そして力强い自信力と自尊心とを與へた。米騷動は、我國勞働運動の拍車となつて其活躍を前へ推進めた。加之、現に米騷動の最中に、所在勞働爭議が勃發して、見事なる成功を收めて居る。」茲に私が米騷動の叙述のために、數頁を割くは、穴勝徒爾ではないと思ふ。

大正三年に勃發した世界大戰は、四年五年六年七年と續いた。世に戰爭程大なる浪費はない、軍需品は勿論一般の物資は急激に缺乏を訴へて來た。需給の原則は、物資の缺乏に比例して其價を暴騰させた。交戰諸國は夫れ〳〵食糧管理政策を採つたに拘らず、食糧品價は驚くべき暴騰を告げ

た。戦禍の巷を去ること遠き我國に於ても、諸物價が瞬く間に戦前の二倍三倍の騰貴を示したのみならず、分けても米價の如きは、四十圓臺より五十圓を突破して、白米の小賣相場は圓に一升何合といふに達した。物價が急激に暴騰しても賃銀收入はその割合に殖えはしない。殊に政府が米價の調節を怠つたといふので、中産以下の民衆には怨磋の聲が揚げられて居た。然るに眼中私利私益の外何物もなき成金者流や、投機者流は、盛んに買占めや賣惜みを行つて、嫌やが上にも物價を釣り上げた。是に於てこれ等の輩に對する反感憎惡はいやが上に高まつて行つた。

大正七年八月三日、突如として富山縣中新川郡西橋町に於て、女房連數名の米屋襲撃のことあり翌四日には東水橋町に於て、これ又婦人連六七名が集つて米屋を襲撃し、瓦礫を投げ戸障子を破壊した。これ等の一度新聞紙上に報道せらるゝや、天下響應、全國到るところに於て、彼の米騒動が演ぜらるゝに至つたのである。東京、大阪、名古屋、和歌山、呉、神戸、京都、廣島、岡山、其他大小の都市で多少の暴動を見ないところはなかつた。戒嚴令は到る處に布かれ、殆んど内亂狀態を現出するに至つた。

名古屋では九日頃から多少不穏の形勢が見えたといふが、數日の中に暴動と化し、示威運動の行列は一大暴行隊と變じ、群衆は戸毎に投石し、巡査の交番や取引所を襲撃し、亂暴狼藉到らざるところなかつたが、軍隊の出動によつて漸く鎮靜した。しかも警官の負傷者七十餘名に達した。

廣島縣の三次町では、電氣會社を襲撃し、器物を破毀し、電線を切斷し、市内はために暗黒となり、米屋や富豪の燒撃を行つたが、着劍の銃器を以て先頭に立ち、指揮したるもの二十名あつたといふ。

神戸の暴動は最も激しいもの〻一つであつた。八月十二日、四五萬人の群衆は湊川公園に集り、社會主義者藤田浪人氏等の指揮の下に、鈴木商店並に神戸新聞社の燒打を行つた。警官の出動一千名に及んで何の效果も擧げ得ず、止むなく軍隊の出動を見るに至つたが、十三日未明に至るも尚鎮定を見ず、翌日も亦四、五萬の暴民湯淺商店を襲撃した。

富山市では巨商蓮沼家を襲うて米の廉賣を迫つた。岡山市では澤田家を燒打ちし、岡崎家倉庫を破壞した。和歌山市は宇治田家を襲ひ、二萬五千圓の出金を、又宮本家より二萬圓寄附を誓はしめた。到るところ梵鐘を亂打し、篝火を焚いて氣勢を揚げ、狂暴の限りを盡した。

恰も此暴動の眞最中である。神奈川縣の富士瓦斯紡績會社、同日本鋼管會社、日本製綱株式會社

姫路市の運送會社の仲仕等は一齊に起つて同盟罷業を宣言し、要求を提出した大部分これを貫徹することが出來た。

又此暴動の末期に至り九州炭田の暴動を惹起した。十七日には山口縣沖山炭礦に暴動起り、數千名の暴徒、午後六時より翌朝四時に至るまで米屋、警察署を襲撃し、坑主の邸宅に放火し、遊廓を全部燒拂ひ、商店の商品を掠奪した。翌日軍隊は止むなく最後の手段としてこれに發砲し、四十餘名の暴徒の奪還を防ぎ、掠奪した酒食を逞しうせる暴徒を鎮壓したが、坑夫側に十二名の死者と多數の負傷者を出した。而して此一ケ月の暴動によつて檢擧されたもの一千五百名に及んだ。

更に十七日、福岡縣の峰地炭礦を初めとして、糸田炭礦、八幡製鐵所、管牟田炭礦、方城炭礦等の同盟罷業的暴動は、十日と經たぬ間に附近十五六の炭礦に傳播した。而してその多くは兇暴の限りを盡したが、凡て軍隊の鎭壓に遭ひ、大概は賃銀値上の要求を貫徹したのである。

此時の暴動は其範圍三府三十數縣に亘つたことゝて、其犧牲者も亦頗る夥しい數に上つた。先づ騷擾罪で罰せられた者四千二百二十一人、殺傷六十一人、强盜二百六十八人、脅喝六百七十四人放火百四十一人、建造物毀壞四百三十九人、竊盜二百四十八人、脅迫二百三人、其他三百五十六人合計七千八百十三人である。殊に記憶すべきは放火犯百四十一人中、死刑の宣告を受けた者少くなかつたことである。神戸兵神館と鈴木商店とを燒打ちしたものは、悉く死刑を宣告されたが、彼等が控訴上告の後どうなつたか、其後の樣子が分らない。恐らく新聞紙は發表の自由を持たなかつたであらう。

日本では明治以後、屢々狂暴な示威運動や暴動があつた。日露戰役後、講和條約の條項が不服だといつて起した日比谷の示威運動と引續いての燒打ち事件は、筆者も帝大入學のために田舍から出京して來た計りで、眼の當り目擊したものである。それは隨分勇敢な猛烈なものではあつたが、同時に愛國的色彩が濃厚であつて、且つ其性質は純然たる政治的なものであつた。從つて無產階級が特權階級に反逆する階級鬪爭の性質に乏しかつた。然るに此時に行はれたる米騷動は、其名も「米」といふ字の付く通り、經濟的性質を帶ぶるものであつた。此意味に於て米騷動は他の暴動や示威運動に對して特色を有するものである。

米騷動の結果、富豪階級が心中恐怖を感じたことは甚大なものであつた。そこで彼等は先を爭うて米穀日用品の廉賣を行ひ、三井、岩崎の各百萬圓醵出をはじめ、邸園の公開や慈善事業の開始等